

窪田大垣内遺跡(第1次)発掘調査報告

研究紀要第18-5号

2009（平成21）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、三重県教育委員会が、主要地方道津関線道路改良事業に伴い平成5年度に実施した津市大里窪田町に所在する窪田大垣内遺跡の第1次埋蔵文化財発掘調査の結果を再整理し、報告するものである。
- 2 調査は下記の体制で行った。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
主事 服部芳人 臨時技術補助員 山口順也 研修員 船越重伸
- 3 報文執筆は服部芳人、山口順也、河北秀実が担当し、全体の編集は服部芳人、河北秀実が担当した。
- 4 地図及び遺構実測図は、国土調査法の日本測地系による第VI系座標を基準とし、挿図の方位は座標北を示している。なお、当遺跡周辺の磁北は平成6年現在で、座標北からN 6° 40' W振れている。
- 5 遺構埋土及び土層の土色、土質は肉眼観察による。
- 6 遺構表示略記号は下記のとおりである。
SH 竪穴住居 SB 掘立柱建物 SE 井戸
SD 溝 SK 土坑 P (Pit) 柱穴、小穴
- 7 遺構番号は、現地調査時の番号を使用しているが、本書では主な遺構のみを掲載した。
- 8 木製品の樹種同定は、パリノサーヴェイ株式会社による。
- 9 本書で報告した記録図面類、写真及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管・管理をしている。

本文目次

例言

目次

I	前言	(服部芳人)	1
1	調査に至る経過		1
2	調査の方法		2
3	調査日誌(抄)		3
II	位置と環境	(服部芳人)	4
1	位置と地形		4
2	歴史的環境		4
III	層序と遺構		5
1	A地区	(服部芳人)	5
2	B地区	(服部芳人)	16
3	C地区	(山口順也)	22
IV	遺物		25
1	A地区の土器・土製品	(服部芳人・河北秀実)	25
2	B・C地区の土器	(服部芳人・河北秀実)	41
3	瓦	(服部芳人)	42
4	木製品	(服部芳人・河北秀実)	47
V	結語	(服部芳人・河北秀実)	49

I 前 言

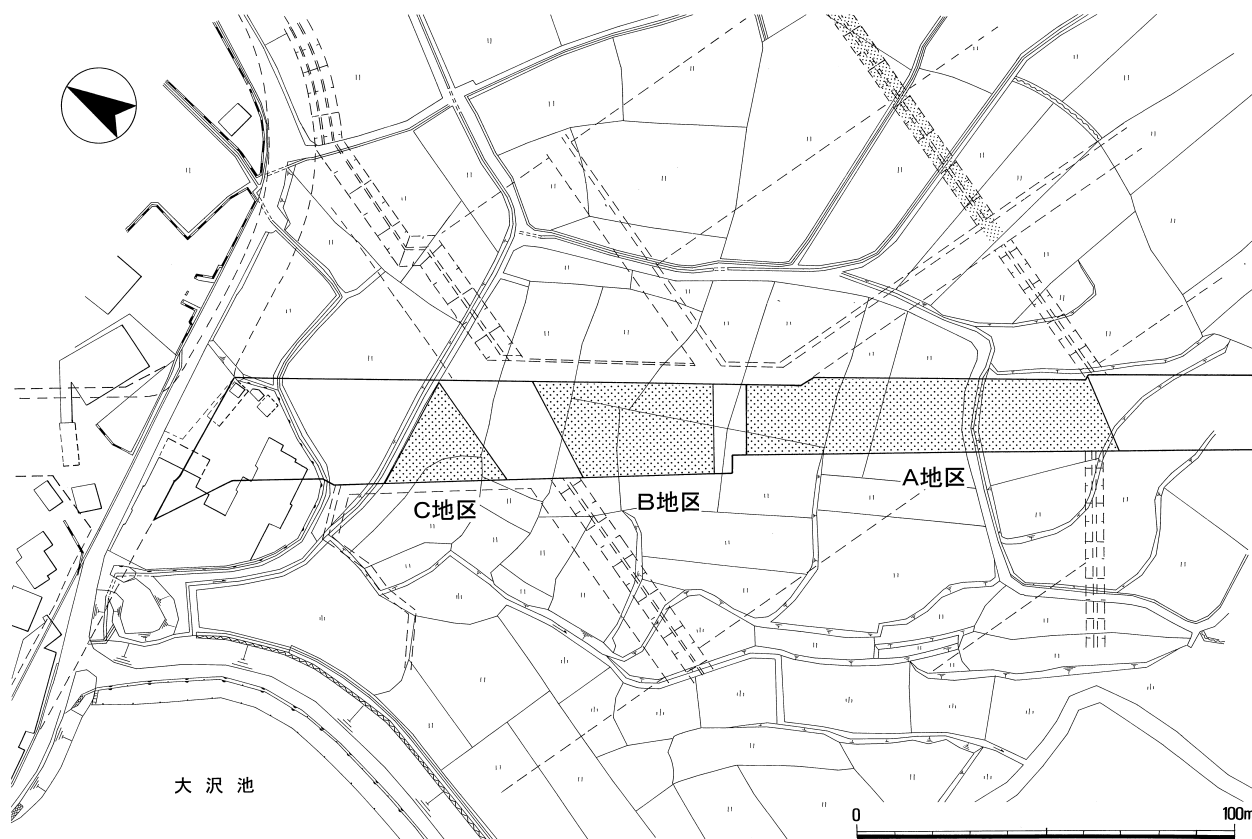
1 調査に至る経過

県道津関線は、亀山市関町から南東方向に県庁所在地である津市の北部白塚町に至る道路で、県道番号は10号とされている。この道路は、江戸時代に整備されたいわゆる伊勢別街道⁽¹⁾とほぼ重複する。近年、津・松阪方面への通勤道路としても利用され、特に国道23号との合流する白塚町周辺は、非常に交通渋滞の激しいところでもある。そこで、この交通の緩和と一般国道23号中勢バイパス（中勢道路）へのアクセス道路の機能を兼ねた道路の建設が計画されることとなった。また、三重県総合文化センター建設も関わって早期完成の必要に迫られていた。この道路改良事業は、県庁の西から北西方向に大里窪田町字橋垣内地内までが先行して行われ、発掘調査は平成4年度に橋垣内遺跡の本調査計4,000㎡とトレンチ調査を実施した。窪田大垣内遺跡の本調査対象面積は最終的には5,850㎡となったが、平成5年度は第1次調査として3,150㎡の本調査を実施

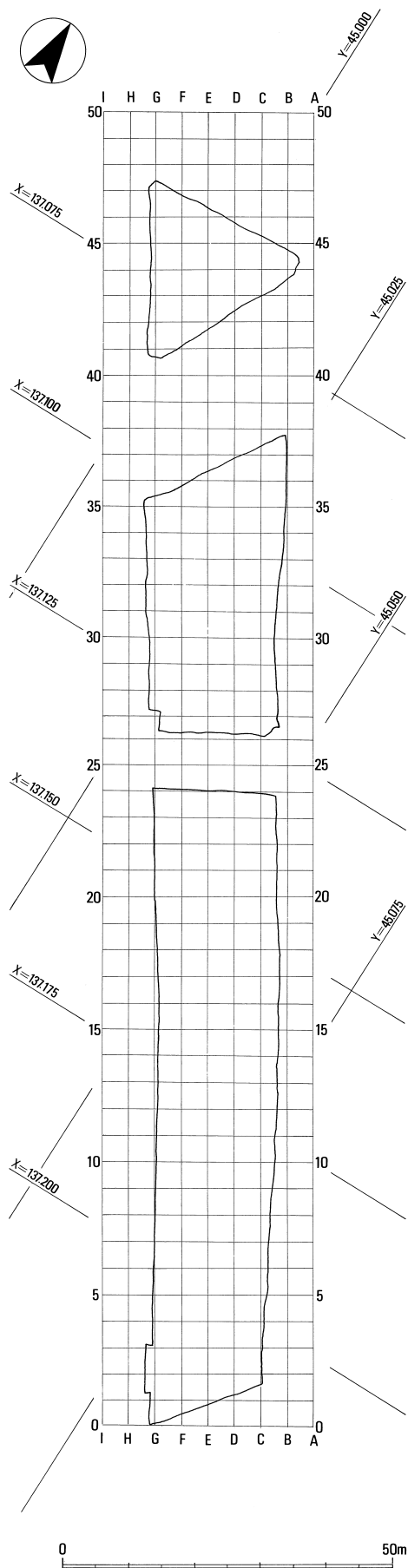
した。なお、残り2,700㎡は、平成8年度に第2次調査⁽³⁾、平成9年度に第3次調査として実施している。

窪田大垣内遺跡は、行政上は大里窪田町字池の下に所在する。平成2年度に実施した県道津関線道路改良事業に伴う分布調査で新しく見つかった遺跡である。遺跡の名称は、小字名をつけることを原則としているが、分布調査時点で字大垣内を中心として遺跡の広がりが見込まれ、平成3年度に実施した試掘調査および今回の本調査においても大垣内遺跡の名称を踏襲した。なお、字大垣内地内では平成元年度に津市教育委員が安養院跡⁽⁵⁾の発掘調査を行っている。今回の調査は、字池の下地内ではあるが、大垣内遺跡として報告する。

発掘調査は平成5年5月6日から開始し、12月16日に現地での調査を終了した（次年度以降調査の試掘調査を含む）。半年以上の長期にわたる期間中、冷夏・長雨・台風の襲来など調査に支障をきたす場面がたびたびあった。特に降雨のたびに調査区壁が崩壊したり、航空写真測量の日程が1か月以上も延期した。また遺構保存のために土のう袋・ビニール



第1図 調査区位置図 (1:2,000)



第2図 調査区地区割図 (1:1,000)

シートを使用した。その上げ下げなど作業に従事していただいた地元の方々には大変な御苦勞をおかけた。

2 調査の方法

今年度の調査区は、総延長約200mに及び、その間にほぼ直交する排水溝、農道などが走る。そのため南からA・B・Cと3地区を設定し、A→B→C地区の順で調査を行った。調査面積はA地区2,000㎡、B地区850㎡、C地区300㎡である。調査範囲が道路建設部分に限られ、また南からは道路整備が行われていることもあり排土の置場に苦慮した。A地区の排土をB地区に、B地区の排土をA地区にと、いわゆる打って返しの方法を採らざるをえなかった。しかし、幸いにもA地区からC地区にかけての道路センター杭が一直線であったため、そのラインを基準線として4m×4mの小地区を設定した。各小地区には、基準線に直交して数字、基準線に沿ってアルファベットを与えた。なお、各小地区の南東隅の杭をもってその名称とした。

発掘作業は、表土をバックフォーで除去し、その後は人力によって遺物包含層掘削及び遺構検出を行った。その際、ベルトコンベアを東側に直列に並べ南からL字状に継ぎ足すことで1グリッドずつ遺物包含層掘削及び遺構検出を繰り返し行った。排土の置場には悩みはしたが、遺構の検出など1日1日の作業はスムーズに進むことができた。

調査面積が広いこともあり、航空写真測量によって遺構全体の図化を行った。個別の遺構については必要に応じて20分の1および10分の1の図を作成しポイントを航空写真測量に落とすことで合体を図った。航空写真測量は、前述のように打って返しの調査であったため、A地区が8月23日、B・C地区が10月26日と2回にわたって行われた。その際、前年度調査の橋垣内遺跡A地区との合成のため三重県境界杭(赤杭No.1.2)を基準にして国土座標を算出した。また、次年度以降調査に関わって調査予定地外に3点国土座標値を落とした。

A地区の航空写真測量の予定は、7月27日であったが、降雨に祟られ1か月以上も実施が遅れてしまった。このため、何度となく水抜き作業を行い、

遺構の大きさ・深さが多少変わってしまった感がある。この教訓を生かしB・C地区においては土のう袋で、特に柱穴はその保護に努めた。ただし、径50～60cm程の柱穴でさえ5～6袋が必要で、航空写真測量前に取り除く作業は非常に辛いものがあった。しかし、水が溜まることを防ぎ、遺構の形を崩さないためには、有効な方法であった。

出土遺物は、必要に応じて出土状況の実測及び写真撮影を行い、地区・遺構別に取り上げた。その後、埋蔵文化財センターへ搬入し、実測・写真撮影等室内での整理作業を行い、保管した。

3 調査日誌（抄）

5月6日	A地区バックフォーで表土除去	7月27日	雨のため航空測量中止
5月7日	井戸1基を確認	8月1日	A地区現地説明会
5月10日	道具の搬入・地区の設定	8月6日	プレハブ移転
5月13日	A地区表土除去が終了	8月17日	B地区バックフォーで表土除去
5月17日	作業開始・排水溝作り	8月23日	A地区航空測量
5月19日	東壁断面図作成	8月26日	B地区の地区設定
	SD1より軒丸瓦出土	8月30日	B地区の掘削作業開始
5月21日	SD6より木製品出土	9月9日	台風のためプレハブ浸水間近
	包含層より緑釉陶器片出土	9月16日	SK39・40・41検出
5月25日	SD6木製品出土状況図作成	9月17日	SD49・51検出
	SD1より円面硯出土	10月4日	C地区バックフォーで表土除去
5月26日	SD6完掘	10月12日	C地区の地区設定
5月28日	SE11輪郭検出	10月19日	C地区写真撮影
6月1日	SE11より「池」墨書土器出土	10月26日	B・C地区航空測量
	SD1より土馬出土	11月1日	B・C地区作業終了
6月2日	SE11より「饗」へラ書土器出土	12月16日	次年度以降調査部分試掘調査
6月3日	SE11より木製品出土		(服部芳人)
6月4日	SE11より櫛出土		
6月10日	南側排水溝より軒丸瓦出土 (SD1上層にあたる部分)		
6月11日	SH26平面図作成		
6月15日	SB106・107検出		
6月21日	SK35検出		
6月25日	SB110検出		
7月6日	E24ピット1より墨書土器出土		
7月9日	SB110写真撮影		
7月13日	航空測量のための現地説明会		
7月16日	航空測量入札		

II 位置と環境

1 位置と地形

三重県は南北に細長く、その長さは約170kmにも及ぶ。その北西部には伊勢平野が広がり、東に伊勢湾を望む。県庁所在地である津市は、この伊勢平野のほぼ中央に位置し、市内を北から志登茂川・安濃川・岩田川・雲出川などが東流する。志登茂川は、その源を津市芸濃町の丘陵に発し、蛇行しながら南東方向に流れ、高野尾・大里地区の洪積台地を開折する。中流域の大里窪田町付近より川幅を徐々に広げ、沖積平野を形成し、伊勢湾へと流れ込む。この志登茂川の右岸には、標高約30m前後の第三紀層奄芸層群の低丘陵が、安濃町からJR津駅付近まで延び、この低丘陵に付属した洪積台地が沖積平野に舌状に突き出した先端に窪田大垣内遺跡は所在する。標高は約12～15mで、遺跡の南には志登茂川の支流である毛無川が流れる。なお、遺跡の中心は、津市

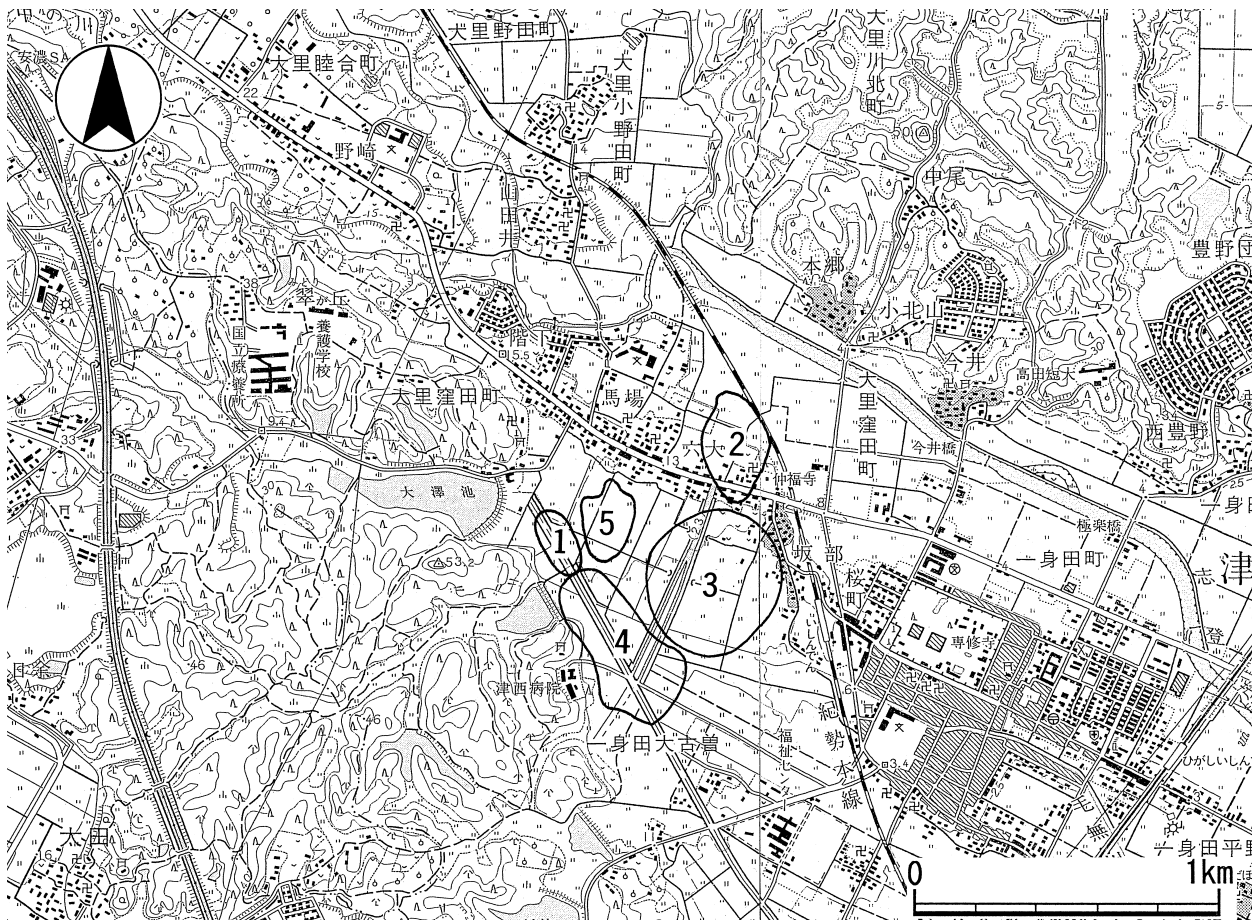
大里窪田町字大垣内であると考えられるが、今回調査した範囲の多くは字池の下地内であり北側にわずかながら字平尾前地内も含まれる。

2 歴史的環境

大垣内遺跡周辺は、近年県営ほ場整備事業、一般国道23号中勢道路建設事業、団体営ほ場整備事業などの開発に伴う発掘調査が数多く行われており、地域の歴史が徐々に明らかにされつつある。こうした発掘調査結果に基づいた大里窪田町周辺の通史的な歴史的環境についてはすでにいくつかの既刊の報告書⁽⁶⁾で述べられているので参照されたい。

今回調査された窪田大垣内遺跡(1)は、奈良時代から平安時代を中心とする遺跡である。大垣内遺跡の所在する大里窪田町一帯は、古代遺跡の密集地帯であり、この時代に限れば、周辺の遺跡として六大A遺跡⁽⁷⁾(2)、六大B遺跡⁽⁸⁾(3)、橋垣内遺跡⁽⁹⁾(4)、安養院跡⁽¹⁰⁾(5)を挙げることができる。

(服部芳人)



第3図 遺跡位置図(1:25,000)

Ⅲ 層序と遺構

1 A地区

(1) 層序 (第5図)

南北約100m、東西約20mの南北に長い、ほぼ長方形の調査区で、面積は約2,000㎡である。基本的層序は、上から順に暗灰色土の耕作土(1)、淡黄灰色土の床土(2)、暗灰色砂質土の旧耕作土(3)、暗灰色粘質土の旧耕作土(4)、黒褐色粘土の遺物包含層(7)、明黄色粘土の地山である。遺物包含層は、南にいくほど厚く20~30cm程堆積する。地山は北にいくほど黒色を呈し粘質を帯びており、また北から南にかけて傾斜し、その比高差は約1mである。

(2) 遺構

検出した主な遺構は竪穴住居、掘立柱建物、井戸、溝、土坑などで、古墳時代後期から鎌倉時代にかけて

てのものであるが、中心となる時期は奈良時代から平安時代である。

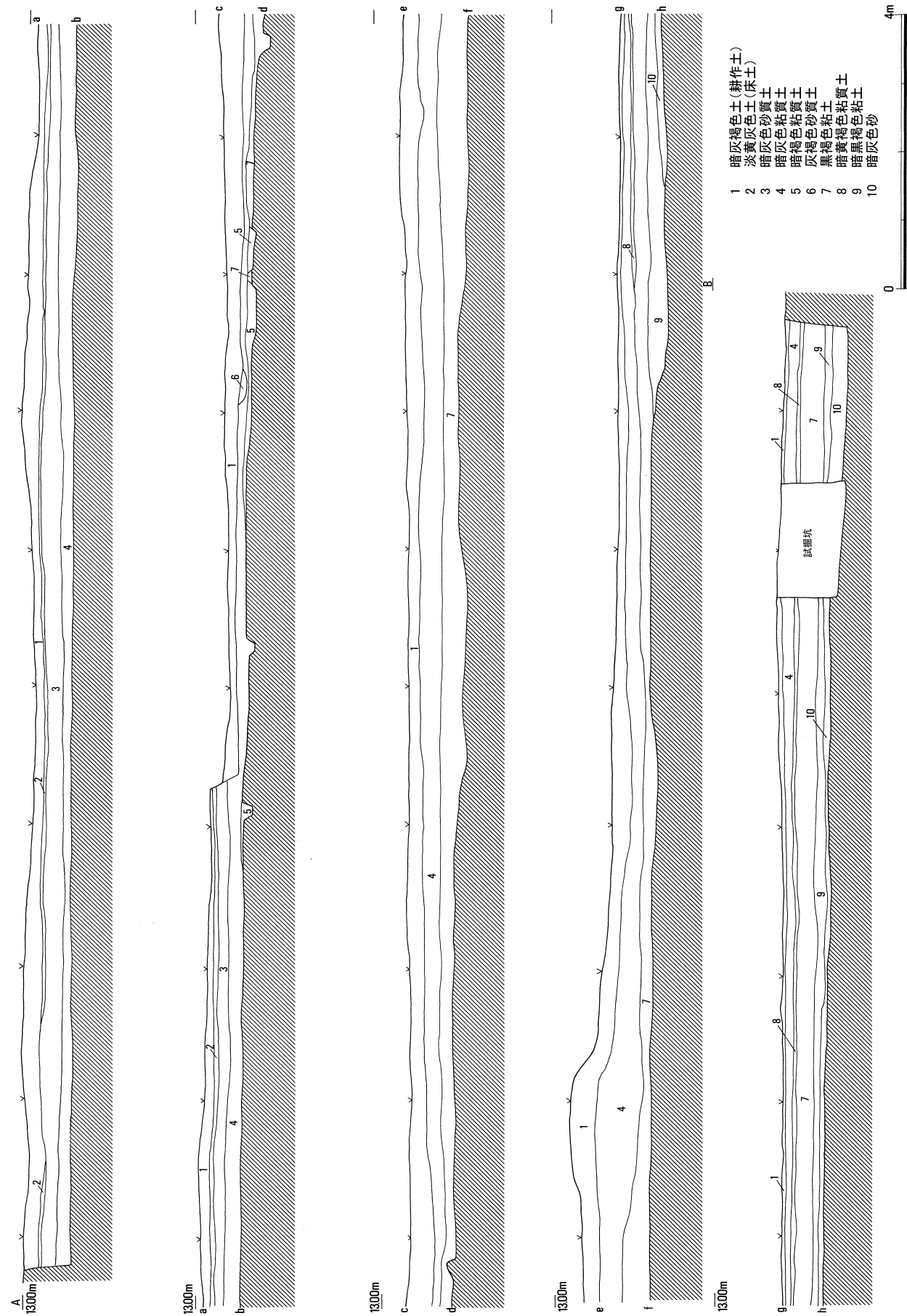
①古墳時代の遺構

ア 溝

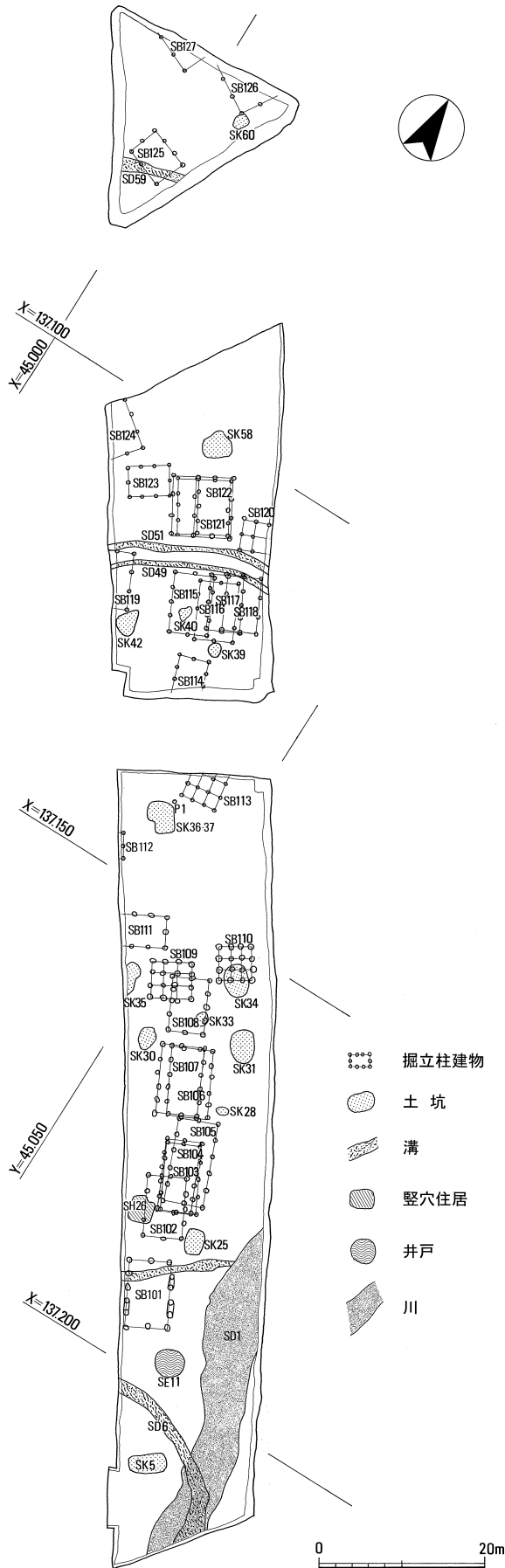
SD6 (第8・9図) 調査区の南寄りで検出した。調査区西壁より弧を描きながら、南壁へ向かって約20m延びる。幅は1.5m~2.5m、深さは1.0m~1.4mと幅のわりには深い溝である。断面は、V字状に掘り下げ、そののち壁は、ほぼ垂直になる。底部は、平坦である。この溝は、前年度の平成4年度に調査された橋垣内遺跡A地区の旧河道SR1につながるものと思われる。南側の半分程度は、SD1と重なるが、切り合い関係によりSD6の方が古い。南壁断面から判断すると、SD6の上部を削り取り、ほぼ同じ所にSD1が流れたことがうかがわれる。SD6の最下層は青灰色の砂で、溝が掘られた時期には、ある程度流れがあったものと思われるが、そ



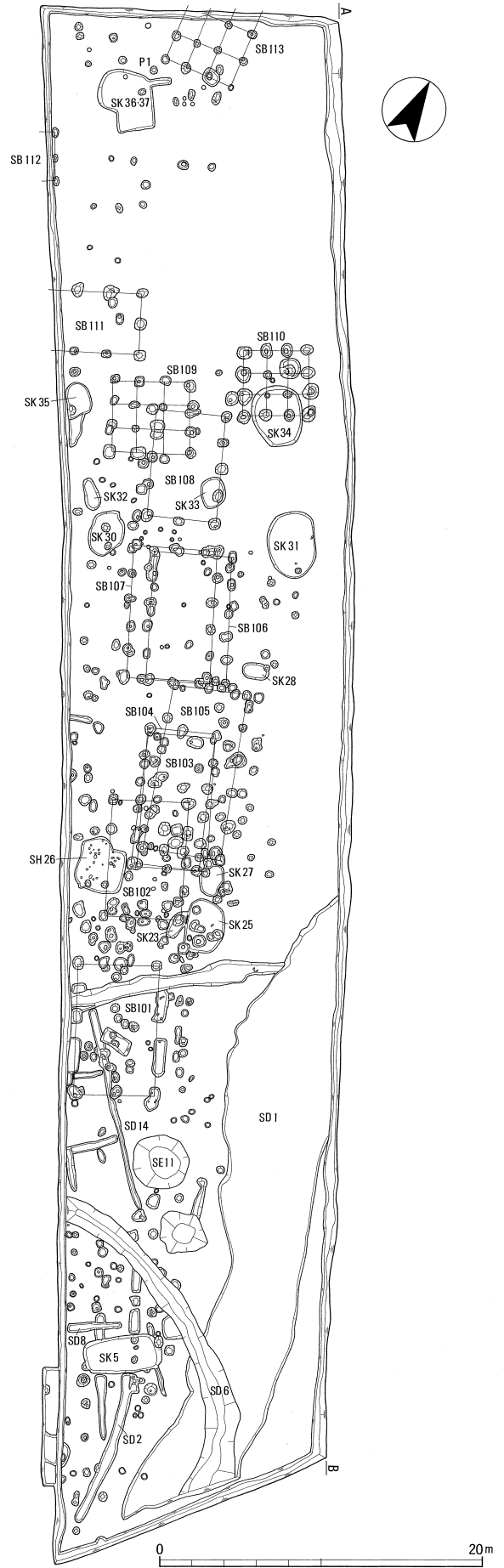
第4図 遺跡地形図 (1:5,000)



第5图 A地区土层断面图(1:80)

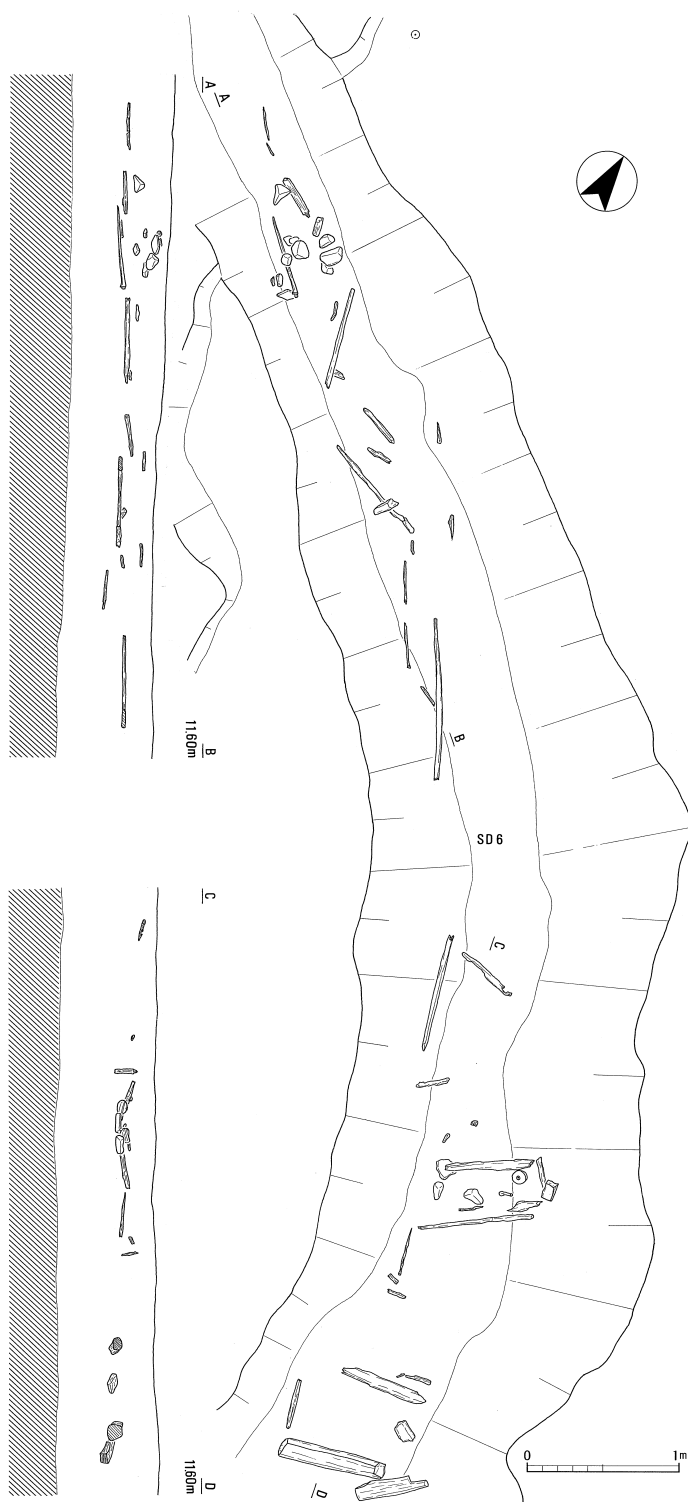


第6図 遺構配置図 (1:800)



第7図 A地区遺構平面図 (1:400)

のすぐ上層は、暗青灰色もしくは黒灰色の粘土質の埋土である。この層から建築部材をはじめ、杵、棒状木製品などの木製品が多く出土した。また、この層とそれより上層から、土師器碗・甕、須恵器杯・杯蓋・高杯等、6世紀後半から7世紀初頭にかけての遺物が出土した。



第8図 SD6遺物出土状況図(1:50)

イ 土坑

SK25 調査区のほぼ中央で検出した。南北3.2m、東西2.4mで、隅丸の長方形の土坑である。深さは、検出面から20cmである。出土遺物は土師器甕(190~194)、須恵器杯蓋(196・197)などである。

②奈良~平安時代の遺構

この時期の遺構としては、竪穴住居1棟、掘立柱建物12棟、井戸1基、溝1条、土坑などがある。

ア 竪穴住居

SH26 (第10図) 調査区の中央西寄りで検出した。平面形は、南北3.2m、東西2.8mのほぼ正方形である。北西側が張り出しているが、他の土坑と重なっている可能性もある。内部に柱穴を4カ所確認したが、南東の柱穴は掘立柱建物SB102の柱穴と重複する。深さは検出面から10cm程度と浅く、底部は平坦である。周溝、カマドと思われる痕跡は確認できなかった。出土遺物には、土師器杯(166)、土師器甕(168)、底部に墨書がある須恵器杯(169)などがある。

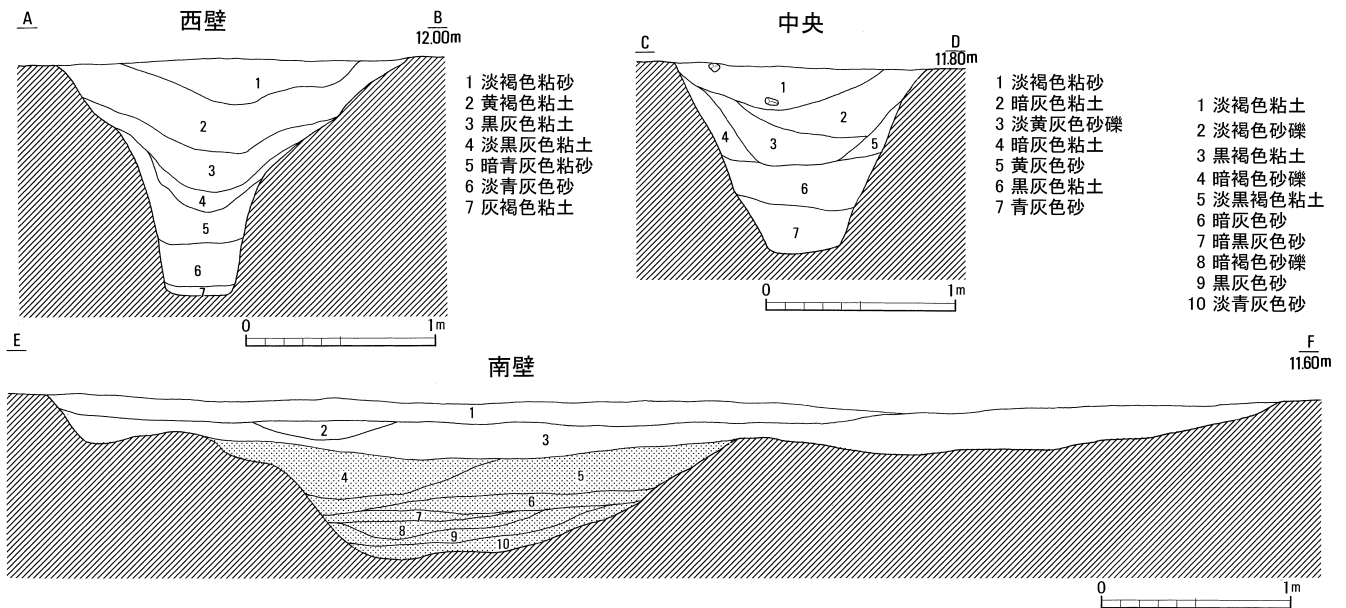
イ 掘立柱建物

掘立柱建物からの出土遺物の多くは細片で、磨滅も著しく時期の決定は難しい。しかし、建物の棟方向、距離間及び柱穴の切り合い関係から大きく4つの時期の変遷が考えられる。

第I期

SB102 (第11図) 調査区の中央西寄りで検出した。西側柱筋で、竪穴住居SH26を切る。4間×2間のN26°Wの南北棟で、桁行7.2m、梁行4.8mである。柱掘形は、隅丸の方形で50cm~60cmとやや大きい。柱間は、桁行が1.8mの等間、梁行は南側で2.4mの等間、北側で2.1m+2.7mと不揃いである。出土遺物は、土師器細片のみである。

SB108 (第12図) 調査区の中央、北寄りで検出した。建物の北西部分を第III期のSB109によって切られる。4間×2間のN26°Wの南北棟で、桁行6.6m、梁行4.2mである。柱掘形は、隅丸の方形で60cm程度と大きく、柱痕跡が確認できたものもある。柱間は、桁行が1.65mの等間、梁行が2.1mの等間で、SB102と東側柱筋を揃える。出土遺物は、土師器甕、須恵器短頸壺がある。



第9図 SD 6土層断面図 (1:40)

第II期

SB104 (第11図) 調査区の中央、SB103とほぼ重なる形で検出した。柱穴の切り合い関係により第III期のSB103より古い。4間×2間のN27°Wの南北棟で、桁行8.25m、梁行4.2mである。柱掘形は、基本的に隅丸の方形であるが、小さめの円形もある。柱間は桁行が北から1.95m+2.1m+2.1m+2.1m、梁行が2.1mの等間である。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器蓋がある。

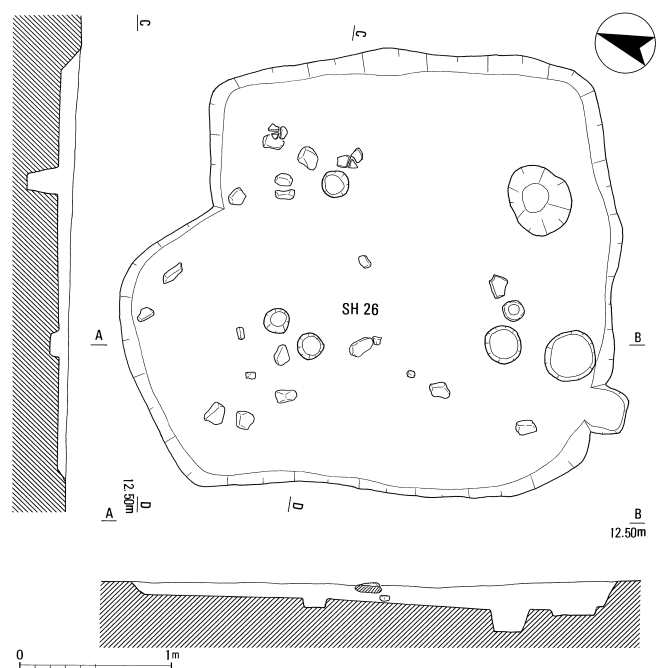
SB106 (第13図) 調査区の中央、SB104の北3mの位置で検出した。5間×3間のN27°Wの南北棟で、桁行7.95m、梁行4.8mである。柱間は、桁行が北から1.5m+1.65m+1.65m+1.65m+1.5m、梁行が西から1.65m+1.65m+1.5mである。東側、北側、南側の三方向の柱間が1.5mとなる。なお、SB104と西側柱筋を揃える。出土遺物は、土師器、須恵器の細片にとどまる。

SB110 (第14図) 調査区の北東で検出した。3間×3間の総柱建物で、桁行・梁行ともに4.05mで、柱間も1.35mの等間である。他の掘立柱建物と比べて、柱掘形は概ね四角形で大きく、特に側柱は1m近い。倉庫であったと考えられる。柱筋方向はN33°WとSB104・106とやや異なるが、西側柱筋と、SB106の東側柱筋がほぼ揃うことから同時期のものとして扱う。出土遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕がある。

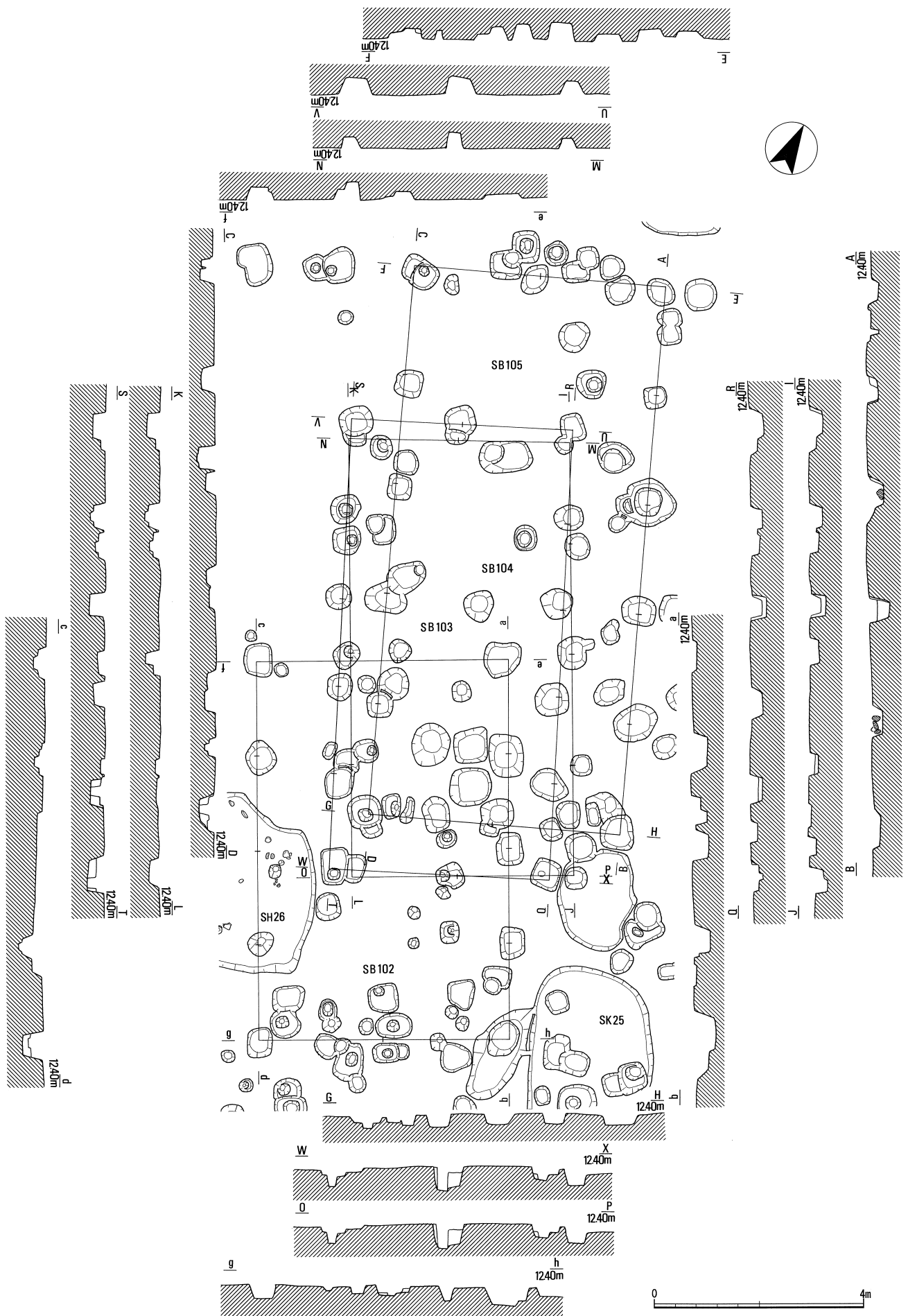
SB111 (第14図) 調査区外に伸びるため、規

模は確定できないが、3間以上×2間の建物である。桁行方向はE28°Nで、南側柱筋は、SB110の北側柱筋と揃う。出土遺物は、土師器甕、須恵器杯蓋がある。

SB112 調査区北寄りの西壁沿いで検出した。西側の大部分が調査区外になるため全体の規模は不明である。柱を2間分確認しただけであるが東西棟と思われる。柱間は、1.5mの等間で、E33°Nである。SB110と方向が一致するため、この時期にいられた。



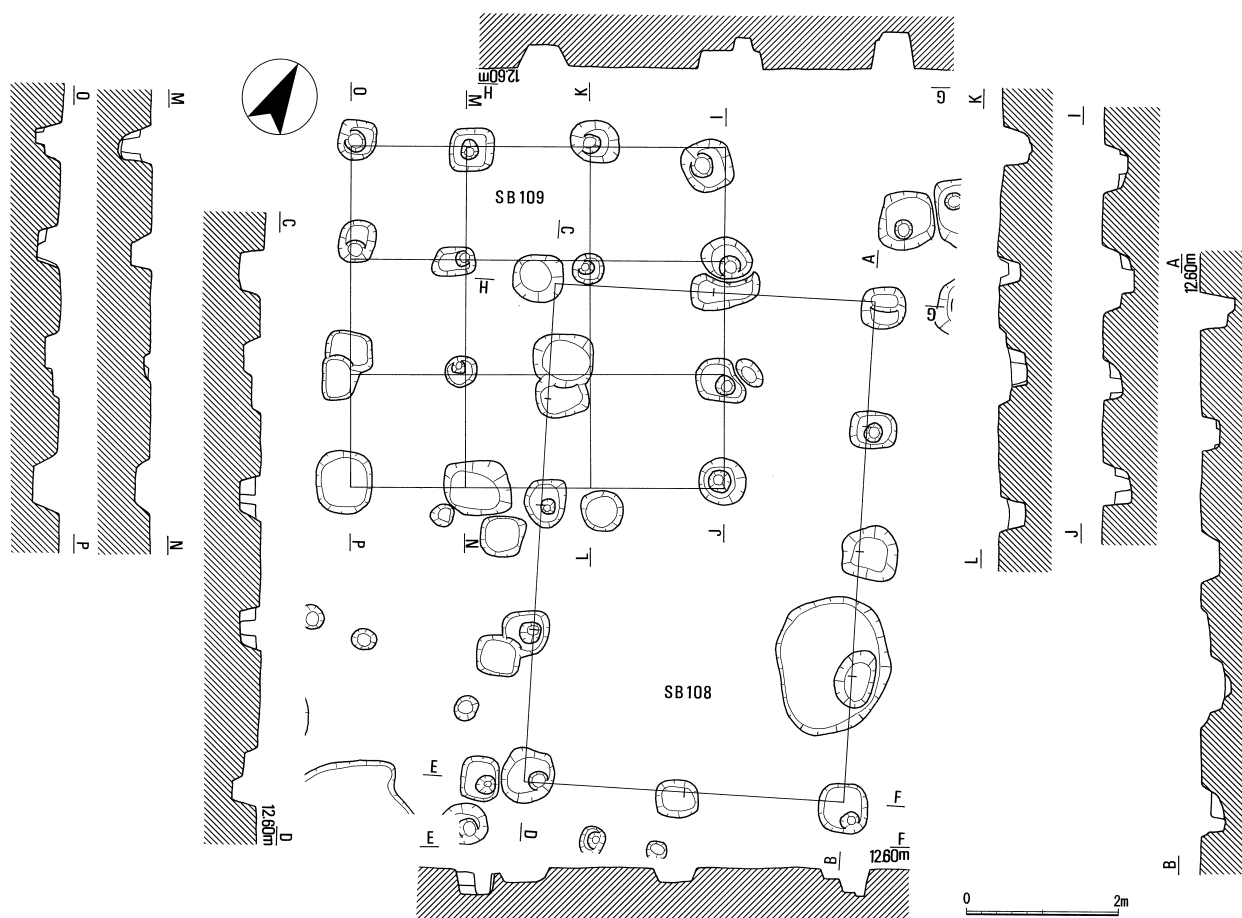
第10図 SH 26遺物出土状況図 (1:50)



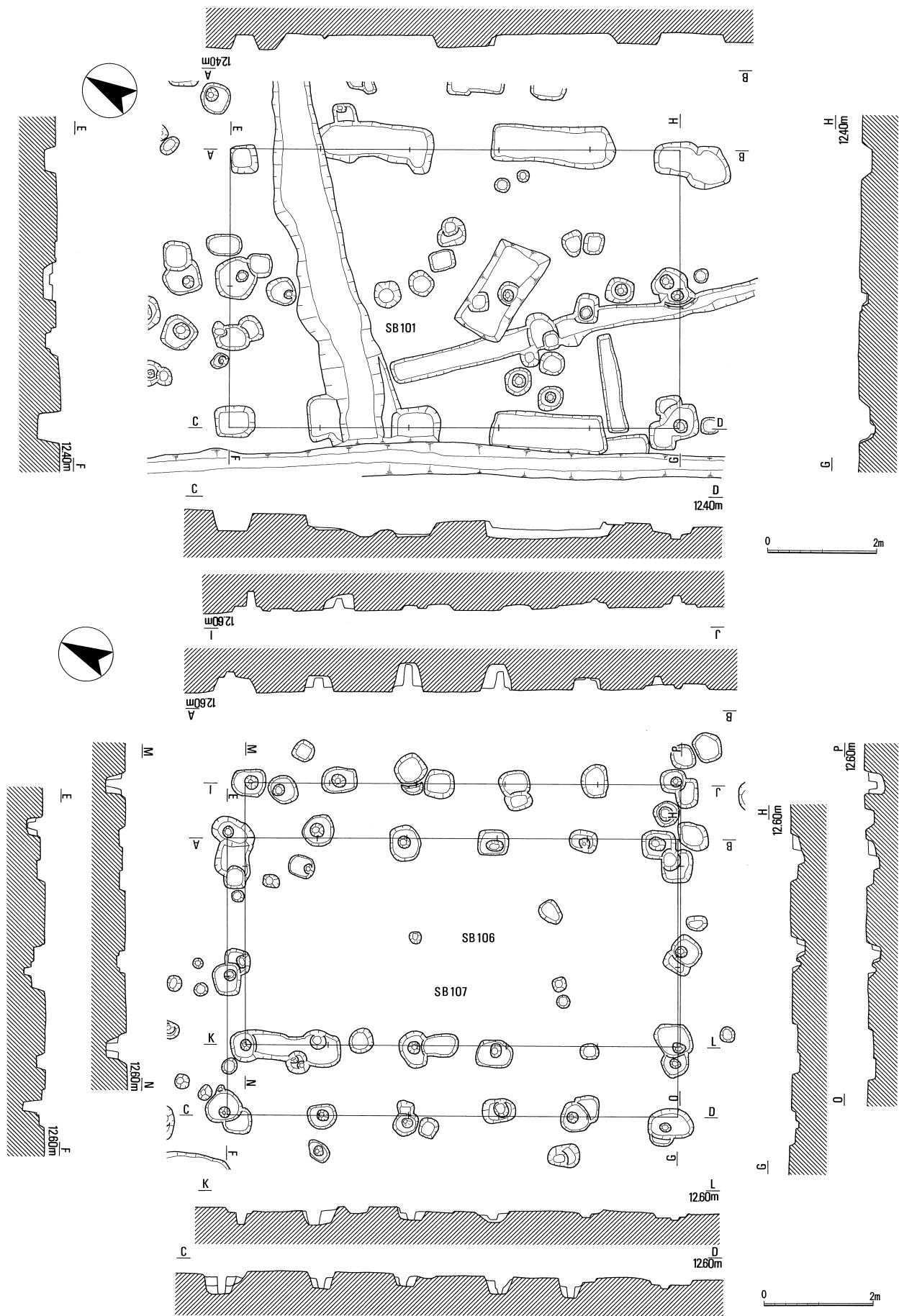
第11図 SB102~105実測図 (1:100)

遺構 番号	規 模			柱 間 寸 法 (m)		棟方向	面 積(m ²)	時 期	備 考
	間 数	桁行(m)	梁行(m)	桁 行	梁 行				
SB101	5×2	8.25	5.1	1.65等間	2.55等間	N30° W	42.075	第Ⅲ期	溝もち
SB102	4×2	7.2	4.8	1.8等間	2.1+2.7 2.4等間	N26° W	34.56	第Ⅰ期	
SB103	5×2	8.55	4.2	1.8+1.65+1.65+1.65+1.8	2.1等間	N23° W	35.91	第Ⅲ期	
SB104	4×2	8.25	4.2	1.95+2.1+2.1+2.1	2.1等間	N27° W	34.65	第Ⅱ期	
SB105	5×2	10.5	4.8	2.1等間	2.4等間	N22° W	50.4	第Ⅳ期	
SB106	5×3	7.95	4.8	1.5+1.65+1.65+1.65+1.5	1.5+1.65+1.65	N27° W	38.16	第Ⅱ期	
SB107	5×2	8.25	5.1	1.65等間	2.55等間 2.4+2.7	N27° W	42.075	第Ⅲ期	
SB108	4×2	6.6	4.2	1.65等間	2.1等間	N26° W	27.72	第Ⅰ期	
SB109	3×3	4.95	4.5	1.8+1.65+1.5	1.5等間	E 30° N	22.275	第Ⅲ期	
SB110	3×3	4.05	4.05	1.35等間	1.35等間	N33° W	16.4025	第Ⅱ期	
SB111	3以上×2	3.9以上	3.9	1.95+1.95+?	1.95等間	E 28° N	15.21以上	第Ⅱ期	
SB112	?×2	不明	3.0	不明	1.5等間	E 33° N	不明	第Ⅱ期	
SB113	2以上×3	3.3以上	4.5	1.65+1.65+?	1.5等間	N9° W	14.85以上	鎌倉	

第1表 A地区掘立柱建物一覽表



第12図 SB108・109実測図 (1:100)

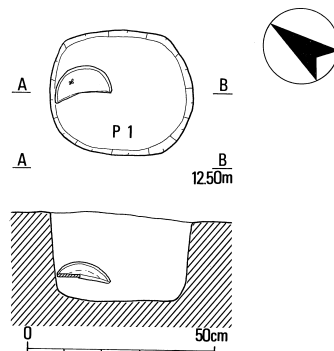
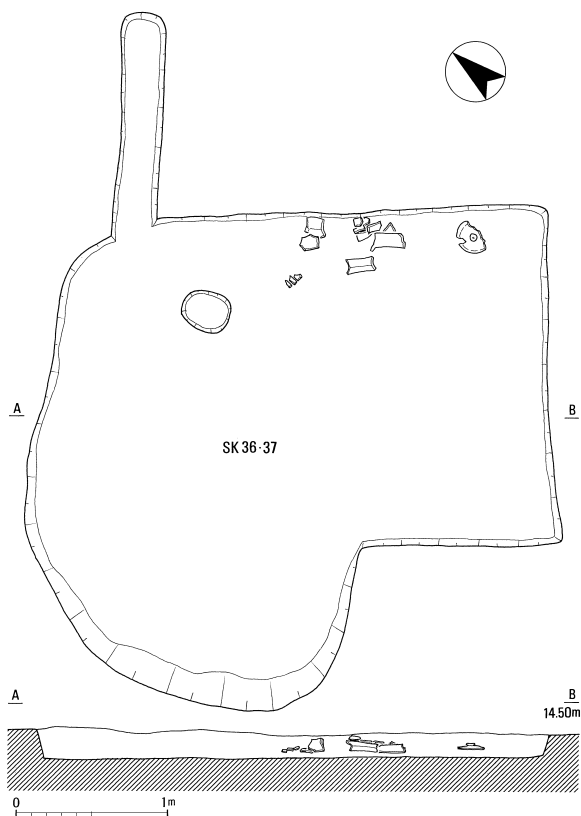
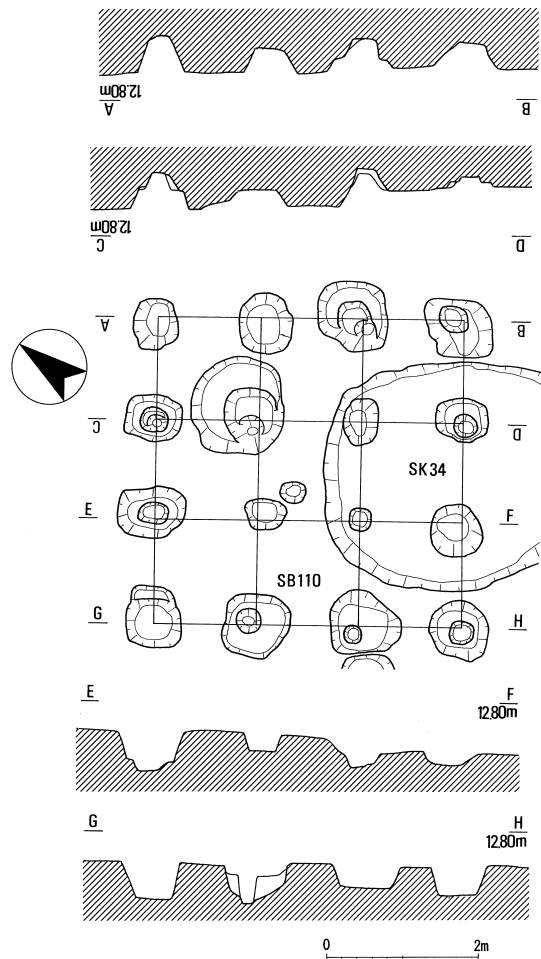
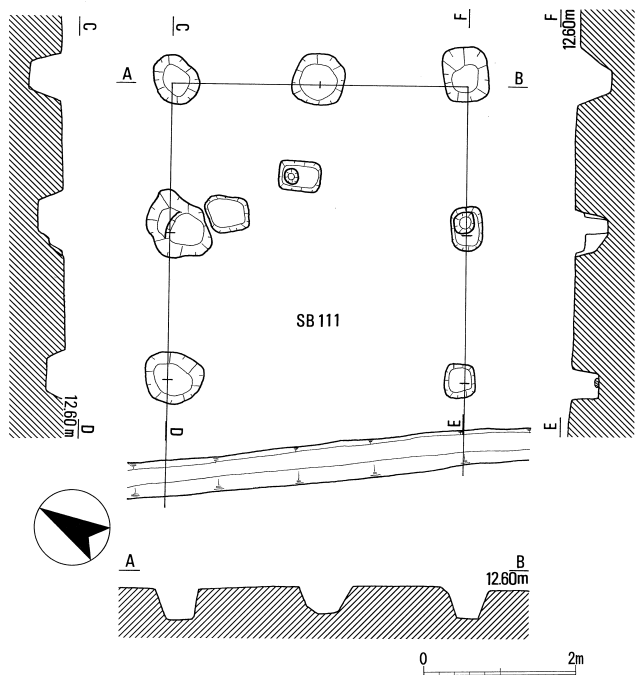


第13図 SB 101・106・107実測図 (1:100)

第Ⅲ期

SB101 (第13図) 掘立柱建物としては、一番南に位置する。5間×2間のN30°Wの南北棟で、桁行8.25m、梁行5.1mである。桁行に「溝もち」

技法を用いる。隣り合う柱間に浅く溝を掘るが、柱掘形そのものは確認できない。横木を添えるために掘ったものであろうか。柱間は桁行が1.65mの等間、梁行が2.55mの等間である。出土遺物は、土師器甕、



第14図 SB111・110, SK36・37, E24pit1 実測図 (SB111・110は1:100, SK36・37は1:50, E24pit1は1:20)

須恵器杯蓋・甕がある。

SB103 (第11図) 調査区の中央、SB104とほぼ重なる形で検出したが、柱穴の切り合い関係から第Ⅱ期のSB104より新しい。おそらく建て替えであろう。5間×2間のN23°Wの南北棟で、桁行8.55m、梁行4.2mである。柱間は、桁行が北から1.8m+1.65m+1.65m+1.65m+1.8m、梁行が2.1mの等間である。出土遺物は、土師器甕、須恵器杯蓋・甕がある。

SB107 (第13図) SB106の西、ほぼ重なる形で検出したが、柱穴の切り合い関係から第Ⅱ期のSB106より新しい。5間×2間のN27°Wの南北棟で、桁行8.25m、梁行5.1mである。建物規模は、SB101と同一である。出土遺物は、土師器細片にとどまる。

SB109 (第12図) 第Ⅰ期のSB108の北西を切る形で検出した。3間×3間の総柱建物である。桁行4.95m、梁行4.5mで、やや東西に長く、柱通

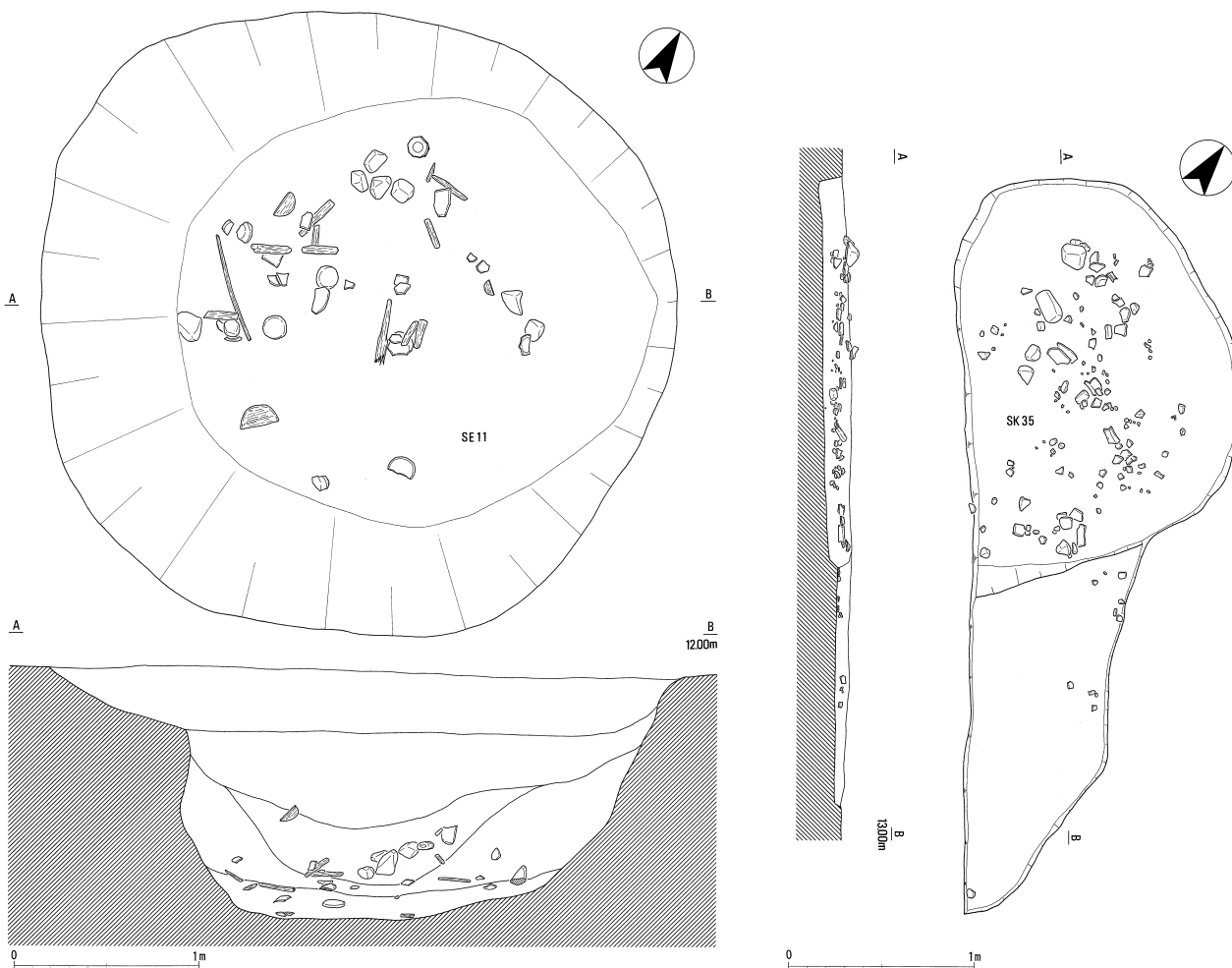
りはあまり良くない。柱間は、桁行が東から1.8m+1.65m+1.5m、梁行が1.5mの等間である。方向はE30°NになりSB101と西側柱筋を揃える。出土遺物には、土師器甕片、須恵器杯蓋などがある。

第Ⅳ期

SB105 (第11図) 調査区のほぼ中央で検出した。5間×2間のN22°Wの南北棟で、桁行10.5m、梁行4.8mである。柱間は桁行が2.1mの等間、梁行が2.4mの等間である。出土遺物は、土師器細片、須恵器杯蓋がある。建物面積はA地区最大である。

ウ 井戸

SE11 (第15図) 調査区の南寄りで検出した。直径約3.3m、円形掘形の素掘りの井戸である。東側は垂直に掘り、西側は袋状になる。深さは約1.4mである。埋土は、大きく5層に分けられるが、Ⅰ・Ⅱ層にはほとんど遺物は含まれず、Ⅲ層以下に木製品・土器が入り込む。特にⅢ層は、暗青灰色粘質土



第15図 SE11, SK35遺物出土状況図 (1:40)

で、木質を多く含む。木製品には、曲げ物・櫛 (445) などがあり、また「饗」とヘラで線刻された土師器杯 (257) や「池」と墨書された土師器杯 (259)、「大三」と墨書された灰釉陶器椀 (268) など出土した。その他、土師器甕・皿、黒色土器などもある。時期は、平安時代中期を中心に使用されていたものと思われる。

エ 溝

SD1 調査区の南寄りで見出した。中央東壁より、やや蛇行しながら南壁へと流れる。幅は5～6m、深さは検出面より30～40cmと浅い。溝というより自然流路的な性格のものであろう。埋土は大きくⅡ層に分けられ、上層 (Ⅰ層) は淡褐色粘質土、下層 (Ⅱ層) は黒褐色粘質土である。この溝からは、おびただしい量の遺物が出た。できるかぎり、上層下層の遺物の分別を試みたが、埋土が似かよって、また浅い故に厳密に分けることはできなかった。出土遺物には、土師器椀・杯・甕・高杯、須恵器杯蓋・杯・高杯・甕・壺などをはじめ軒丸瓦、円面硯、土馬といったものもある。古墳時代から奈良時代にかけて流れていたものと思われる。

オ 土坑

SK30 調査区中央西寄りで見出した。楕円形状の土坑で、長径2.8m、短径2.0mである。深さは検出面より10cmである。出土遺物に、須恵器杯蓋 (186)、須恵器杯 (187) などがある。

SK35 (第15図) 調査区北寄りの西壁沿いで見出した。土坑の西側は調査区外になるため、全体の規模は不明である。平面形は、南北2.2m、東西1.5mの隅丸の四角形を呈する。深さは検出面より約20cm程度と浅い。埋土は暗褐色粘質土で、炭化物や人頭大よりやや小さめの石も含まれる。出土遺物は細片がほとんどであるが、平安時代の土師器甕、黒色土器がある。

SK36・37 (第14図) 調査区の北端で見出した。平面形は、東側と南側は角張り、壁も垂直に落ちる。西側および北側は楕円形状になり、壁もすり鉢状に落ちる。2つの土坑が重なっている可能性が考えられるが、切り合いは確認できない。南北方向に3.3mの大きさである。東側の辺に沿うように、遺物の出土があった。土師器蓋 (183)・甕 (184)・

甗片などである。東側および南側の四角張った部分には、竪穴住居であった可能性もある。

カ ビット

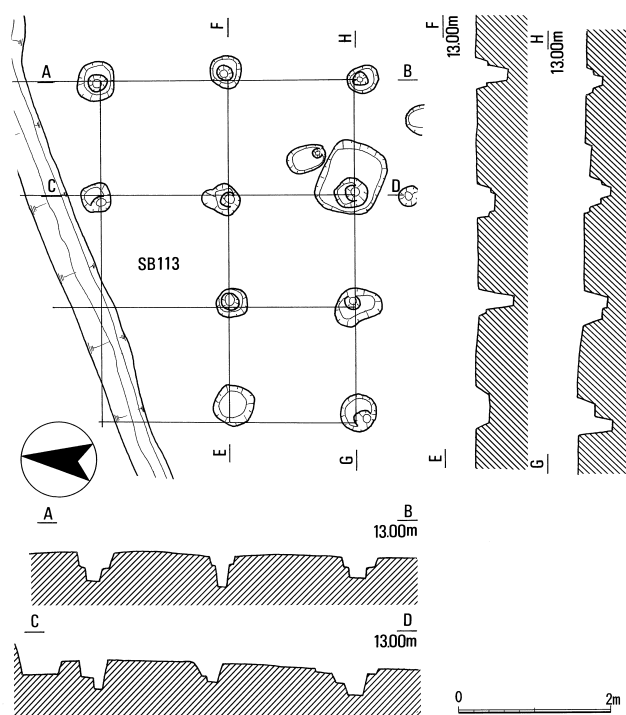
E24・Pit1 (第14図) 調査区の北端で見出した。径40cm程度の小穴であるが、建物の柱穴にはならない。この小穴の底に近い部分から須恵器杯蓋 (189) が出土した。約2分の1の破片であるが、内側に墨書がほどこされている。この墨書と同じ文様の墨書土器はSH26でも出土している。意図的に埋納されたものかもしれない。

③鎌倉時代の遺構

ア 掘立柱建物

SB113 (第16図) 調査区の北端で見出した。調査区北壁で規模は確定できないが、2間以上×3間の総柱建物であろう。N9°Wの南北棟であろうか。A地区の他の建物に比べ柱穴が小さく、円形を呈する。出土遺物は、土師器細片にとどまる。

(服部芳人)



第16図 SB113実測図 (1:100)

2 B地区

(1) 層序

B地区は、A地区から北へ8mほど離れたところより調査区が始まる。南北に40m～45m、東西に約20mの台形状の調査区で、面積は約850㎡である。基本的層序は、耕作土の下に淡褐色粘質土の遺物包含層が約20cm～30cm程堆積する。その下が、明黄色粘土の地山となる。

(2) 遺構

①奈良時代から平安時代の遺構

この時期の遺構としては、掘立柱建物11棟、溝、土坑などがある。

ア 掘立柱建物

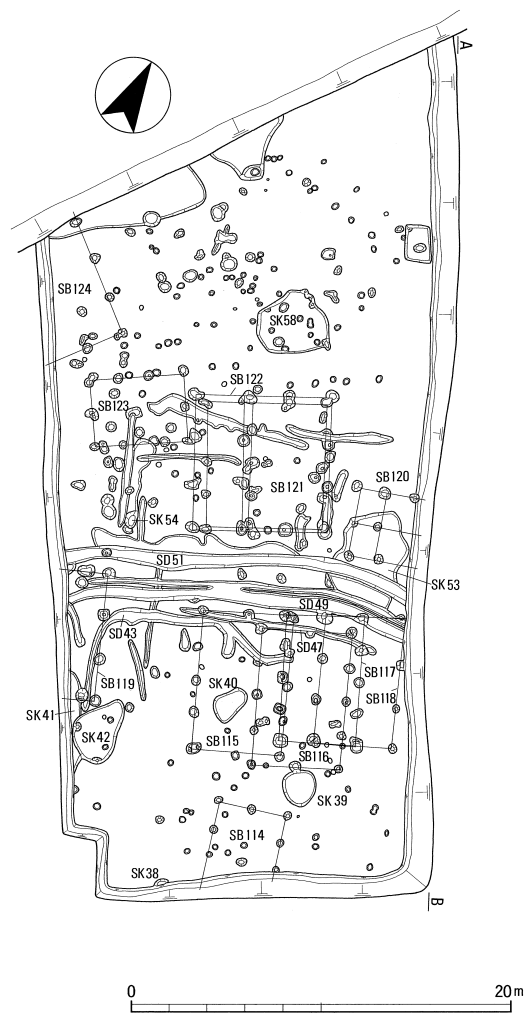
掘立柱建物からの出土遺物はA地区同様に細片が多く、磨滅も著しいため時期の決定は難しい。しかし、建物の棟方向、距離間及び柱穴の切り合い関係からA地区で考えた4つの時期の変遷がおおむね踏襲できそうである。ただし、A地区の掘立柱建物との距離が200m以上離れるものもあり、必ずしも一致するものとは考えていない。

第I期

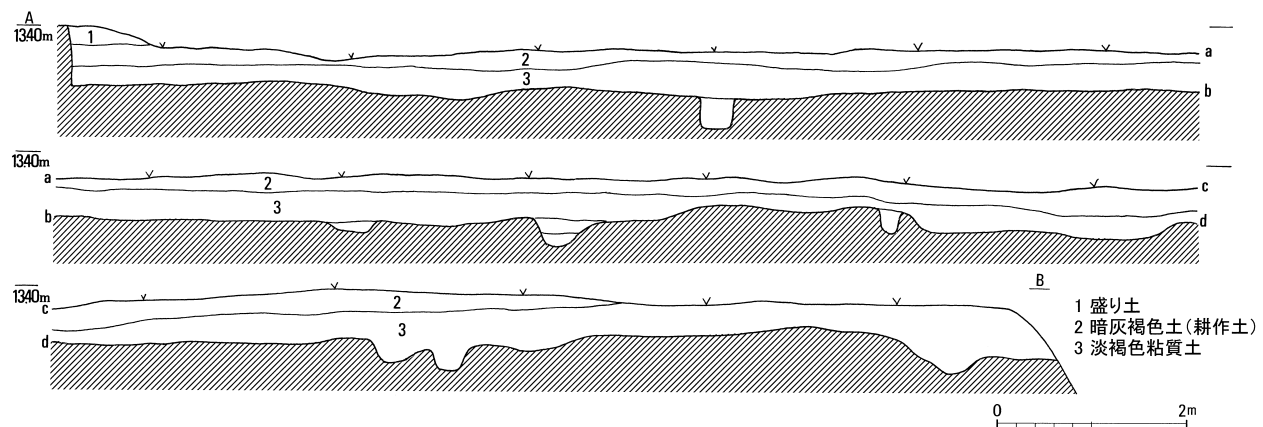
SB115 (第19図) 調査区中央南寄り、4棟の掘立柱建物が集中するが、その中でも最も西側で検出した。4間×2間のN24°Wの南北棟である。桁行7.2m、梁行4.8mで、柱間は桁行が1.8m等間、梁行が2.4mの等間である。柱掘形は径50cmの円形で、深さは約20cmである。柱穴からの出土遺物は、土師器細片のみである。東側柱筋がA地区検出のSB102の西側柱筋と揃い、同じ規模の建物であ

ることから、この時期のものと考えた。

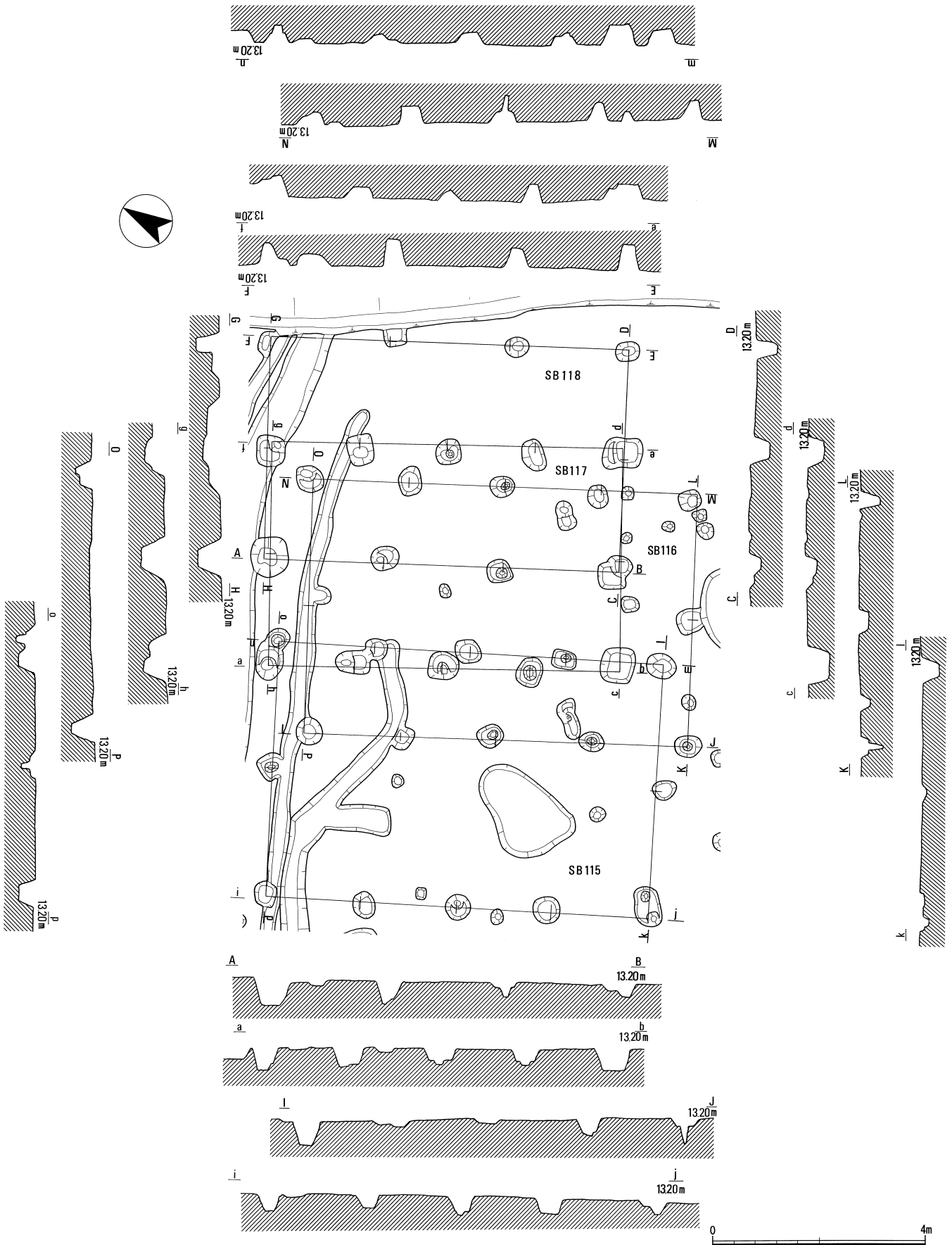
SB119 (第20図) 調査区の中央、西壁沿いで検出した。建物が調査区外に延びるため規模は確定できないが、3間×2間以上の南北棟であろう。棟方向は、N24°Wである。桁行6.75m、梁行2.1m以上で、柱間は桁行が2.25m等間、梁行が2.1m



第17図 B地区遺構平面図 (1:400)



第18図 B地区土層断面図 (1:80)



第19図 SB115~118実測図 (1:100)

である。出土遺物は、須恵器杯蓋、土師器細片で時期は明らかではないが、SB115と棟方向が一致するためこの時期とした。

第Ⅱ期

SB116 (第19図) SB115の東で重なる形で検出した。4間×2間のN26°Wの南北棟である。桁行7.2m、梁行4.8m、柱間は桁行が1.8mの等間、梁行が2.4mの等間である。SB115と建物規模、柱間寸法が同じである。柱穴の切り合い関係はないが、同時存在は無理であり、似かよった時期に建て替えが行われたものと思われる。出土遺物は、土師器片が少量である。

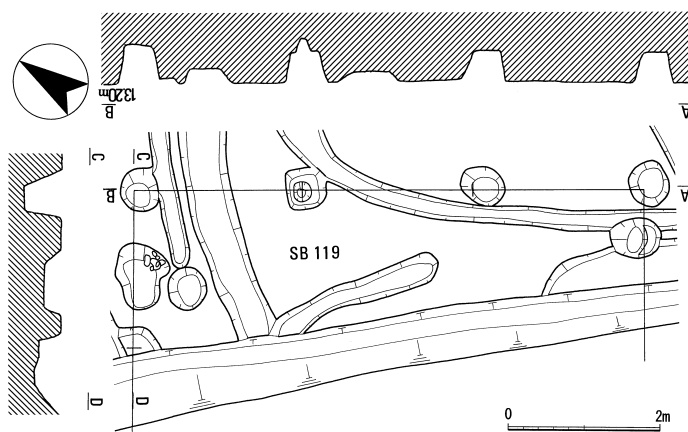
SB118 (第19図) 調査区の東壁際、4棟が集中する最も東で検出した。3間×2間のN26°Wの南北棟である。桁行6.75m、梁行4.2m、柱間は桁行が2.25mの等間、梁行が2.1mの等間である。第Ⅲ期のSB117と重なる柱穴が多いが、切り合い関係からSB118の方が古い。出土遺物は、須恵器杯蓋、土師器片のみであるが、棟方向がSB116と同じであることから、この時期のものとした。

第Ⅲ期

SB117 (第19図) SB116とSB118との間に位置する。4間×2間のN27°Wの南北棟である。桁行6.6m、梁行4.8mで、柱間は桁行が1.65mの等間、梁行が2.4mの等間である。柱掘形は隅丸の方形で、50cm~60cm程度あり、柱痕跡を確認できた

ものもある。出土遺物は、須恵器杯蓋、土師器細片のみであるが、柱穴の切り合い関係により第Ⅱ期のSB118より新しく、この時期のものとした。

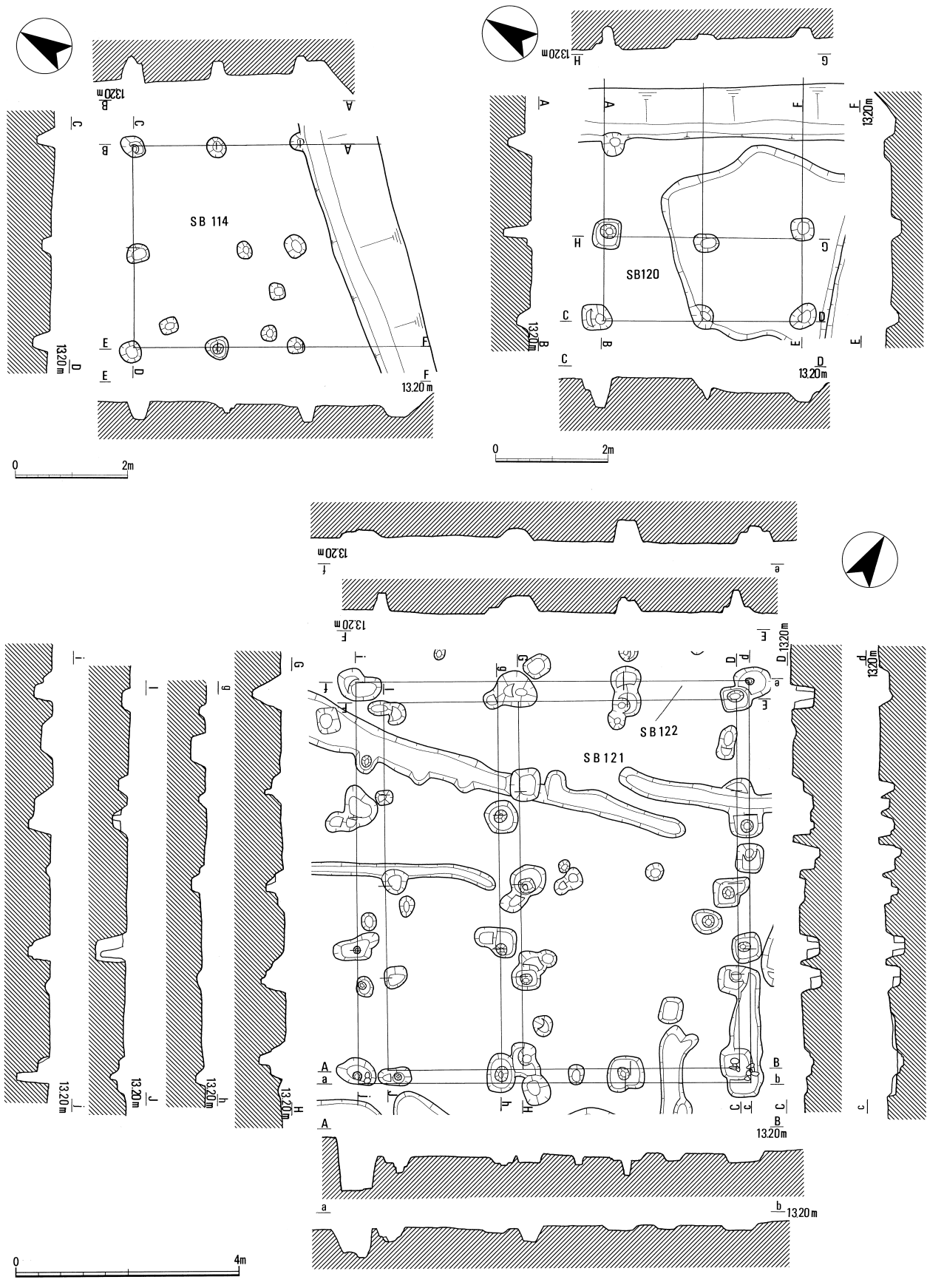
SB121 (第21図) 調査区のほぼ中央で検出した。4間×2間の身舎の西側に底がつく。N29°Wの南北棟で、桁行6.6m、梁行は身舎3.9m+庇2.4mである。柱間は桁行が1.65mの等間、梁行は身舎が1.95m等間で庇は2.4mである。身舎の柱掘形は隅丸の方形で、庇の柱掘形は径30cmの円形である。柱穴の切り合い関係によりSB122より新しく、建て替えの可能性がある。なお、この建物の柱穴および周辺の包含層より、製塩土器が多く出土しており注目される(第37・44図)。その他の遺物としては、須恵器杯蓋、土師器細片のみである。



第20図 SB119実測図(1:100)

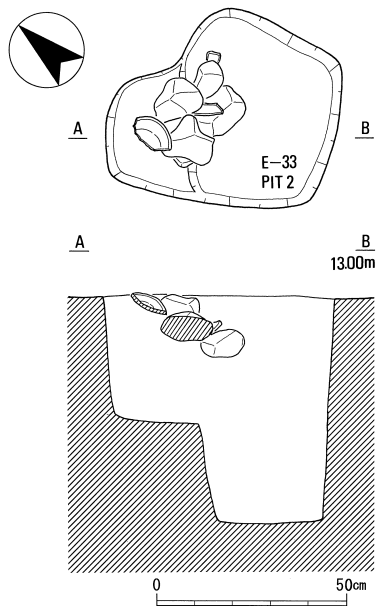
遺構番号	規模			柱間寸法(m)		棟方向	面積(m ²)	時期	備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)	桁行	梁行				
SB114	3以上×2	3.0以上	3.6	1.5+1.5+?	1.8等間	N18°W	10.8以上		
SB115	4×2	7.2	4.8	1.8等間	2.4等間	N24°W	34.56	第Ⅰ期	
SB116	4×2	7.2	4.8	1.8等間	2.4等間	N26°W	34.56	第Ⅱ期	
SB117	4×2	6.6	4.8	1.65等間	2.4等間	N27°W	31.68	第Ⅲ期	
SB118	3×2	6.75	4.2	2.25等間	2.1等間	N26°W	28.35	第Ⅱ期	
SB119	3×2以上	6.75	2.1以上	2.25等間	2.1+?	N24°W	14.175以上	第Ⅰ期	SB115と同じ棟方向
SB120	2以上×2	3.0以上	3.6	1.5+1.5+?	1.8等間	N34°W	10.8以上		総柱?
SB121	4×2+庇	6.6	3.9+2.4	1.65等間	1.95等間+2.4	N29°W	38.69	第Ⅲ期	西面庇
SB122	3×2+庇	7.2	4.5+2.4	2.4等間	2.25等間+2.4	N29°W	49.68	第Ⅲ期	西面庇
SB123	3×2	4.95	3.6	1.65等間	1.8等間	E35°N	17.82	第Ⅳ期	
SB124	3以上×2以上	6.3以上	2.1以上	2.1+2.1+2.1+?	2.1+?	E38°N	13.23以上		

第2表 B地区掘立柱建物一覧表



第21図 SB 114・120~122実測図 (1:100)

SB122 (第21図) SB121よりひと回り大きく、取り囲む形で検出した。3間×2間の身舎の西側に庇がつく。N29°Wの南北棟である。桁行7.2m、梁行は4.5mの身舎に庇は2.4mである。柱間は桁行が2.4mの等間、梁行は身舎が2.25mの等間で庇は2.4mである。出土遺物には、須恵器杯蓋、土師器細片、製塩土器、黒色土器がある。平安時代前



第22図 SB122pit実測図 (1:20)

半の建物であろう。このSB122とSB121は似かよった時期に建て替えを行ったと考え、共に第Ⅲ期にいた。

第Ⅳ期

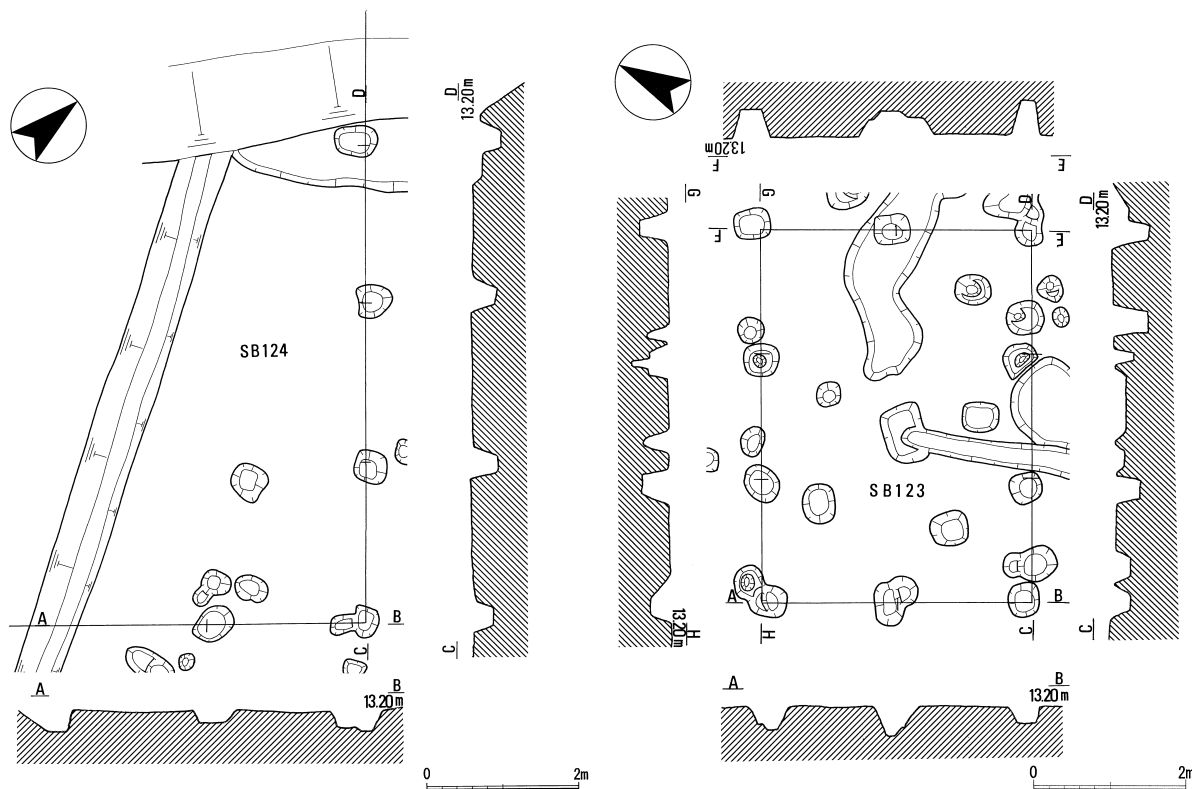
SB123 (第23図) SB122のすぐ西北で検出した。3間×2間のE35°Nの東西棟である。桁行4.95m、梁行3.6mで、柱間は、桁行が1.65mの等間、梁行が1.8mの等間である。この建物周辺の遺物包含層でも製塩土器が多く見られた。柱穴からの出土遺物は須恵器片、土師器片、灰釉陶器があり、建物の時期は平安時代中頃と思われる。

その他の時期

第Ⅰ～Ⅳ期の建物とは、棟方向などの共通要素が少なく、また出土遺物から詳細な時期を特定することも難しい掘立柱建物である。

SB114 (第21図) 調査区の南端で検出した。建物が調査区外に延びるため規模は確定できないが、3間以上×2間の南北棟であろう。棟方向はN18°Wである。桁行3.0m以上、梁行3.6mで、柱間は桁行が1.5m+1.5m、梁行が1.8m等間である。

SB120 (第21図) 調査区中央東壁沿いで検出した。建物が調査区外に延びるため規模は確定でき



第23図 SB123・124実測図 (1:100)

ないが、2間以上×2間の総柱建物であろう。

SB124 (第23図) 調査区北西端で検出した。3間以上×2間以上で、E38°Nの東西棟であろう。柱間は、桁行、梁行とも2.1mである。

イ 溝

SD49 調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅は60cm、深さは20cmである。第1層が黄褐色粘砂質土、第2層が暗灰褐色粘質土である。

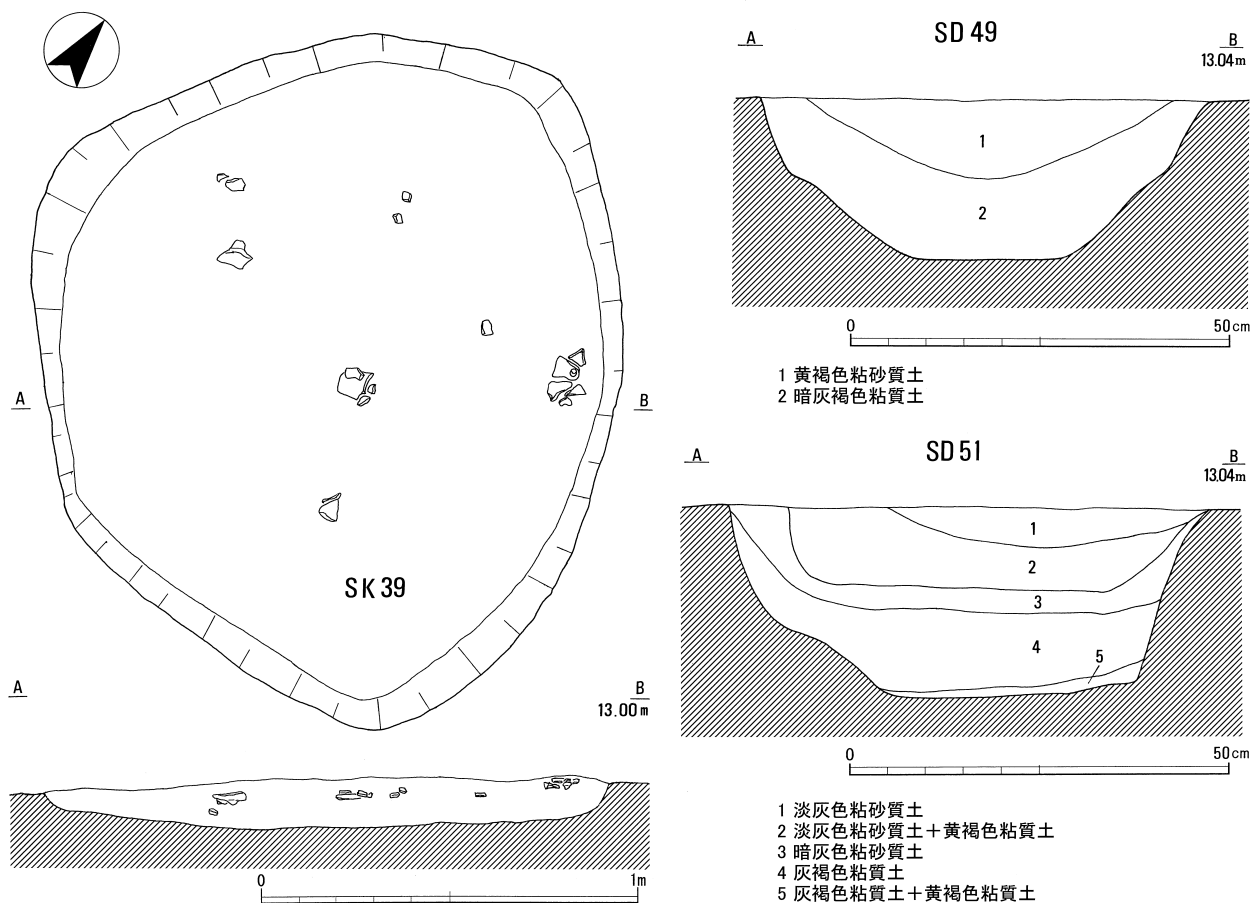
SD51 調査区中央、SD49のすぐ北側で平行して検出した東西方向の溝である。幅は60cm、深さは25~30cmである。第1層が淡灰色粘砂質土、第2

層が淡灰色粘砂質土+黄褐色粘質土、第3層が暗灰色粘砂質土、第4層が灰褐色粘質土、第5層が灰褐色粘質土+黄褐色粘質土である。

ウ 土坑

SK39 (第24図) 調査区の南で検出した。楕円形の土坑で、東西約1.6m、南北1.8mの規模である。深さは、検出面から約20cm程度と浅い。埋土には、炭が少量混じる。出土遺物には、須恵器杯(309)、土師器杯(312)がある。

(服部芳人)

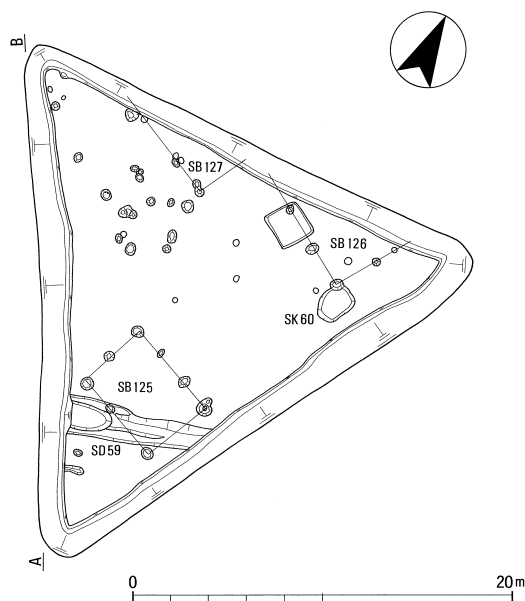


第24図 SK39実測図(1:20), SD49・51土層断面図(1:10)

3 C地区

(1) 層序

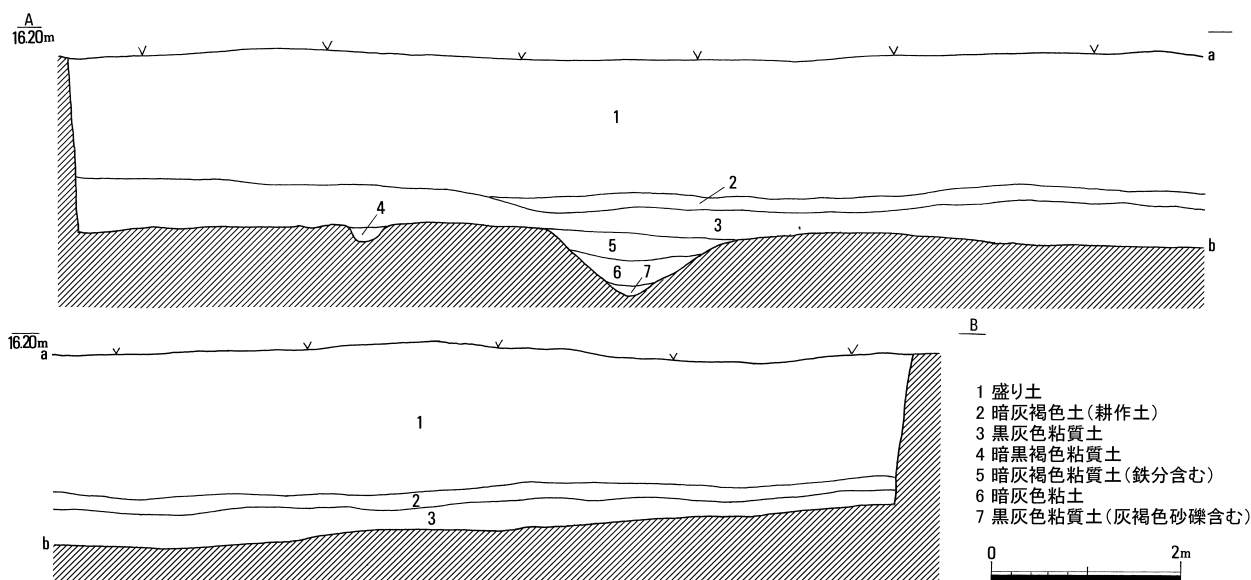
C地区は、B地区から北へ20m程離れたところより調査区が始まる。平面形は一辺25m程のほぼ正三角形の調査区である。基本的層序は、盛土、耕作土



第25図 C地区遺構平面図 (1:400)

遺構番号	規模			柱間寸法 (m)		棟方向	面積(m ²)	備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)	桁行	梁行			
125	3×2	5.4	3.9	1.8等間	1.95等間	E18° S	21.06	
126	2以上×2以上	4.8以上	2.4以上	2.4+2.4+?	2.4+?	E30° S	11.52以上	
127	2以上×?	4.8以上	?	2.4+2.4+?	?	E22° S	?	

第3表 C地区掘立柱建物一覧表



第26図 C地区土層断面図 (1:80)

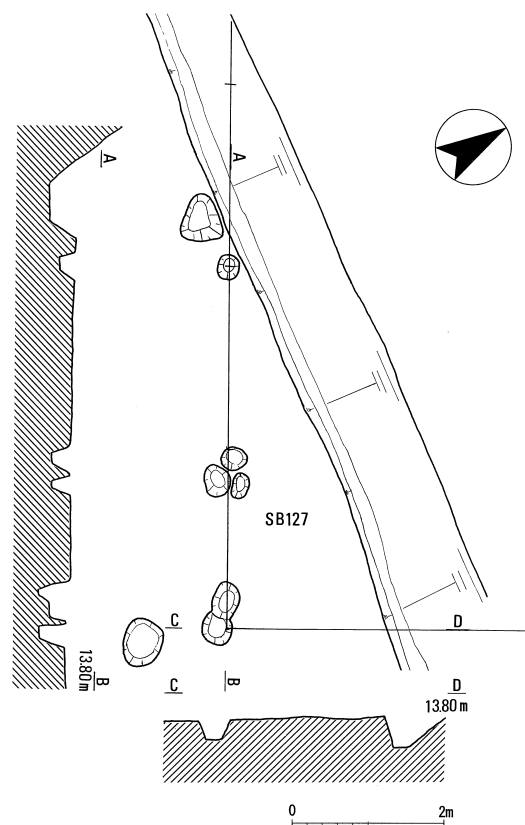
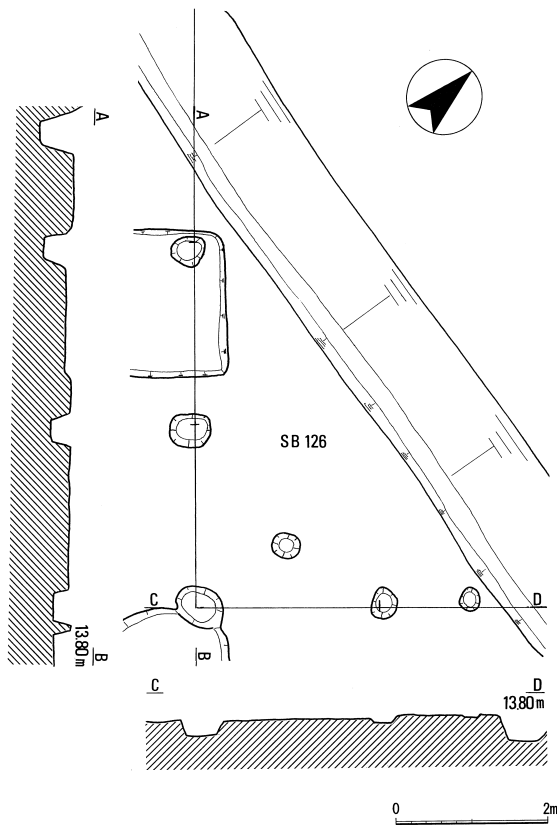
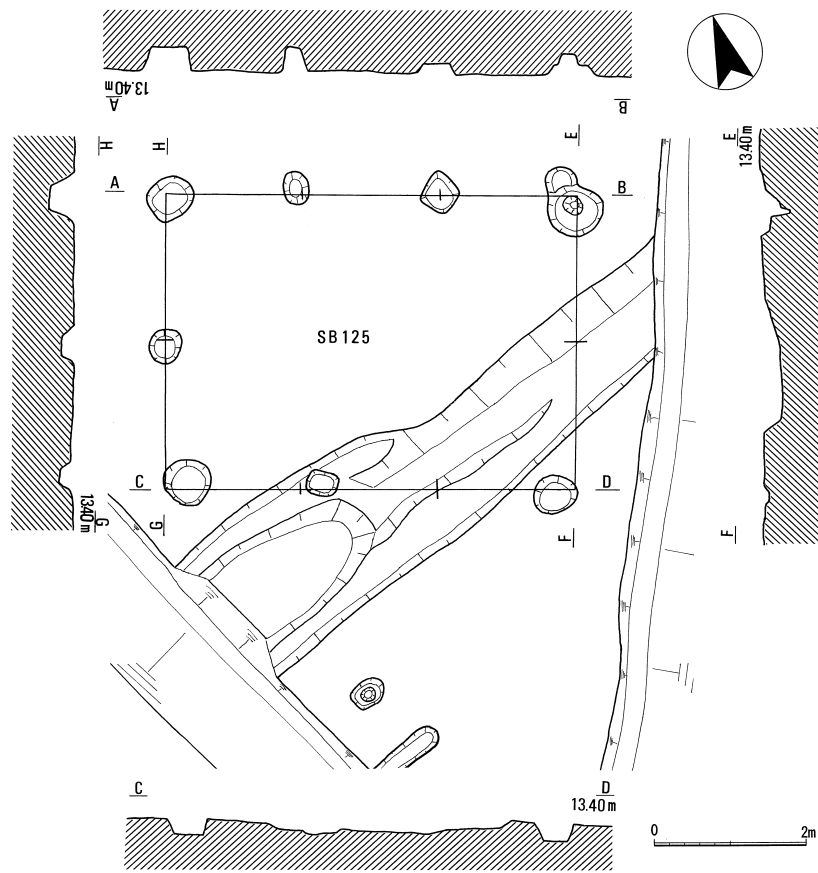
の下に黒灰粘質土の遺物包含層が20~50cm程堆積する。その下が暗黄褐色または暗黒灰色粘土の地山となる。

(2) 遺構

ア 掘立柱建物

SB 125 調査区の最も南側で、溝SD59に切られる位置で検出した。3間×2間のE18° Sの東西棟で桁行5.4m、梁行3.9mである。柱間は桁行が1.8m等間、梁行が1.95m等間である。2つの柱穴はSD59に切れ、その一つが僅かに痕跡を残すにとどまった。柱穴は約80cm、深さは15~30cmとばらつきがある。柱穴からの出土遺物は土師器片のみで少量である。建物の時期はSD59の時期を考えて、奈良時代であろう。

SB 126 調査区の北壁沿い、東寄りで見出した。桁行、梁行とも調査区外に延びるため規模は確定できない。調査区の北壁に延びる筋を桁行と仮定すると、2間以上×2間以上のE30° Sの東西棟となる。柱間は桁行が2.4m、梁行が2.4mである。南側柱の西端の柱穴は試掘坑を掘り切った後で見出した。出土遺物は須恵器片、土師器片のみで少量である。



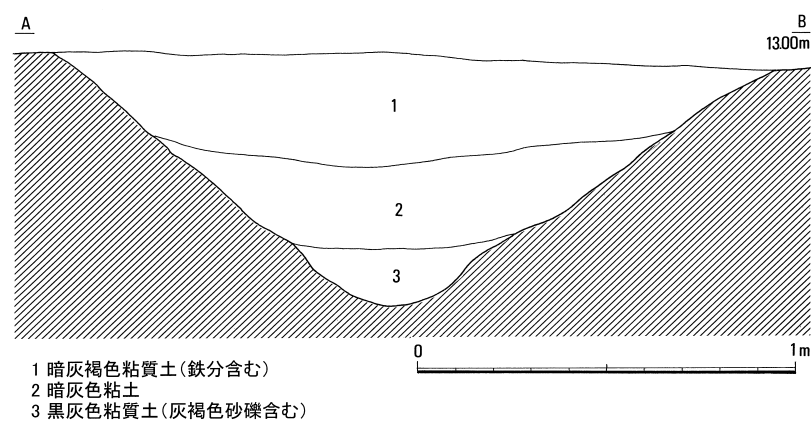
第27図 SB 125~127実測図 (1:100)

SB127 調査区の北壁沿いの西寄りで検出した。東西棟と仮定すると桁行2間以上で、方向はE22°Sとなる。柱間は2.4mである。主な出土遺物は土師器片のみで少量である。

イ 溝

SD59 調査区の南側で検出した。幅は2m、深さ70cmで、断面は逆三角形である。埋土は第1層が暗灰褐色粘質土（鉄分含む）、第2層が暗灰色粘土、第3層が黒灰色粘質土（灰褐色砂礫含む）である。出土遺物には灰釉陶器皿があり、遺構の時期は平安時代であろう。

(山口順也)



第28図 SD59土層断面図 (1:20)

IV 遺物

1 A地区の土器・土製品

出土した遺物の多くはA地区からで、整理箱にして約200箱程度である。その中でも、SD1からの遺物が多い。種類も多く、土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、山茶碗などであるが、古墳時代から奈良時代・平安時代の遺物が大半である。遺構別に概略を列挙する。

(1) SD1出土土器

①土師器ほか(1~38)(第29図)

碗(1~7) 1・2は小型の碗で口径8cm前後、口縁をやや内湾させ端部を尖らせる。3は口径11.2cm、口縁部はやや厚い。5は底部から緩やかに内湾し口縁部に至る。6・7は器高が高くなる深い碗で、底部は厚みがある。

皿(8・9・10) 8・9は底部から内湾気味に立ち上がり端部を内側に丸くやや肥厚させる。10は大型の皿である。

鍋(11・28) 11は口径19cm程で、体部は丸く口縁部は外反する。28は口縁部を大きく外反させ、端部に凹線状の窪みを持つ。

ミニチュア土器(12) 口縁部を欠く。底部は平坦で、外面を指おさえて調整する。

甕(13~27) 13~15は、口径14cm前後の小型の甕である。頸部から口縁部は厚みを持ち、内面は縦方向のケズリを行う。16~25・27は口径21cm前後の甕である。頸部から口縁部にかけては、緩やかに外反するもの(18・19)、くの字に折れ曲げるもの(21・22・23)、大きく外反するもの(27)がある。

いずれも、外面は縦方向のハケメ調整を行い、頸部から口縁部にかけての内面は横方向のハケメ調整を行う。26は口径26cmの大型の甕で、口縁は大きく外反し、端部を上方に向かい尖らせる。

鉢(29・30) 体部からほとんど湾曲させず口縁に至る。須恵器の模倣か。

土馬(35) 頭から首にかけての破片である。目・鼻・手綱を竹管で付け、耳・たてがみも模倣する。

円面硯(36~38) 36は口径22cmの大型の円面硯で、十文字の透かしを有する。透かしの縦方向は長方形状で、横方向は円形である。37は口径15.2cmで、脚部の透かしは不明である。陸部から海部にかけてなだらかに落ちる。38は口径11cmの小型の円面硯で、長方形の透かしを有する。

②須恵器(39~139)(第30・31図)

杯蓋(39~63) 39~46はかえりがなく天井部から丸みを持って口縁部に続く。口径が12cm前後のもの(39~41)と10cm前後のもの(42~46)がある。天井部が平坦なものは口縁部が内側に丸みを持つ。時期は田辺編年のTK217古段階併行期のものである。47~49は口縁部内側に小さいかえりを持つ。宝珠のつまみを持つものであろう。50~63は、口縁部内側のかえりはなく、端部は下方へ折れて終わる。つまみを欠くものが多いが、扁平な宝珠のつまみを持つものであろう。口縁部が上方に上がり、端部が下方に折れる形態のもの(62)もある。63には、天井部内面にヘラで「萬」と刻まれている。

壺蓋(64) 平坦な天井部から、直角に口縁部が折れ曲がる形態で、つまみが付くものと思われる。

杯(65~100) 65~69は受け部を持ち、立ち上がりが短く内傾するもので、器高も低い。70~88は受け部の無いものである。底部から内湾気味に口縁部に続くもの(70~72)、底部から外反気味に口縁部に続くもの(79~83)、平坦な底部から直線的に口縁部に至るもの(84~88)がある。89~100は高台が付くものである。高台は底端部に付くものから、底端部より内側に付くものと様々である。88は底部内面に、90は底部外面に、ともにヘラで「大」と刻まれている。

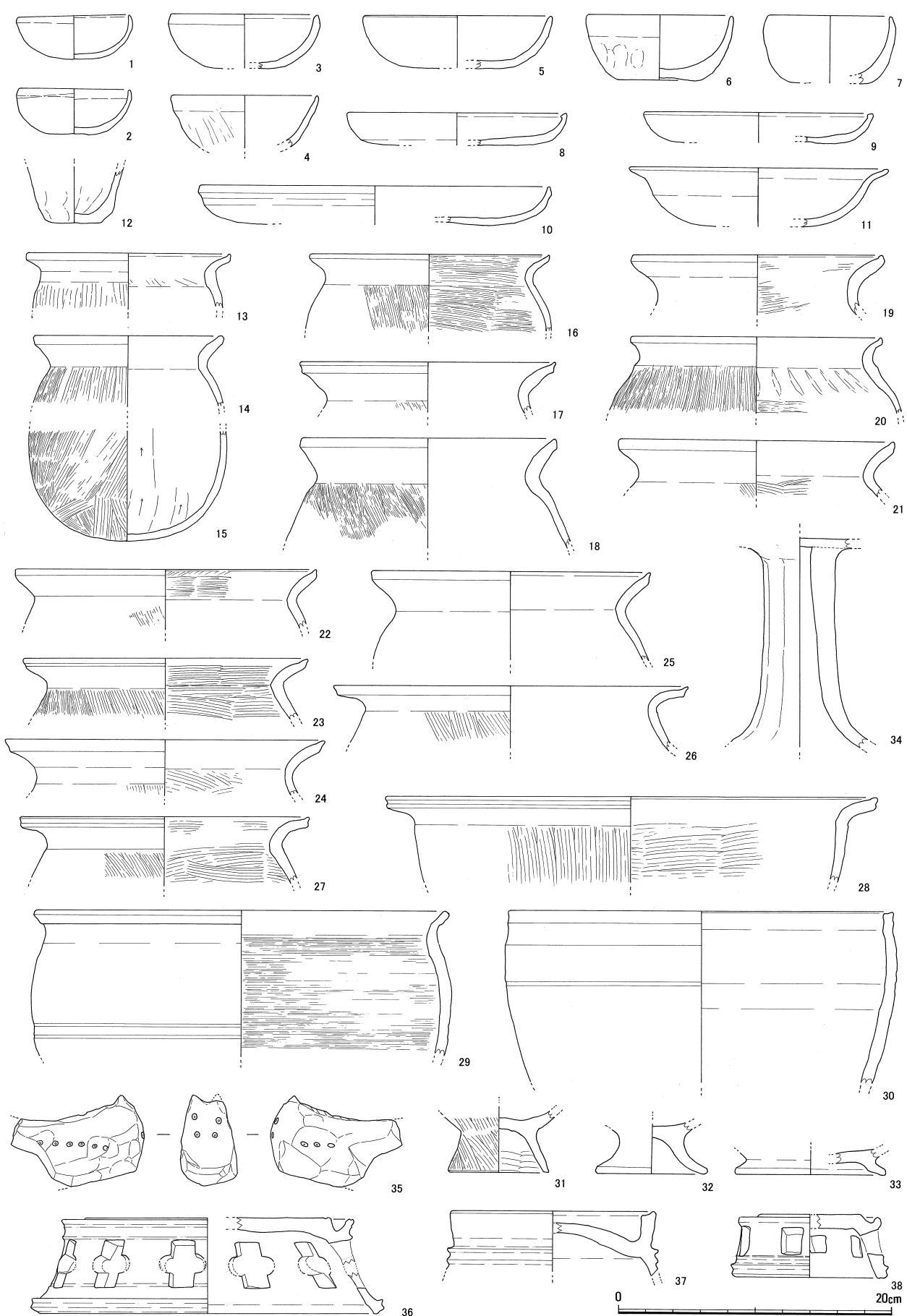
高杯(101~111) 101は有蓋高杯、105は無蓋高杯である。脚部に透かしのあるもの(101)と透かしのないもの(102~111)がある。

壺(112~119・124・125) 112・113は口縁部の破片、114~119は底部の破片である。124・125は胴底部のみ残存する。

甕(120~123) 径8~10cmの球形の体部で、2条の沈線を施す。122は内部に穿孔時の粘土塊が残る。

番号	登録番号	器種	出土位置	法量 (cm)		調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径	器高						
1	004-03	土師器 椀	D 4 SD 1 第2層	8.3	3.2	外面 オサエ後ナデ・ナデ 内面 工具ナデ	微砂粒含む (0.5mm)	良	灰白 10YR8/2	完存	口縁歪み大
2	035-01	土師器 椀	D 4 SD 1 第2層	8.2 ~ 8.3	3.3	外面 ナデ 内面 板ナデ	細砂粒少し含む	良	浅黄橙 10YR8/3	3/4	外面に粘土接合痕
3	020-06	土師器 椀	C 2 SD 1 第2・3層	11.0	4.0	外面 ナデ 内面 ナデ	砂粒多く含む (~6mm)	良	灰黄褐 10YR2/6	1/4	内・外面にワラ痕
4	035-02	土師器 椀	D 4 SD 1 第2層	11.0	-	外面 薄いナメハケ 内面 ナデ	微砂粒少し含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/6	
5	035-04	土師器 椀	D 4 SD 1 第2層	14.0	-	外面 オサエ 内面 ナデ	細砂粒多く含む	良	にぶい褐 7.5YR5/3 にぶい橙 7.5YR7/3	2/5	調整不明瞭 外面薄く煤附着
6	043-05	土師器 椀	E 5 SD 1	11.0	4.7	外面 オサエ・ナデ 内面 板ナデ	微砂粒含む	良	灰白 10YR8/2	1/4 口縁小片	
7	038-05	土師器 椀	D 3 SD 1 第2層	11.0	5.0	外面 薄いハケメ 内面 ナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 10YR8/2	1/8	
8	015-01	土師器 皿	B 11 SD 1 第1・2層	16.0	2.4	外面 ケズリ 内面 ナデ	砂粒含む	良	淡橙 5YR8/4 灰白 10YR8/2	1/20	
9	033-05	土師器 皿	C 6 SD 1 第2層	17.0	2.2	外面 不明 内面 不明	細砂粒多量含む	良	灰白 7.5YR8/2	8/12	調整不明瞭
10	014-04	土師器 皿	B 12 SD 1 第1・2層	26.0	3.0	外面 ケズリ 内面 ナデ	細砂粒含む	良	橙 5YR6/8	1/8	
11	035-05	土師器 鍋	D 3 SD 1 第1層	19.0	-	外面 ハケ後ナデ 内面 ナデ	微砂粒少し含む	良	にぶい橙 10YR7/2	1/6	調整不明瞭
12	041-04	土師器 ミチア	D 2 SD 1 第1層	-	-	外面 オサエ・底部ナデ 内面 板ナデ	微砂粒含む	良	浅黄 2.5Y8/3	底部完存	
13	027-03	土師器 甗	C 9 SD 1	15.0	-	外面 タテハケ (4本/cm) 内面 ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/8	
14	034-04	土師器 甗	C 6 SD 1 第1層	14.0	-	外面 タテハケ (5~6本/cm) 内面 ナデ	微砂粒含む	良	灰白 5YR8/2	1/3	15と同一個体か
15	034-04	土師器 甗	C 6 SD 1 第1層	14.0	-	外面 タテハケ・ナメハケ (5~6本/cm) 内面 ケズリ	微砂粒含む	良	灰白 5YR8/2	胴部下半	14と同一個体か
16	029-04	土師器 甗	C 8 SD 1 第1・2層	17.5	-	外面 タテハケ (9本/cm) 内面 ヨコハケ (10本/cm)	細砂粒含む	良	浅黄橙 7.5YR8/3	1/4	内面に煤附着
17	023-04	土師器 甗	C 8 SD 1 第1・2層	19.0	-	外面 タテハケ (9~10本/cm) 内面 ヨコナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙 10YR8/4	1/8	
18	039-02	土師器 甗	D 3 SD 1 第1層	19.0	-	外面 タテハケ (10本/cm) 内面 薄いタテハケ (5本/cm)	微砂粒少し含む	良	灰褐 7.5YR6/2	1/3	
19	023-06	土師器 甗	C 8 SD 1 第1・2層	19.0	-	口縁 ヨコナデ 後内面 ヨコハケ (5本/cm)	微砂粒少し含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/4	
20	023-01	土師器 甗	C 6 SD 1 第1層	18.5	-	外面 タテハケ (10本/cm) 内面 ナデ・ヨコハケ (10本/cm)	微砂粒少し含む	良	浅黄橙 7.5YR8/3 灰白 10YR8/2	1/8	
21	043-06	土師器 甗	E 12 SD 1	20.5	-	外面 タテハケ (7本/cm) 内面 ヨコハケ (5本/cm)	細砂粒含む	良	浅黄 2.5Y8/3	1/10	
22	021-02	土師器 甗	B 12 SD 1 第1・2層	22.0	-	外面 タテハケ (8本/cm) 内面 ナデ	砂粒多く含む (~1mm)	やや甘い	にぶい褐 7.5YR6/3	1/12	
23	026-05	土師器 甗	C 10 SD 1 第1・2層	21.0	-	外面 タテハケ (6~7本/cm) 内面 ヨコハケ (5本/cm)	細砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR7/4	1/5	
24	034-03	土師器 甗	C 5 SD 1 第1層	19.0	-	外面 タテハケ (6本/cm) 内面 ヨコハケ (6本/cm)	砂粒多く含む (~2mm)	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/10	
25	021-01	土師器 甗	B 12 SD 1 第1・2層	20.5	-	外面 不明 内面 不明	砂粒多く含む (~1mm)	やや甘い	にぶい褐 7.5YR6/3	1/5	剥離の為調整不明
26	014-03	土師器 甗	B 11 SD 1 第1・2層	26.0	-	外面 タテハケ (6本/cm) 内面 不明	細砂粒含む	良	淡黄 2.5Y8/3	小片	
27	036-06	土師器 甗	D 3 SD 1 第1層	21.5	-	外面 ナメハケ(6本/cm) 内面 ヨコハケ (5本/cm)	微砂粒少し含む	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/8	
28	037-01	土師器 鍋	D 4 SD 1 第2層	36.0	-	外面 タテハケ (4本/cm) 内面 薄いヨコハケ (4本/cm)	細砂粒少し含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/12	
29	039-01	土師器 鉢	D 4 SD 1 第1層	30.5	-	外面 カキメ (10本/cm) 内面 カキメ (10本/cm)	細砂粒少し含む	非常に 甘い	灰白 2.5Y8/1	1/8	
30	042-02	土師器 鉢	D 6 SD 1 第1層	28.0	-	外面 ナデ 内面 ナデ	細砂粒含む	良	淡黄 2.5Y8/3	小片	
31	036-03	土師器 台付甗	D 3 SD 1 第1層	-	-	脚外面 ナメハケ (4本/cm) 脚内面 ナデ・ヨコハケ (2本/cm)	細砂粒多く含む	良	灰白 2.5Y7/1	脚部 1/4	
32	031-06	土師器	C 7 SD 1 第1層	-	-	外面 ナデ 内面 ナデ	砂粒含む (~2.5mm) 長石、石英等	良	橙 5YR7/6 浅黄橙 7.5YR8/6	脚部 1/2	
33	032-08	土師器	C 7 SD 1 第1層	-	-	外面 不明 内面 不明	細砂粒多く含む	良	淡橙 5YR8/4 灰白 7.5YR8/2	1/6	
34	020-07	土師器 高杯	C 12 溝	-	-	外面 面取り 内面 ナデ	砂粒含む (~1mm)	良	灰白 2.5Y8/2	脚部	面取り11面
35	007-01	土馬	C 8 SD 1 第1・2層	-	-	手づくね	細砂粒含む (~0.5mm)	良	明褐灰 7.5YR7/2 褐灰 7.5YR6/1	頭部のみ	
36	007-02	須恵器 円面硯	C 6 SD 1 第1層	21.5	7.0	外面 内面	細砂粒含む	良	灰白 N8/0, 7/0	1/4	
37	028-01	円面硯	C 7 SD 1 第1層	15.0	-	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 N8/0, 6/0	小片	透かし数不明
38	005-02	円面硯	C 5 SD 1 第1層	10.5	4.6	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	砂粒含む (1mm)	良	灰白 N4/0	1/3	

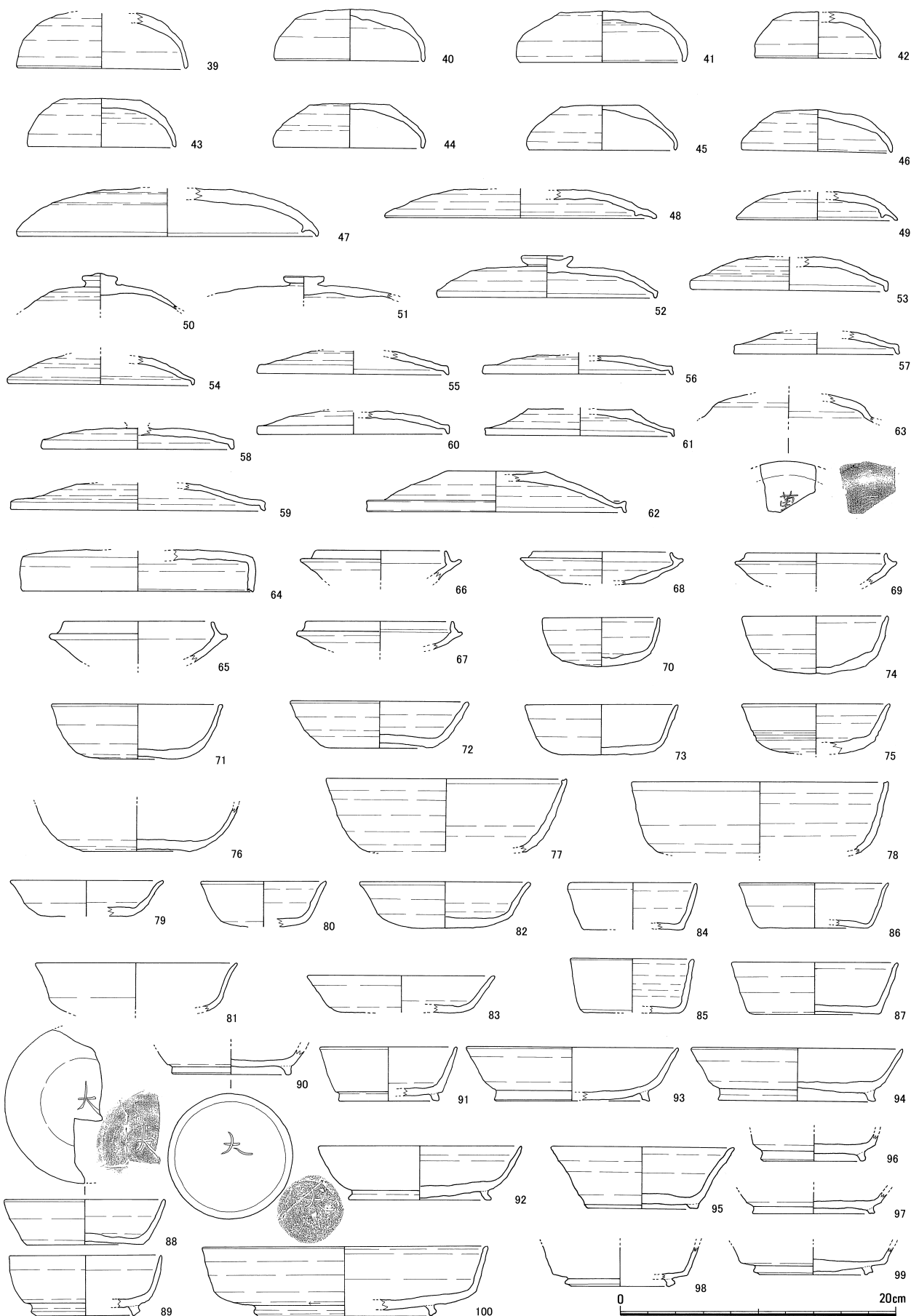
第4表 A地区土器観察表(1)



第29图 SD 1 出土土器实测图1 (1:4)

番号	登録番号	器種	出土位置	法量 (cm)		調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径	器高						
39	038-01	須臾器杯蓋	D2 SD1 第1層	12.5	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ・ナデ	良	黄灰 2.5Y6/1	1/4	
40	015-04	須臾器杯蓋	B12 SD1 第1・2層	11.0	3.7	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り後ナデ クロナデ・ナデ	良	灰 5Y6/1	1/7	
41	016-02	須臾器杯蓋	B12 SD1 第1・2層	12.0	3.5	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り クロナデ・ナデ	良	灰白 N7/0	1/8	ヘラ記号
42	026-03	須臾器杯蓋	C10 SD1 第2層	9.0	3.5	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	灰白 N7/0 灰 N6/0	1/3	
43	038-08	須臾器杯蓋	D3 SD1 第1層	11.0	3.5	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰 5Y6/1	1/2	
44	023-03	須臾器杯蓋	C6 SD1 第2層	9.5~10.8	3.2~3.7	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り後ナデ クロナデ・ナデ	良	灰 5Y6/1 N6/0	1/2	完形
45	004-02	須臾器杯蓋	C6 SD1 第2層	9.5~10.6	3.3	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り後ナデ クロナデ・クワケズリ・ナデ	良	にぶい黄橙 10YR7/2, 6/4	1/1	口縁歪み大
46	005-03	須臾器杯蓋	D4 SD1 第2層	9.2~10.9	3.0	外面 内面	クロナデ・クワケズリ・ヘラ切り クロナデ・ナデ	良	密、砂粒含む (0.5mm)	1/1	ほぼ完形 口縁歪み大
47	041-01	須臾器杯蓋	D5 SD1 第2層	22.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰白 N8/0 オリブ灰 7.5Y5/3	1/18	外面に自然釉付着
48	041-02	須臾器杯蓋	D7 SD1 第1層	10.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰 N6/0	1/11	
49	033-04	須臾器杯蓋	C6 SD1 第2層	12.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ・ナデ	良	砂粒含む (~3mm) 灰 5Y5/1	1/7	
50	024-04	須臾器杯蓋	C8 SD1 第1・2層	—	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰白 N8/0	1/3	天井部
51	029-02	須臾器杯蓋	C7 SD1 第2層	—	—	外面 内面	クワケズリ クロナデ	良	灰白 N7/0	1/2	外面に自然釉付着
52	015-03	須臾器杯蓋	B12 SD1 第1・2層	16.0	3.0	外面 内面	クロナデ・ヘラケズリ クロナデ	良	灰白 N7/0	1/11	
53	031-04	須臾器杯蓋	C7 SD1 第1層	17.5	—	外面 内面	クロナデ・ヘラケズリ クロナデ	良	明紫灰 5P7/1	1/1	小片
54	024-03	須臾器杯蓋	C8 SD1 第1・2層	14.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰 5Y6/1	1/8	
55	027-02	須臾器杯蓋	C9 SD1 第1層	14.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰白 N8/0	1/6	
56	016-07	須臾器杯蓋	B10 SD1 第1・2層	14.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰白 2.5Y8/2 N7/0	1/5	
57	016-06	須臾器杯蓋	C8 SD1 第1・2層	11.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰白 N7/0	1/7	
58	040-01	須臾器杯蓋	D7 SD1 第1層	14.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰白 N6/0	1/14	
59	040-04	須臾器杯蓋	D6 SD1 第1・2層	18.5	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	内: 灰白 2.5Y8/1 釉: オリブ 7.5Y4/3	1/1	外面に自然釉付着
60	014-01	須臾器杯蓋	B11 SD1 第1・2層	14.0	—	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	内: 灰白 2.5Y8/2 外: 灰白 N7/0	1/10	
61	032-03	須臾器杯蓋	C5 SD1 第1層	14.0	—	外面 内面	クワケズリ クロナデ	良	甘い にぶい黄 5YR/4	1/1	小片
62	040-05	須臾器杯蓋	D7 SD1 第1層	19.0	3.0	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰白 5Y8/1	1/7	
63	012-01	須臾器杯蓋	D9 SD1 第1・2層	—	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	灰 5Y6/1	1/1	内面にヘラ書き文字
64	014-02	須臾器杯蓋	B11 SD1 第1・2層	17.0	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	内: 善灰 2.5Y6/1 外: 灰白 5Y6/1	1/1	小片
65	018-04	須臾器杯	B9 SD1 第1・2層	11.0	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	灰 5Y5/1	1/10	
66	038-09	須臾器杯	D3 SD1 第2層	9.5	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	灰 N6/0	1/8	
67	032-06	須臾器杯	C7 SD1 第1層	11.0	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	灰 5Y /	1/5	
68	038-10	須臾器杯	D4 SD1 第2層	10.0	—	外面 内面	クロナデ クロナデ・ナデ	良	浅黄 2.5Y8/3	1/10	外面にヘラ記号
69	032-07	須臾器杯	C5 SD1 第2層	10.0	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	赭灰 10YR4/1	1/7	
70	043-02	須臾器杯	E5 SD1	8.6	3.5	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰 N5/0	1/2	
71	027-01	須臾器杯	C8 SD1	12.5	4.0	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰白 N7/0	1/7	外面にあて具点?
72	032-02	須臾器杯	C5 SD1 第2層	13.0	3.3	外面 内面	クロナデ・底部回転糸切り クロナデ	良	甘い にぶい黄 5YR7/4	1/2	
73	023-05	須臾器杯	C8 SD1 第1層	11.0	3.6	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り後ナデ クロナデ	良	灰白 2.5Y7/1	1/8	外面底部に板目状圧痕
74	038-02	須臾器杯	D2 SD1 第1層	11.0	4.1	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り後ナデ クロナデ・ナデ	良	灰白 N6/0	1/2	
75	043-03	須臾器杯	E5 SD1	11.0	—	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰白 N8/0	1/4	外面腰部付近に沈線 2条
76	013-03	須臾器杯	B11 SD1 第1・2層	—	—	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰白 N7/0 灰 N6/0	1/6	底部完存
77	040-03	須臾器杯	D7 SD1 第1層	17.5	—	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰黄 2.5Y7/2	1/6	78と同一個体か
78	034-02	須臾器杯	C6 SD1 第1層	19.0	—	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰白 10YR7/1	1/10	77と同一個体か
79	027-05	須臾器杯	C10 SD1 第1・2層	11.0	2.6	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り クロナデ	良	暗オリブ 2.5GY4/1	1/12	
80	032-05	須臾器杯	C5 SD1 第2層	9.5	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	赭灰 10YR6/1	1/5	
81	023-07	須臾器杯	C8 SD1 第1・2層	15.0	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	灰白 N7/0	1/10	
82	033-02	須臾器杯	C6 SD1 第1層	12.5	3.0	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り後ナデ クロナデ	良	砂粒多く含む (~3mm) 灰 N6/0	1/1	小片
83	026-02	須臾器杯	C7 SD1 第2層	16.0	2.7	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	灰白 N8/0	1/11	内面に釉付着
84	016-04	須臾器杯	B8 SD1 第1・2層	9.5	3.4	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰白 N7/0	1/4	
85	016-03	須臾器杯	B10 SD1 第1・2層	9.0	4.0	外面 内面	クロナデ・ケズリ・糸切り クロナデ	良	灰 N6/0	1/6	
86	033-03	須臾器杯	C6 SD1 第1層	11.0	3.0	外面 内面	クロナデ クロナデ・ナデ	良	灰 N6/0	1/8	
87	040-06	須臾器杯	D7 SD1 第1層	12.0	3.7	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰 5Y6/1	1/4	
88	011-02	須臾器杯	C9 SD1 第1層	11.5	3.3	外面 内面	クロナデ・ヘラ切り クロナデ	良	灰白 N7/0	1/2	内面 外面 ヘラ文字「大」 黒斑
89	033-08	須臾器杯	C5 SD1 第1層	11.0	4.4	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰 5Y6/1	1/4	
90	011-01	須臾器杯	C8 SD1 第1・2層	—	—	外面 内面	クロナデ・ナデ クロナデ	良	灰白 2.5Y8/2	1/1	底部ほぼ完存
91	016-05	須臾器杯	B8 SD1 第1・2層	10.0	3.9	外面 内面	クロナデ・ヘラケズリ後ナデ クロナデ	良	灰 N6/0	1/5	
92	029-01	須臾器杯	C7 SD1 第2層	15.0	3.9	外面 内面	クロナデ・ヘラケズリ クロナデ・ナデ	良	灰 N6/0	1/5	
93	016-01	須臾器杯	B10 SD1 第1・2層	15.5	3.8	外面 内面	クロナデ・ヘラケズリ クロナデ・ナデ	良	灰赤 2.5YR6/2	1/6	生焼け
94	038-04	須臾器杯	D4 SD1 第1層	15.5	3.9	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ	良	灰白 10YR7/1	1/5	
95	029-06	須臾器杯	C8 SD1 第1・2層	13.5	4.5	外面 内面	クロナデ・ケズリ クロナデ	良	灰白 N8/0	1/3	底部
96	031-01	須臾器杯	C7 SD1 第1層	—	—	外面 内面	クロナデ・糸切り クロナデ	良	内: 灰 N7/0 外: 灰褐 5YR5/2 灰 N5/0	1/2	底部
97	040-02	須臾器杯	D7 SD1 第1層	—	—	外面 内面	クロナデ・糸切り クロナデ	良	にぶい黄 7.5YR5/4	1/4	底部
98	013-04	須臾器杯	B11 SD1 第1・2層	—	—	外面 内面	クロナデ クロナデ	良	灰白 N8/0	1/5	底部
99	031-05	須臾器杯	C7 SD1 第1層	—	—	外面 内面	クロナデ・ケズリ後ナデ クロナデ	良	明紫灰 5P8 7/1 明紫灰 7P7/1	1/4	底部
100	004-01	須臾器杯	C8 SD1 第1・2層	21.0	5.1	外面 内面	クロナデ・クワケズリ クロナデ・ナデ	良	灰 N7/0	1/3	

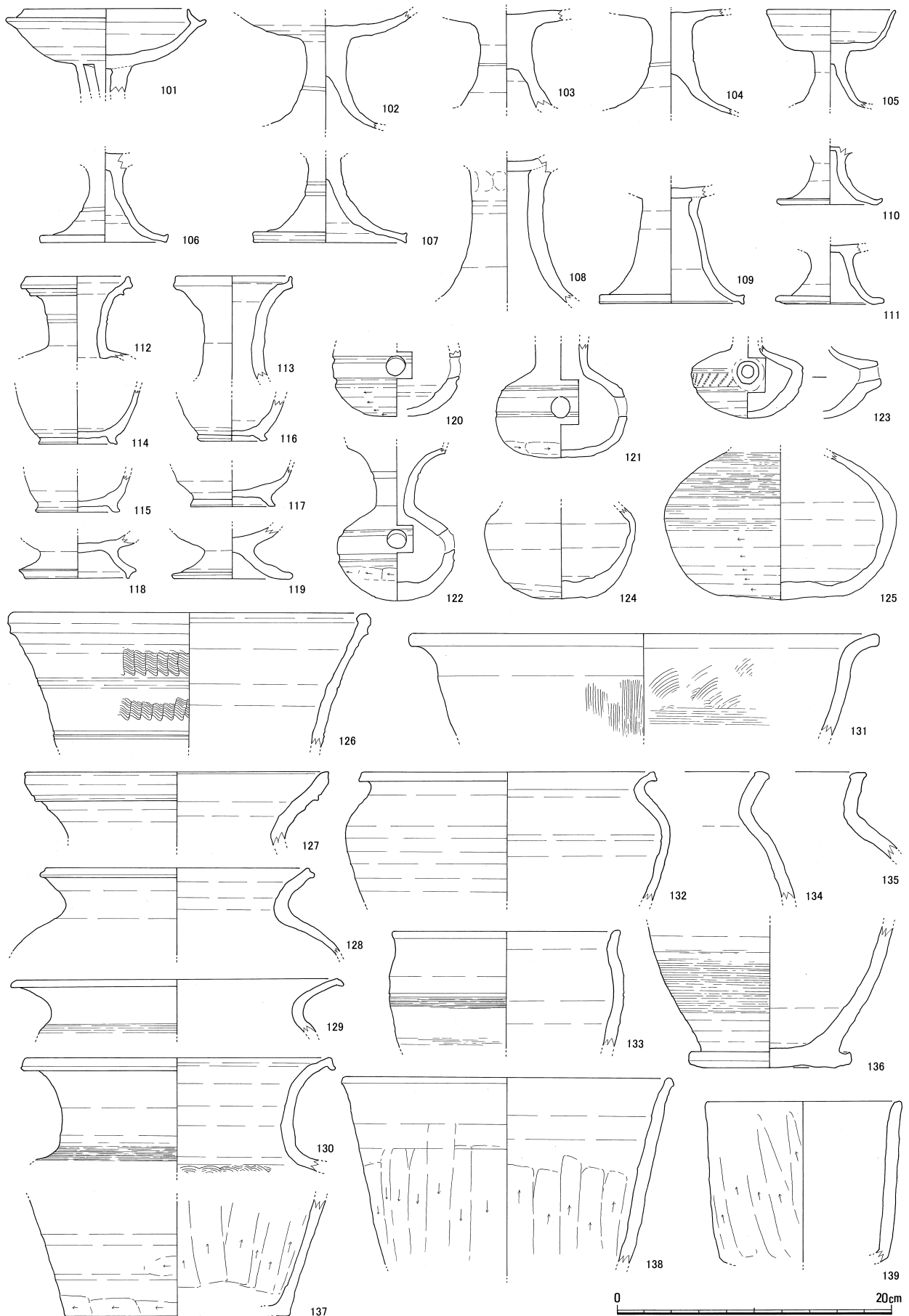
第5表 A地区土器観察表(2)



第30图 SD 1 出土土器实测图 2 (1:4)

番号	登録番号	器種	出土位置	法量 (cm)		調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径	器高						
101	020-01	須恵器有蓋高杯	C2 SD1 第2・3層	12.2	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ケズリ	砂粒含む (~5mm)	良	灰 N6/0	杯部 1/2	3方透かし
102	036-05	須恵器高杯	C6 SD1 第1層	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	細砂粒 多く含む	良	灰 N7/0	口縁 底部欠く	脚部に沈線1条
103	017-03	須恵器高杯	B8 SD1 第1・2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ナデ	微砂粒含む	良	灰 N6/0	口縁 底部欠く	脚部に沈線1条
104	029-03	須恵器高杯	C8 SD1 第1・2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	砂粒含む	甘い	灰白 2.5Y8/1	口縁 底部欠く	脚部に沈線1条
105	027-07	須恵器高杯	C10 SD1 第1・2層	9.5	—	外面 ロクロナデ・ケズリ? 内面 ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰 N6/0	底部欠く	
106	030-03	須恵器高杯	C8 SD1 第1・2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N5/0	脚部 3/4	脚部に沈線1条
107	043-07	須恵器高杯	E2	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N4/0, 5/0, 6/0	脚部 3/8	脚部に沈線2条
108	018-02	須恵器高杯	B8 SD1 第1・2層	—	—	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ	微砂粒含む	良	灰白 10YR8/1 褐灰 7.5YR5/1	口縁、 底部欠く	
109	018-03	須恵器高杯	B9 SD1 第1・2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰 N5/0	脚部 1/12	
110	024-05	須恵器高杯	C8 SD1 第1・2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒 少し含む	良	灰 N6/0	脚部 1/2	
111	033-07	須恵器高杯	C5 SD1 第1層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	砂粒含む (~1mm)	良	灰 N5/0	脚部 1/3	
112	038-03	須恵器壺	D2 SD1 第3層	7.6	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	細砂粒含む	良	褐灰 10YR6/1 オリーブ灰 10Y4/2	口縁から 頸部のみ	頸部に2条の沈線
113	030-05	須恵器壺	C7 SD1 第1層	8.5	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	砂粒含む	良	灰 N6/0	口縁から 頸部のみ	
114	035-03	須恵器壺	D4 SD1 第2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒 多く含む	良	内: にぶい赤褐 7.5Y4/3 外: 灰 N6/0	底部 1/2	
115	031-02	須恵器壺	C7 SD1 第1層	—	—	外面 ロクロナデ・ヘラケズリ・糸切り 内面 ロクロナデ・ナデ	砂粒含む (~1mm)	良	灰白 N7/0 灰 N6/0	底部 2/5	
116	026-01	須恵器壺	C7 SD1 第2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N4/0	底部完存	
117	038-07	須恵器壺	D4 SD1 第2層	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒 多く含む	良	内: 褐灰 10YR6/1 外: 黒褐 10YR3/1	底部のみ	
118	032-04	須恵器壺	C5 SD1 第2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	細砂粒含む	良	褐灰 10YR6/1	脚部のみ ほぼ完形	
119	020-02	須恵器壺	C2 SD1 第2層	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ナデ	砂粒含む (~2mm)	良	明褐灰 7.5YR7/1	脚部 3/5	
120	036-04	須恵器甗	D4 SD1 第2層	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	細砂粒 多く含む	良	灰 N6/0	体部のみ	穿孔1個、上下に沈線各1条 自然釉付着
121	033-06	須恵器甗	C5 SD1 第1層	—	—	外面 ロクロナデ・手持ちケズリ・オサエ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (~2mm)	良	灰 5Y6/1	体部のみ	穿孔1個、上下に沈線各1条 自然釉付着
122	004-04	須恵器甗	D2 SD1 第2層	—	—	外面 ロクロナデ・ケズリ・ナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	微砂粒含む (~1mm)	良	灰 5Y6/1	体部完存	穿孔1個、上下に沈線各1条 内部に穿孔で取れた粘土塊が残る
123	005-01	須恵器甗	D2 SD1 第3層	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む (~1mm)	良	灰 5Y6/1	体部完存	穿孔1個、上下に沈線各1条 沈線間に刺突文
124	036-02	須恵器壺	D4 SD1 第2層	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	細砂粒 多く含む	良	灰 N6/0	体部下半	
125	034-01	須恵器壺	C5 SD1 第1層	—	—	外面 カキメ (7本/cm)・ロクロケズリ・オサエ 内面 ロクロナデ・ナデ	砂粒含む (~3mm)	良	灰 5Y6/1	体部 1/2	内面に粘土つなぎ目残す
126	028-03	須恵器甗	C8 SD1	26.5	—	外面 ロクロナデ・施文(ヘラ・櫛) 内面 ロクロナデ	砂粒含む (~3mm)	良	暗オリーブ灰 2.5GY3/1	口縁部 1/6	沈線+波状文
127	013-01	須恵器甗	B11 SD1 第1・2層	22.2	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰 N6/0	口縁部 1/2	
128	030-01	須恵器甗	C8 SD1 第1・2層	20.0	—	外面 ロクロナデ・タタキ後ナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 5Y6/1	口縁部~ 肩部1/8	
129	026-04	須恵器甗	C10 SD1 第1・2層	23.5	—	外面 カキメ (5本/cm) 内面 ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰 5Y5/1	口縁部 1/18	
130	017-02	須恵器甗	B10 SD1 第1・2層	27.5	—	外面 カキメ (9~10本/cm) 内面 タタキ (同心円文)	微砂粒含む	良	灰白 N7/0 灰 N5/0	口縁部 1/8	
131	021-05	須恵器器台	B12 SD1 第1・2層	34.5	—	外面 ヨコナデ・タテハケ (8本/cm) 内面 ナメハケ (6本/cm)・ナデ	砂粒含む (~4mm)	甘い	灰白 5Y8/1	口縁部 1/10	生焼けか?
132	030-02	須恵器鉢	C8 SD1 第1・2層	21.0	—	外面 ロクロナデ・ケズリ 内面 ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰 N6/0	1/8	
133	024-02	須恵器鉢	C9 SD1 第1・2層	17.0	—	外面 ロクロナデ・カキメ 内面 ロクロナデ	微砂粒 多く含む	良	褐灰 10Y6/1	1/6	外面に沈線1条
134	031-03	須恵器鉢	C7 SD1 第1層	—	—	外面 ロクロナデ・タテ方向タタキ 内面 ロクロナデ・ヨコナデ	微砂粒 多く含む	良	灰白 5Y8/1 ~ 8/2	小片	135と同一個体か
135	028-02	須恵器鉢	C8 SD1	—	—	外面 ロクロナデ・タテ方向タタキ 内面 ロクロナデ	微砂粒 多く含む	良	灰白 2.5Y8/1	小片	134と同一個体か
136	020-03	須恵器鉢	C9 SD1 第1・2層	—	—	外面 カキメ (6本/cm)・ナデ・ヘラ切り 内面 後ナデ ロクロナデ	砂粒 多く含む (~4mm)	良	褐灰 10YR6/1	底部 1/2	底部に刺突文
137	013-02	須恵器鉢	B11 SD1 第1・2層	—	—	外面 ロクロナデ・ケズリ 内面 ケズリ	砂粒含む	良	灰 N6/0	1/4	
138	042-01	須恵器鉢	D2 SD1 第1層	24.0	—	外面 ナデ・ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	砂粒含む	良	内: 灰 5Y6/1 外: 灰白 2.5Y8/2	1/4	
139	030-04	須恵器鉢	C7 SD 第1層	14.5	—	外面 タテ方向ケズリ後ナデ 内面 ナデ	砂粒含む	良	内: 灰白 N8/0 外: 灰白 N4/0	1/6	

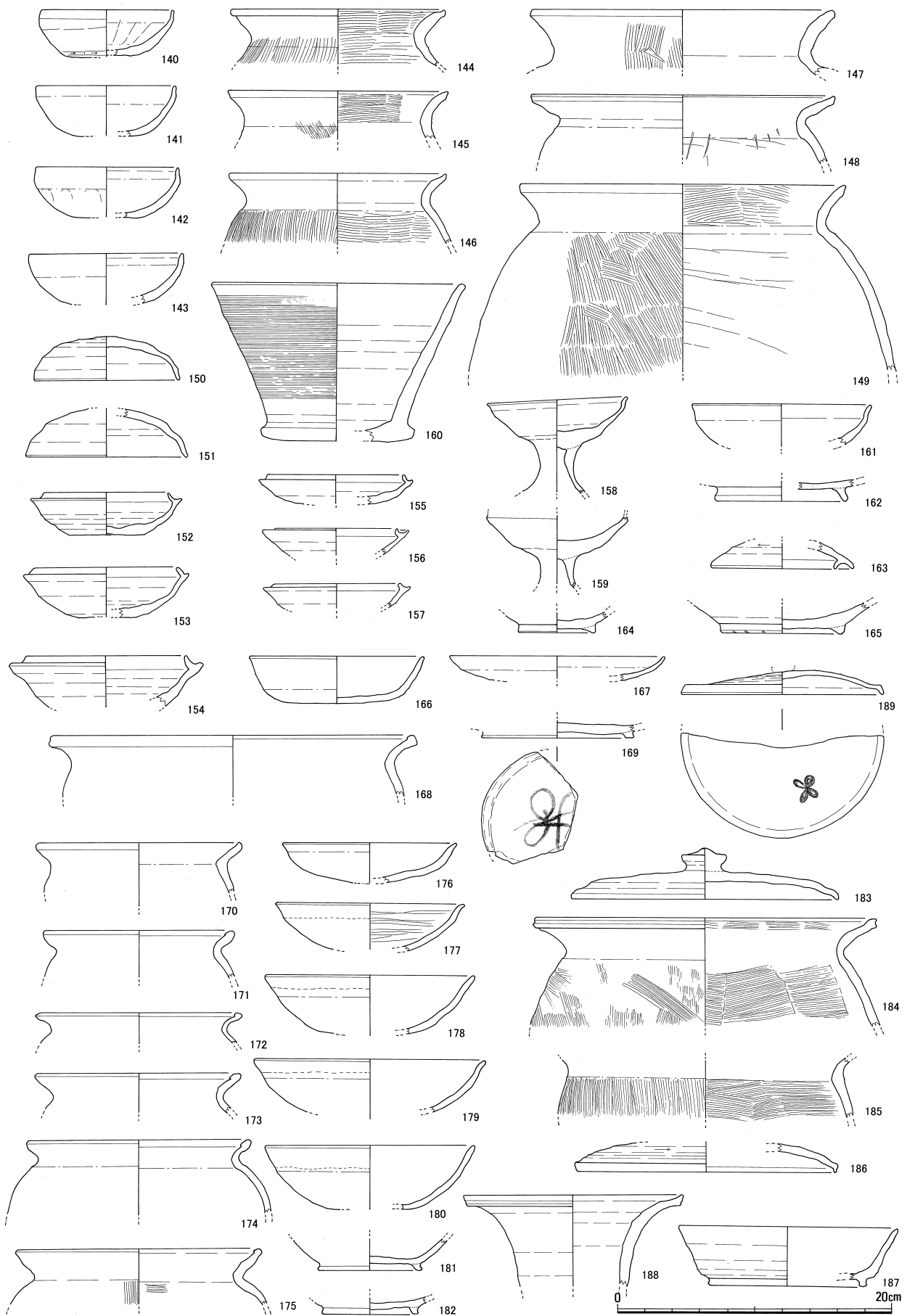
第6表 A地区土器観察表(3)



第31图 SD 1 出土土器实测图 3 (1:4)

番号	登録番号	器種	出土位置	法量 (cm)		調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径	器高						
140	051-03	土師器 椀	D 4 SD 6	10.0	3.5	外面内面 オサエ・手持ちケズリ ヨコナデ	微砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR6/4	1/2	内面工具アタリ痕 外面粘土接合痕
141	051-04	土師器 椀	E 4 SD 6	10.0	3.5	外面内面 ナデ ナデ	砂粒含む	良	橙 7.5Y7/6	3/8	
142	051-02	土師器 椀	E 4 SD 6	10.5	3.7	外面内面 オサエ ナデ	砂粒含む	良	橙 5YR7/6	1/3	
143	051-05	土師器 椀	E 4 SD 6	11.0	-	外面内面 オサエ ナデ	微砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/4	1/4	
144	052-01	土師器 甗	E 4 SD 6	15.5	-	外面内面 タデハケ (4~5本/cm) ヨコハケ (4~5本/cm)	微砂粒少し含む	良	灰白 10YR8/2	1/4	
145	049-06	土師器 甗	D 4 SD 6	16.0	-	外面内面 タデハケ (9本/cm) ヨコハケ (4~5本/cm)	砂粒含む (~1mm)	良	灰褐 7.5YR4/2	1/8	外面煤付着
146	052-02	土師器 甗	E 4 SD 6	16.0	-	外面内面 タデハケ (5~6本/cm) ヨコハケ (5本/cm)	微砂粒少し含む	良	淡橙 5YR8/4	1/5	内面煤付着
147	049-08	土師器 甗	E 5 SD 6	22.0	-	外面内面 ハケ (5本/cm) ヨコナデ	砂粒含む (~3mm)	良	灰白 10YR8/2	小片	外面工具アタリ痕
148	049-07	土師器 甗	E 5 SD 6	22.0	-	外面内面 不明 ケズリ	細砂粒含む	良	浅黄橙 10YR8/4	1/5	内面工具痕
149	050-01	土師器 甗	E 4 SD 6	21.5	-	外面内面 ナメハケ (5本/cm) 板ナデ・ケズリ	微砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/8	
150	051-01	須恵器 杯蓋	E 5 SD 6	10.5	3.2	外面内面 ロクロナデ・ヘラ切り ロクロナデ・ナデ	細砂粒少し含む	良	灰 N6/0	1/12	
151	049-01	須恵器 杯蓋	E 5 SD 6 第1・2層	12.0	-	外面内面 ロクロナデ・ヘラ切り後ナデ ロクロナデ・ナデ	細砂粒多く含む	良	灰白 N7/0	1/4	
152	051-06	須恵器 杯	E 4 SD 6	9.0	3.0	外面内面 ロクロナデ・ケズリ・ヘラ切り 後ナデ ロクロナデ	砂粒多く含む	良	内：灰 N6/0 外：暗緑灰 10GY8/1	1/3	外面底部に板目状圧痕
153	049-04	須恵器 杯	E 5 SD 6 第1・2層	10.5	3.5	外面内面 ロクロナデ・ヘラ切り後ナデ ロクロナデ	砂粒含む (~2mm)	甘い	灰白 5Y8/1	1/3	外面磨耗激しい
154	049-02	須恵器 杯	E 5 SD 6	14.0	3.5	外面内面 ロクロナデ ロクロナデ	砂粒含む	良	灰 5Y6/1	1/6	
155	049-05	須恵器 杯	F 6 SD 6 第1・2層	10.0	2.0	外面内面 ロクロナデ ナデ	細砂粒含む	良	灰 N6/0	1/8	
156	051-10	須恵器 杯	F 6 SD 6	9.0	-	外面内面 ロクロナデ ナデ	微砂粒少し含む	良	灰 N7/0	1/6	
157	051-07	須恵器 杯	F 6 SD 6	9.0	-	外面内面 不明 不明	砂粒少し含む	甘い	灰白 7.5YR8/1	1/6	磨耗激しい
158	049-03	須恵器 高杯	E 5 SD 6	10.0	-	外面内面 ナデ ナデ	砂粒含む (~2mm)	甘い	灰白 N7/0	1/3	杯部と脚部の境外面に粘土接合痕
159	051-08	須恵器 高杯	F 6 SD 6	-	-	外面内面 ロクロナデ ロクロナデ	細砂粒多く含む	甘い	内：灰白 7.5Y7/1 外：灰 7.5Y6/1	杯部 下半	杯部と脚部の境外面に粘土接合痕
160	050-02	須恵器 鉢	F 6 SD 6 第1・2層	18.5	12.5	外面内面 ロクロナデ後カキメ (9本/cm) ・ヘラ切り後ナデ ロクロナデ・ナデ	砂粒含む (~5mm)	良	灰 N6/0	1/3	口縁付近歪み大
161	053-02	須恵器 高杯	F 3 SD 2	13.0	-	外面内面 ロクロナデ ロクロナデ	細砂粒少し含む	良	灰 N6/0	1/6	
162	053-01	灰陶陶器	F 3 SD 2	-	-	外面内面 ロクロナデ ロクロナデ 高台 貼付ナデ	精良 (砂粒ほとんど含まず)	良	灰白 2.5Y7/1	底部 1/12	
163	053-07	須恵器 蓋	F 4 SD 8	7.5	-	外面内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	細砂粒少し含む	良	灰白 N7/0	1/12	
164	053-03	山茶碗 小碗	F 9 SD 14	-	-	外面内面 ロクロナデ・糸切り痕 ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	灰白 2.5Y7/1	底部 1/5	内面に自然釉
165	053-06	山茶碗 小碗	F 9 SD 14	-	-	外面内面 ロクロナデ・糸切り痕 ロクロナデ	細砂粒少し含む	良	灰白 5Y8/1	底部 1/2	内面に自然釉 高台モミガケ痕
166	054-01	土師器 杯	F 11 SH 26	12.8	3.5	外面内面 ヨコナデ・オサエ ヨコナデ・ナデ	細砂粒少し含む	良	浅黄橙 7.5YR8/3	2/3	器面剥離激しい
167	058-02	土師器 皿	F 12 SH 26	15.5	-	外面内面 ヨコナデ・オサエ ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	橙 5YR6/6	1/6	
168	058-04	土師器 甗	F 11 SH 26	26.0	-	外面内面 ナデ 不明	微砂粒含む	良	橙 7.5YR7/6	小片	内面磨耗激しい
169	063-08	須恵器 杯	D 11 SH 26	-	-	外面内面 ロクロナデ・回転糸切り ロクロナデ	微砂粒多く含む	良	浅黄 2.5Y8/3	1/4	内面底部に墨書
170	060-01	土師器 甗	F 19 SK 35	15.0	-	外面内面 ハケメ? ナデ	微砂粒含む	良	灰白 10YR8/2	1/8	器面剥離激しい
171	053-05	土師器 甗	F 19 SK 35	14.0	-	外面内面 ナデ ナデ	砂粒 ほとんど含まず	良	灰白 2.5Y8/2	1/8	器面磨減激しい
172	059-07	土師器 甗	F 19 SK 35	15.0	-	外面内面 不明 ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 1/7	器面磨耗激しい
173	059-03	土師器 甗	F 19 SK 35	15.0	-	外面内面 不明 ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 1/8	器面磨耗激しい
174	054-02	土師器 甗	F 19 SK 35	16.0	-	外面内面 ハケメ ナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 10YR8/2 橙 5YR7/6	口縁 1/4	器面磨耗激しい
175	055-02	土師器 甗	F 19 SK 35	18.0	-	外面内面 タデハケ (7本/cm) ヨコハケ (7本/cm)	細砂粒少し含む	良	灰白 10YR8/2	口縁 1/8	器面磨耗激しい
176	053-08	土師器 杯	F 19 SK 35	12.5	-	外面内面 オサエ タデハケ (6本/cm) 後ナデ	細砂粒少し含む	良	淡橙 5YR8/4	1/6	器面剥離激しい
177	059-05	黒色土器 杯	F 19 SK 35	13.5	-	外面内面 ナデ・オサエ 粗いヘラミガキ	微砂粒少し含む	良	内：黒 10YR2/1 外：灰白 10YR8/2	1/7	器面磨耗激しい
178	054-05	黒色土器 杯	F 19 SK 35	15.0	-	外面内面 オサエ ミガキ	砂粒ほとんど含まず	良	内：黒褐 10YR1/3 外：灰白 10YR8/2	1/5	器面磨耗激しい
179	055-03	黒色土器 杯	F 19 SK 35	16.5	-	外面内面 オサエ ミガキ	砂粒 ほとんど含まず	良	内：黒褐 10YR1/3 外：灰白 10YR8/2	1/8	器面磨耗激しい
180	054-04	黒色土器 杯	F 19 SK 35	15.0	-	外面内面 オサエ ミガキ	砂粒 ほとんど含まず	良	内：黒 5Y2/1 外：灰白 2.5Y8/2	1/6	器面磨耗激しい
181	059-04	黒色土器 椀	F 19 SK 35	-	-	外面内面 ナデ ナデ	微砂粒含む	良	内：暗灰 N3/0 外：灰白 7.5YR8/1	底部 1/4	器面磨耗激しい
182	053-04	黒色土器 椀	F 19 SK 35	-	-	外面内面 ナデ ナデ	砂粒 ほとんど含まず	良	内：黒 10YR2/1 外：浅黄橙 7.5YR8/3	底部 ほぼ完存	器面磨耗激しい
183	055-01	土師器 蓋	E 23 SK 37	19.5	3.7	外面内面 ナデ ナデ	細砂粒少し含む	良	黄橙 7.5YR8/8	1/2	器面磨耗激しい
184	059-01	土師器 甗	E 23 SK 37	25.0	-	外面内面 タデハケ (9本/cm) 後ナデ ヨコハケ (9本/cm)	微砂粒少量含む	良	にぶい赤褐 5YR4/3 にぶい橙 7.5YR7/4	口~肩1/2	口縁端部に沈線1条
185	056-04	土師器 甗	F 17 SK 30	-	-	外面内面 タデハケ (6本/cm) 後ナデ ヨコハケ (8本/cm)	細砂粒含む	良	黄橙 2.5YR8/3	頸部 1/10	
186	056-06	須恵器 杯蓋	F 17 SK 30	19.0	-	外面内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ	微砂粒含む	良	内：明青灰 5B7/1 外：灰 N6/0	1/6	
187	056-03	須恵器 杯	F 17 SK 30	16.0	4.3	外面内面 ロクロナデ ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰白 5Y8/1	1/12	
188	057-01	須恵器 蓋	F 17 SK 30	16.0	-	外面内面 ロクロナデ ロクロナデ	細砂粒含む	良	内：灰白 N7/0 外：灰 N6/0	小片	
189	010-01	須恵器 杯蓋	E 24 pit 1	14.8	-	外面内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~0.5mm)	良	灰白 2.5Y7/1	1/2	内面に墨書 歪み大 つまみ剥離痕あり

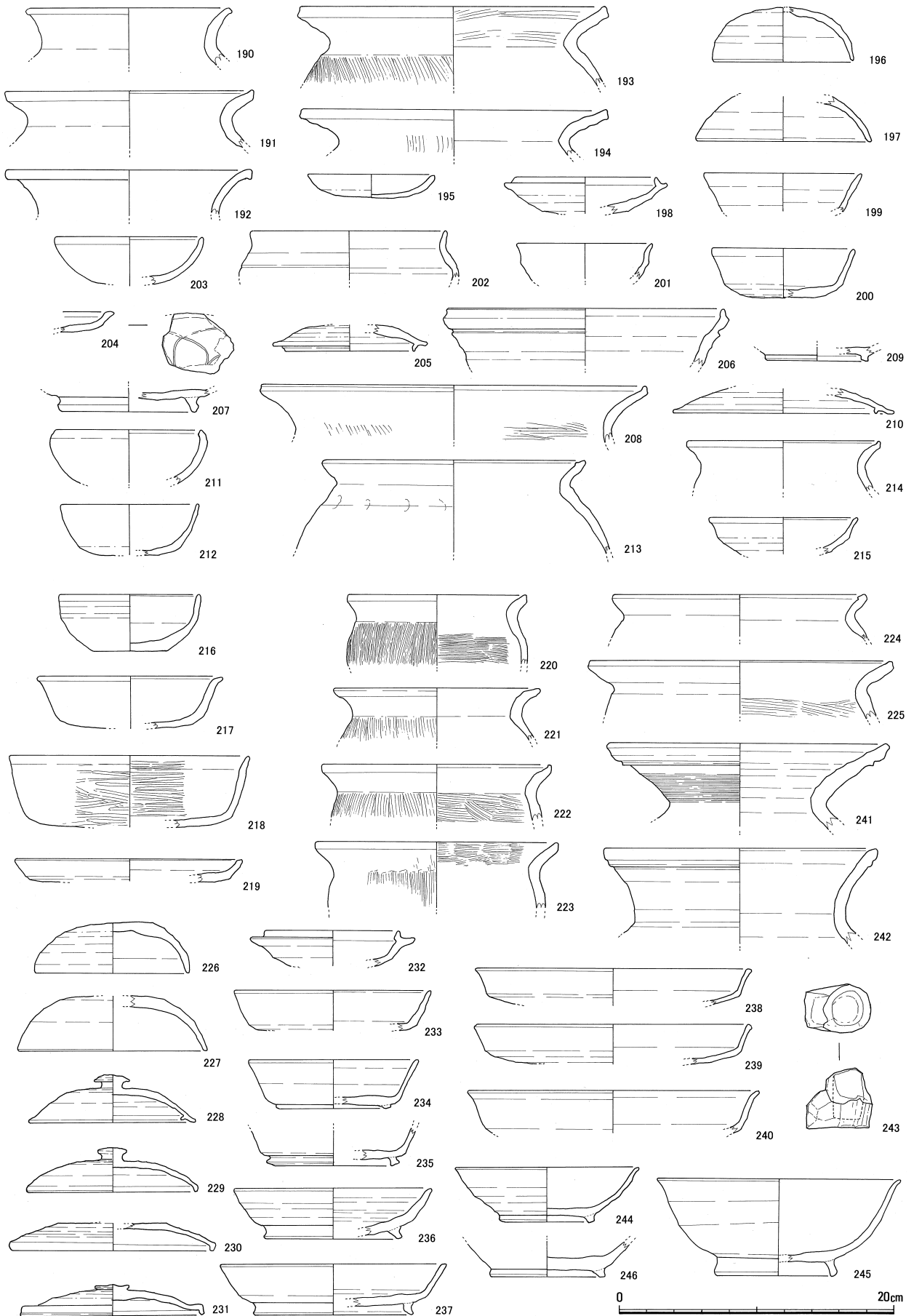
第7表 A地区土器観察表(4)



第32図 SD 6・2・8・14, SH26, SK35・30・37, pit出土土器実測図 (1:4)

番号	登録番号	器種	出土位置	法量 (cm)		調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径	器高						
190	057-02	土師器 甕	D10 SK25	15.0	—	外面 内面 ナデ ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/6	
191	057-08	土師器 甕	D11 SK25	18.0	—	外面 内面 ナデ ナデ	砂粒含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/8	器面磨耗激しい
192	058-01	土師器 甕	D11 SK25	18.0	—	外面 内面 不明 不明	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/1	口縁 1/6	器面磨耗激しい
193	054-03	土師器 甕	D10 SK25	22.0	—	外面 内面 タテハケ (4本/cm) ナデ	細砂粒多く含む	良	灰白 10YR8/2	口縁 1/4	
194	057-07	土師器 甕	D10 SK25	22.0	—	外面 内面 粗いハケ ナデ	砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁 1/9	
195	057-03	土師器 小皿	D10 SK25	9.2	1.7	外面 内面 ナデ ナデ	細砂粒含む	良	浅黄橙 7.5YR8/3	1/2	
196	058-05	須恵器 杯蓋	D10 SK25	10.0	3.9	外面 内面 ロクロナデ・ヘラ切り ロクロナデ	細砂粒含む	甘い	灰白 5Y8/1,7/1	1/11	外面天井部にヘラ記号あり
197	057-05	須恵器 杯蓋	D10 SK25	12.5	—	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰 N6/0	1/8	
198	057-06	須恵器 杯	D10 SK25	10.0	—	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ	細砂粒含む	良	青灰 5B6/1	1/6	
199	058-07	須恵器 杯	D11 SK25	11.5	—	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰 N6/0	1/10	
200	058-03	須恵器 杯	D10 SK25	10.5	3.6	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ・ナデ	細砂粒含む	良	オリーブ灰 2.5GY6/1	3/8	
201	058-08	須恵器 高杯	D11 SK25	10.0	—	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N5/0	1/7	
202	058-06	須恵器 短頸壺	D11 SK25	14.0	—	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N5/0	1/12	外面に沈線1条
203	060-04	土師器 椀	D17 SK33	11.0	3.5	外面 内面 ナデ ナデ	微砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/2	1/8	
204	060-02	土師器 皿	D17 SK33	—	—	外面 内面 ヘラミガキ ナデ・暗文	微砂粒含む	良	にぶい橙 5YR6/4 にぶい赤橙 5YR5/4	小片	内面に暗文 (ムア文)
205	060-06	須恵器 杯蓋	D17 SK33	9.5	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N6/0	1/10	
206	060-03	須恵器 甕	D17 SK33	18.5	—	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 5Y5/0	1/10	外面に沈線1条
207	061-02	須恵器 杯	C18 SK34	—	—	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 5Y6/1	1/6	
208	061-01	土師器 甕	C18 SK34	28.0	—	外面 内面 タテハケ (5本/cm) ヨコハケ (5本/cm)	微砂粒多く含む	良	にぶい橙 7.5YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3	1/16	
209	058-09	緑釉陶器	F17 SK32	—	—	外面 内面 不明	微砂粒含む	良	オリーブ灰 10Y6/2	底部小片	内面磨耗激しい
210	059-08	須恵器 杯蓋	F17 SK32	13.5	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白 N7/0 灰 N4/0	1/14	
211	060-05	土師器 椀	D11 SK27	10.5	—	外面 内面 ナデ ナデ	微砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/8	
212	056-02	須恵器 杯	C14 SK28	10.0	3.7	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N6/0	1/16	
213	056-05	土師器 甕	F 4 SK 5	19.0	—	外面 内面 オサエ ナデ	細砂粒含む	良	浅黄 2.5Y8/3	1/5	
214	056-01	土師器 甕	F11 SK23	14.0	—	外面 内面 ナデ ナデ	微砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR7/4	小片	調整不明瞭
215	060-07	須恵器 高杯	C16 SK31	11.0	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒含む	良	内: 灰 N5/0 外: 灰 N4/0	1/8	
216	069-01	土師器 椀	包含層	10.5	4.1	外面 内面 ロクロナデ・ヘラ切り ロクロナデ・オサエ	良好	良	灰白 2.5Y8/2	1/2	
217	068-07	土師器 椀	E11 包含層	13.5	4.0	外面 内面 ロクロナデ・オサエ ヨコナデ・ナデ	良好	良	灰白 2.5Y8/2	1/6	外面調整不明瞭
218	071-04	土師器 椀	B 7 自然流路上層	17.5	5.2	外面 内面 ヨコナデ・オサエ後粗いミガキ ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR7/3	1/8	
219	067-03	土師器 皿	F12 包含層	16.5	1.5	外面 内面 ヨコナデ ヨコナデ・ナデ	良好	良	淡橙 5YR8/4	1/4	
220	064-05	土師器 甕	D11 包含層	13.0	—	外面 内面 タテハケ (10本/cm) ヨコハケ (10本/cm)	微砂粒多く含む	良	内: 橙 7.5YR6/6 外: にぶい橙 7.5YR6/3	1/8	
221	064-03	土師器 甕	D18 包含層	15.0	—	外面 内面 タテハケ (5本/cm) ナデ	微砂粒少し含む	良	淡黄 2.5Y8/3	1/6	
222	064-04	土師器 甕	D 3 包含層	16.5	—	外面 内面 タテハケ (4本/cm) ヨコハケ (6本/cm)	微砂粒少し含む	良	にぶい黄橙 10YR7/4	1/6	
223	065-06	土師器 甕	B12包含層 第1・2層	17.5	—	外面 内面 タテハケ (8本/cm) ナデ 口縁 後内面ヨコナデ	砂粒含む (~6mm)	良	にぶい橙 7.5Y5/3	1/6	
224	068-05	土師器 甕	F19 包含層	18.5	—	外面 内面 不明 不明	良好	良	灰白 2.5Y8/2	1/5	器面磨耗激しい
225	068-01	土師器 甕	E 9 包含層	22.0	—	外面 内面 タテハケ (4本/cm) ヨコハケ (9本/cm)	良好	良	浅黄橙 7.5YR8/6	1/4	
226	063-09	須恵器 杯蓋	C15 包含層	11.0	4.7	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ・ヘラ切り ロクロナデ	微砂粒多く含む	良	灰白 2.5Y7/1	1/4	外面天井部にヘラ記号
227	065-04	須恵器 杯蓋	C19 包含層	13.5	4.0	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ・ヘラ切り ロクロナデ	砂粒多く含む (~3mm)	良	灰 N6/0	1/5	
228	064-06	須恵器 杯蓋	D11 包含層	10.0	3.5	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒多く含む	良	内: 灰白 N7/0 外: 灰 N6/0	1/6	
229	063-10	須恵器 杯蓋	D11 包含層	12.0	3.2	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	内: 灰 N5/0 外: 灰 N6/0	小片	
230	063-03	須恵器 杯蓋	C17 包含層	15.0	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR7/4	1/8	
231	065-03	須恵器 杯蓋	C 4 包含層	13.5	2.2	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~2mm)	良	灰白 2.5Y7/1	1/12	
232	063-05	須恵器 杯	D 4 包含層	10.0	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒多く含む	良	内: 灰 N6/0 外: 灰白 2.5Y7/1	1/7	
233	068-02	須恵器 杯	D 4 包含層	14.5	3.0	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	良好	良	にぶい赤橙 10R6/3	1/2	
234	065-01	須恵器 杯	B23 包含層	12.5	3.5	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ後ナデ ロクロナデ	微砂粒含む	良	暗灰 N3/0	1/2	
235	072-03	須恵器 杯	B11 自然流路上層	—	—	外面 内面 ロクロナデ・ナデ ロクロナデ	細砂粒含む	良	内: 灰 N6/0 外: 灰 N4/0	1/4	
236	063-04	須恵器 杯	D 5 包含層	14.5	3.5	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ	砂粒含む	良	灰 5Y5/1	1/3	
237	065-02	須恵器 杯	B12 包含層	16.5	3.7	外面 内面 ロクロナデ・ナデ ロクロナデ	砂粒含む (~3mm)	良	灰 N5/0	1/4	
238	064-01	須恵器 杯	D 4 包含層	20.0	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 2.5Y8/1	1/8	
239	064-02	須恵器 杯	D 4 包含層	20.0	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白10YR8/1	1/10	
240	065-05	須恵器 杯	C16 包含層	21.0	—	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	砂粒含む (~4mm)	良	オリーブ灰 5GY5/1	1/10	
241	063-06	須恵器 甕	C 7 包含層	20.5	—	外面 内面 ロクロナデ・カキメ (11本/cm) ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	黄灰 2.5Y6/1	1/5	
242	067-02	須恵器 甕	C23 拡張部分	20.0	—	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	良好	良	にぶい橙 7.5YR7/4	1/8	
243	072-04	須恵器 円筒埴輪立て	包含層	—	—	外面 内面 オサエ・ナデ ナデ	微砂粒含む	良	褐灰 10YR6/1	破片	
244	068-06	灰釉陶器 椀	F18 包含層	13.5	4.2	外面 内面 ロクロナデ・糸切り ロクロナデ	良好	良	灰白 10YR8/1	1/4	
245	008-01	灰釉陶器 椀	包含層	17.5	7.0	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ・ナデ	微砂粒含む	やや良	灰白 10YR8/1	1/3	
246	071-06	山茶椀	農業排水	—	—	外面 内面 ロクロナデ・糸切り ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y5/1	底部 ほぼ完存	

第8表 A地区土器観察表(5)



第33图 SK25·33·34·32·27·28·5·23·31·包含層出土土器実測图(1:4)

甕 (126~130) いずれも頸部から口縁部の破片である。口径は20~28cmであるが、口縁端部の形状はそれぞれ異なる。126は外面に波状文が、129・130にはカキメがみられる。

器台 (131) 杯部の破片で、口径35cm前後である。

鉢 (132~139) 132・134・135は、口縁部が外反するものである。133は口縁部が短く立ち上がる。136は厚い円盤状の底部で、体部外面はカキメ調整である。137~139は、底部は平底、体部は直線的であり、ケズリによる調整がみられる。

(2) S D 6 出土土器 (第32図)

①土師器

椀 (140~143) 口径11cm、器高3.5cm前後である。口縁端部は尖り気味である。口縁部はヨコナデで、体部外面にはオサエの痕が残る。140の底部の調整はケズリである。

甕 (144~149) 144~146は口径16cm程の中型の甕である。147~149は口径22cm程で、長胴甕であろう。

②須恵器

杯蓋 (150・151) 天井部から丸味をもって口縁部に続くもので、口径が10cmのもの (150) と12cmの

番号	登録番号	器種	出土位置	法量(cm)		調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径	器高						
247	046-07	須恵器 杯蓋	E7 SE11 第2層	14.0	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む	良	灰 5Y5/1	1/4	外面に自然釉付着
248	044-02	須恵器 杯蓋	E7 SE11 上面	15.0	—	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y7/1	1/8	
249	046-03	須恵器 杯蓋	E7 SE11 第2層	—	—	外面 内面 ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒含む	良	内: 灰白 5Y7/1 外: 灰白 N8/0	つまみ 完存	
250	044-03	須恵器 杯	E7 SE11 上面	—	—	外面 内面 底部糸切り ナデ	微砂粒少し含む	甘い	灰白 2.5Y8/1	1/10	
251	044-05	須恵器 杯	E7 SE11 上面	—	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む	良	灰 N5/0	1/5	
252	046-05	須恵器 杯	E7 SE11 第2層	12.5	4.2	外面 内面 ロクロナデ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白 N8/0	1/4	
253	047-06	須恵器 杯	E7 SE11 第3層	12.4	3.6	外面 内面 ロクロナデ・ヘラ切り後ナデ ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰白 N7/0	1/2	
254	044-04	土師器 甕	E7 SE11 上面	20.0	—	外面 内面 タテハケ(5本/cm) ナデ	砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/4	小片	
255	047-04	土師器 甕	E7 SE11 第3層	17.0	—	外面 内面 タテハケ(4本/cm) ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/10	黒斑
256	048-01	土師器 甕	E7 SE11 第3層	32.0	—	外面 内面 ハケメ ナデ	細砂粒含む	良	明褐灰 7.5Y7/2	口縁部小 片	
257	002-01	土師器 杯	E7 SE11 第3層	13.8	3.2	外面 内面 オサエ ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/1 にぶい橙 7.5YR7/4	完存	穿孔1か所 内面へラ文字「甕」
258	003-01	土師器 杯	E7 SE11 第3層	13.0	3.1	外面 内面 オサエ後粗いナデ ナデ	微砂粒含む	良	灰白 10YR8/1 褐 7.5YR4/6	完存	
259	001-01	土師器 杯	E7 SE11 第3層	13.8	3.8	外面 内面 オサエ後粗いナデ ナデ	微砂粒含む	良	内: 灰白 10YR8/1 外: 灰白 7.5YR8/2	3/5	口縁端部に黒変 外面に「池？」の墨書
260	048-02	土師器 杯	E7 SE11 第3層	15.0	—	外面 内面 ヨコナデ・オサエ ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5YR8/2	1/8	
261	002-02	土師器 杯	E7 SE11 第3層	19.5	3.5	外面 内面 ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/10	内面にへラ記号「□」あり
262	046-06	土師器 皿	E7 SE11 第2層	16.0	1.7	外面 内面 ヨコナデ・オサエ ヨコナデ・ナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/2	1/5	
263	047-01	土師器 皿	E7 SE11 第3層	16.0	2.1	外面 内面 ヨコナデ・オサエ ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	内: 灰黄 2.5Y7/2 外: にぶい黄橙 10YR4/3	1/12	
264	047-02	土師器 皿	E7 SE11 第2層	17.0	3.0	外面 内面 ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/6	
265	047-03	土師器 皿	E7 SE11 第2層	19.5	2.8	外面 内面 ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/4	
266	044-07	土師器 皿	E7 SE11 第2層	20.0	2.5	外面 内面 ミガキ・ナデ ミガキ・ナデ	細砂粒多く含む	良	淡黄 2.5Y8/3	1/5	
267	045-01	土師器 蓋	E7 SE11 第4層	26.5	6.0	外面 内面 ナデ後粗いミガキ ヨコハケ(5本/cm)後暗文(放射状)	微砂粒少し含む	良	橙 5YR7/6	1/4	
268	001-04	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第3層	15.0	5.1	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ	細砂粒含む (0.5mm)	良	灰白 2.5Y7/1	1/7	外面底部に「大三」墨書あり
269	044-06	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 内面 ロクロナデ・ケズリ ロクロナデ	微砂粒多く含む	良	内: 灰白 N7/0 外: 褐灰 10YR6/1	底部5/8	
270	001-03	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第2層	11.6	3.1	外面 内面 ロクロナデ・ナデ(板目痕) ナデ	細砂粒含む (~0.5mm)	良	内: 灰白 10YR7/1 外: 灰黄褐 10YR6/2	完存	
271	044-01	灰釉陶器 椀	E7 SE11 上面	14.0	3.5	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 2.5Y8/1	1/3	272と同一個体か 内外施釉(つけかけ)
272	046-04	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第2層	14.0	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 7.5Y8/1	1/8	271と同一個体か 内外施釉(つけかけ)
273	046-01	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第2層	—	—	外面 内面 ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 7.5Y8/1	1/3	
274	001-02	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	13.6	4.3	外面 内面 ケズリ・ナデ・ヨコナデ ミガキ	微砂粒含む	良	内: 黒 外: 灰白 2.5Y8/1	完存	
275	048-04	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	15.0	—	外面 内面 ナデ・ケズリ ミガキ	細砂粒含む	良	内: 黒 N2/0 外: 灰白 2.5Y8/1	1/10	
276	048-03	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 内面 不明 ナデ	微砂粒含む	良	内: 黒褐 10YR3/1 外: 明褐灰 2.5YR7/2	1/12	脚外面に煤または油煙付着
277	046-02	黒色土器 椀	E7 SE11 第2層	—	—	外面 内面 不明 不明	微砂粒含む	良	内: 灰 N4/0 外: 灰白 2.5Y8/2	1/3	
278	045-03	黒色土器 椀	E7 SE11 第2層	—	—	外面 内面 ナデ ミガキ	微砂粒多く含む	良	内: 黒 N2/0 外: 灰白 2.5Y8/2	底部	
279	047-05	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 内面 不明 不明	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/1	1/2	
280	045-02	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 内面 不明 ミガキ	微砂粒含む	良	内: 黒 N2/0 外: 灰白 10YR8/2	3/4	

第9表 A地区土器観察表(6)

もの (151) がある。

杯 (152~157) 受部を持ち、立ち上がりが短く内傾するものである。

高杯 (158・159) 口径12cmで、158は無蓋である。

鉢 (160) 厚い円盤状の底部から体部は直線的に上方にのびる。外面にはカキメを施す。

(3) その他の溝出土土器

SD 2からは須恵器高杯 (161)、灰釉陶器 (162)

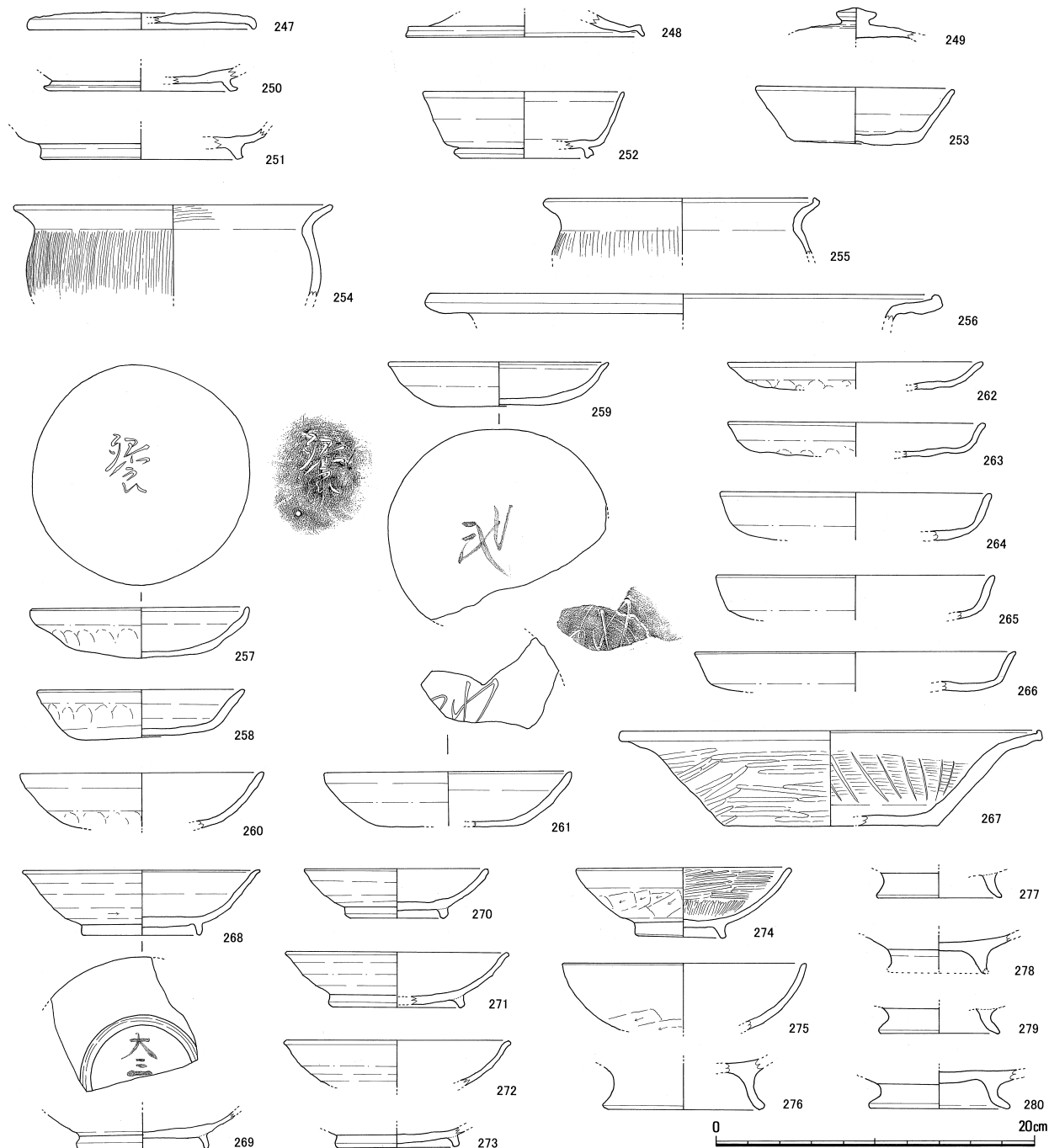
が、SD 8からは須恵器杯蓋 (163) が、SD 14からは陶器小椀 (164) と山茶椀 (165) が、それぞれ出土している。

(4) SH2 6出土土器 (第32図)

①土師器

杯 (166) 口径13cm程、器高5cmで、口縁部ヨコナデ、外面はオサエである。

皿 (167) 口径16cm前後で、口縁部ヨコナデ、外面はオサエである。



第34図 SE11出土土器実測図 (1:4)

甕 (168) 口径26cm程の大型の甕である。

②須恵器

杯 (169) 底部は平坦で高台が付く。底部外面には墨書がみられる。

(5) SK 3 5 出土土器 (第32図)

①土師器

甕 (170~175) 口径14~18cmの中型の甕である。

杯 (176) 口縁部ヨコナデ、底部外面はオサエである。

②黑色土器

杯 (177~180) 内面全面と外面口縁部が黒色であ

る。口径13~17cmで、外面はオサエ、内面はミガキである。

椀 (181・182) 底部の破片である。

(6) SK 3 7 出土土器 (第32図)

①土師器

蓋 (183) 口径20cmで、宝珠つまみを持つ。

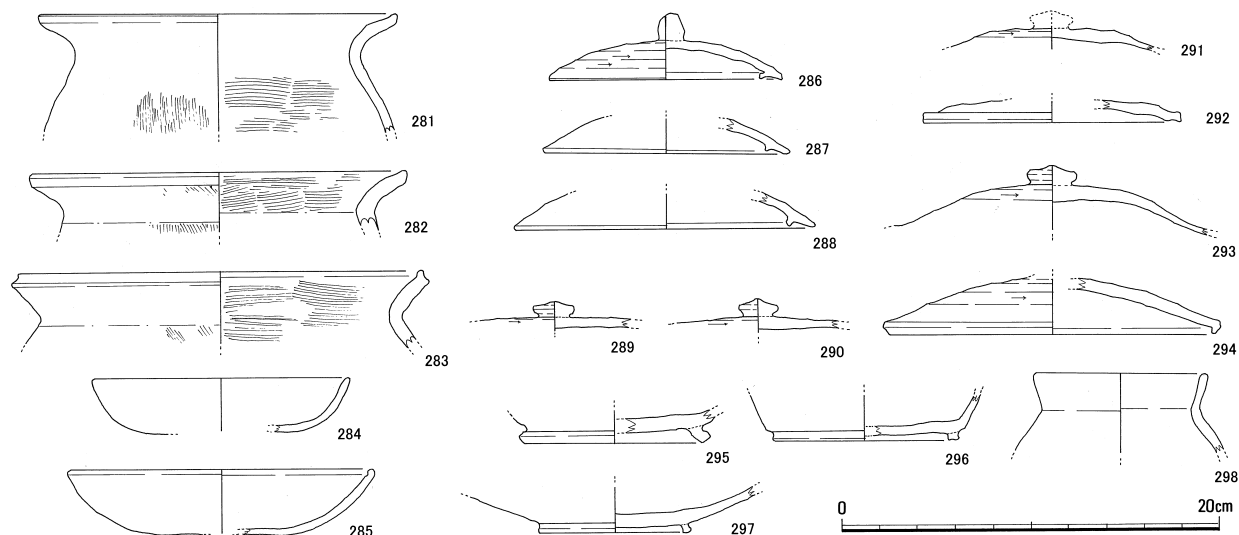
甕 (184) 口径25cmで、長胴甕になるものであろう。口縁部ヨコナデ、胴部外面はタテハケ、内面はヨコハケである。

(7) SK 3 0 出土土器 (第32図)

①土師器

番号	登録番号	器種	地区名	出土位置	法量(cm)		調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考	
					口径	器高							
281	106-02	土師器甕	A地区	SB103 D11 Pit6	19.2	—	外面 内面	タテハケ(9本/cm) ヨコハケ(8本/cm)	細砂粒含む (~2.5mm)	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 1/4	
282	104-01	土師器甕	A地区	SB110 C19 Pit1	20.2	—	外面 内面	タテハケ(8本/cm) ヨコハケ(7~8本/cm)	砂粒含む (~1.5mm)	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁 1/10	
283	104-02	土師器甕	A地区	SB111 F19 Pit2	21.6	—	外面 内面	タテハケ(8本/cm) ヨコハケ(8本/cm)	砂粒含む (~1.5mm)	良	にぶい橙 5YR7/3	口縁 1/10	
284	106-05	土師器杯	A地区	SB104 D11 Pit7	13.7	3.9	外面 内面	ナデ ナデ	砂粒含む (~3mm)	良	浅黄橙 10YR8/3	1/3	
285	105-06	黑色土器杯	A地区	SB105 E33 Pit2	16.3	3.5	外面 内面	不明 ミガキ	砂粒含む (~4mm)	良	内：黒 外：浅黄橙 7.5YR8/3	1/3	
286	107-02	須恵器杯蓋	A地区	SB107	12.4	3.5	外面 内面	ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~3.5mm)	良	灰 N6/0	1/3	
287	106-07	須恵器杯蓋	A地区	SB105 D13 Pit10	13.1	—	外面 内面	ロクロナデ ロクロナデ	砂粒含む (~1.5mm)	良	灰白 N6/0	口縁 1/10	
288	104-06	須恵器杯蓋	A地区	SB111 F20 Pit1	16.0	—	外面 内面	ロクロナデ ロクロナデ	砂粒含む (~1.5mm)	良	灰 N6/0	口縁 1/10	
289	105-02	須恵器杯蓋	B地区	SB117 C30 Pit1	—	—	外面 内面	ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~1mm)	良	灰白 7.5Y6/1	小片	
290	105-03	須恵器杯蓋	B地区	SB118 B30(C31) Pit1	—	—	外面 内面	ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~4mm)	良	灰白 N7/0	小片	
291	104-04	須恵器杯蓋	A地区	SB110 B19 Pit2	—	—	外面 内面	ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~3mm)	良	灰 N6/0	小片	
292	106-06	須恵器杯蓋	A地区	SB105 D12 Pit10	—	—	外面 内面	ロクロナデ ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N6/0	小片	
293	105-04	須恵器杯蓋	B地区	SB122 D33 Pit10	—	—	外面 内面	ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~1.5mm)	良	灰白 10Y7/1	天井部 1/2	
294	105-05	須恵器杯蓋	B地区	SB121 D33 Pit1	17.8	—	外面 内面	ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~1mm)	良	灰白 N8/0	1/5	
295	104-03	須恵器杯	A地区	SB110 B19 Pit2	—	—	外面 内面	ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~3mm)	良	明青灰 5B7/1	底部 1/8	
296	104-05	須恵器杯	A地区	SB110 D19 Pit4	—	—	外面 内面	ロクロナデ ロクロナデ	砂粒含む (~1.5mm)	良	灰白 7.5Y7/1	底部 1/8	
297	105-07	灰釉陶器皿	B地区	SB123 E33 Pit9	—	—	外面 内面	ロクロナデ・ロクロケズリ ロクロナデ	砂粒含む (~1mm)	良	灰白 2.5GY8/1	底部 1/2	
298	107-03	土師器甕	A地区	SB108 F12 Pit2	9.2	—	外面 内面	不明 不明	砂粒含む (~1.5mm)	良	灰 N6/0	口縁 1/6	

第10表 A・B地区土器観察表



第35図 A・B地区掘立柱建物出土遺物実測図(1:4)

甕 (185) 頸部の破片である。外面タテハケ、内面はヨコハケである。

②須恵器

杯蓋 (186) 口径19cmで、口縁部は下方に折れて終わる。外面天井部はロクロケズリである。

杯 (187) 口径16cm、器高4cm程である。底部は平坦で、体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。高台の断面は四角形である。

壺 (188) 口縁部の小片であるが、口径は16cm前後である。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚し外面に面を持つ。

(8) Pit出土土器 (第32図)

須恵器杯蓋 (189) 口径15cm程であるが歪みが大い。内面に墨書がみられる。

(9) SK 2 5 出土土器 (第33図)

①土師器

甕 (190～194) いずれも口頸部の破片であるが、口径15～18cmの中型のもの (190～192) と口径22cm前後の大型のもの (193・194) がある。

小皿 (195) 口径9cm程の小皿である。

②須恵器

杯蓋 (196・197) 天井部から丸味をもって口縁部に続くものである。内外面ともロクロナデで、196は天井部ヘラ切りである。

杯 (198～200) 198は受け部を持ち、立ち上がりが短く内傾するものである。199・200は平坦な底部から体部が直線的に立ち上がるものである。

高杯 (201) 杯部の小片である。

短頸壺 (202) 口頸部の小片で、外面に沈線が1条みられる。

(10) その他の土坑出土土器 (第33図)

SK 33からは土師器椀 (203)・皿 (204)、須恵器杯蓋 (205)・甕 (206) が、SK 34からは須恵器杯 (207)、土師器甕 (208) が、SK 32からは緑釉陶器 (209)、須恵器杯蓋 (210) が、SK 27からは土師器椀 (211) が、SK 28から須恵器杯 (212) が、SK 5からは土師器甕 (213) が、SK 23からは土師器甕 (214) が、SK 31からは須恵器高杯 (215) が、それぞれ出土した。

(11) 遺物包含層等出土遺物 (第33図)

遺物包含層からは土師器 (216～225)、須恵器 (226

～242)、円面硯 (243)、灰釉陶器 (244・245)、山茶椀 (246) が出土した。

(12) SE 1 1 出土土器 (第34図)

①須恵器 (247～253)

杯蓋 (247～249) 口径15cm程で、口縁部内側のかえり無く、端部は下方に折れて終わる。宝珠つまみを持つ。

杯 (250～253) 底部は平坦で、体部は斜めに直線的に立ち上がる。高台の付くもの (250～252) と付かないもの (253) がある。

②土師器 (254～267)

甕 (254～256) 口径17～20cmの中型のもの (254・255) と口径32cm前後の大型のもの (256) がある。254・255の胴部外面はタテハケである。

杯 (257～261) 口径13～15cmのもの (257～260) と20cm前後のもの (261) がある。口縁部ヨコナデで、外面にはオサエの痕がみられる。257の底部内面にはヘラで「饗」と刻まれており、261の底部内面にもヘラによる文字が刻まれている。また、259の底部外面には「池」の墨書がみられる。

皿 (262～266) 口径が16～17cmのもの (262～264) と20cm前後のもの (265～266) がある。

盤 (267) 口径27cm程で、底部は平坦、体部は斜めに直線的に立ち上がり、口縁は外反する。外面はミガキ、内面にはハケメと暗文がみられる。

③灰釉陶器

椀 (268～273) 口径12～16cm、器高3～5cm程の椀である。高台の断面は三日月形が退化したもので、折戸53号窯式⁽¹²⁾であろう。268の底部外面には「大三」の墨書がみられる。

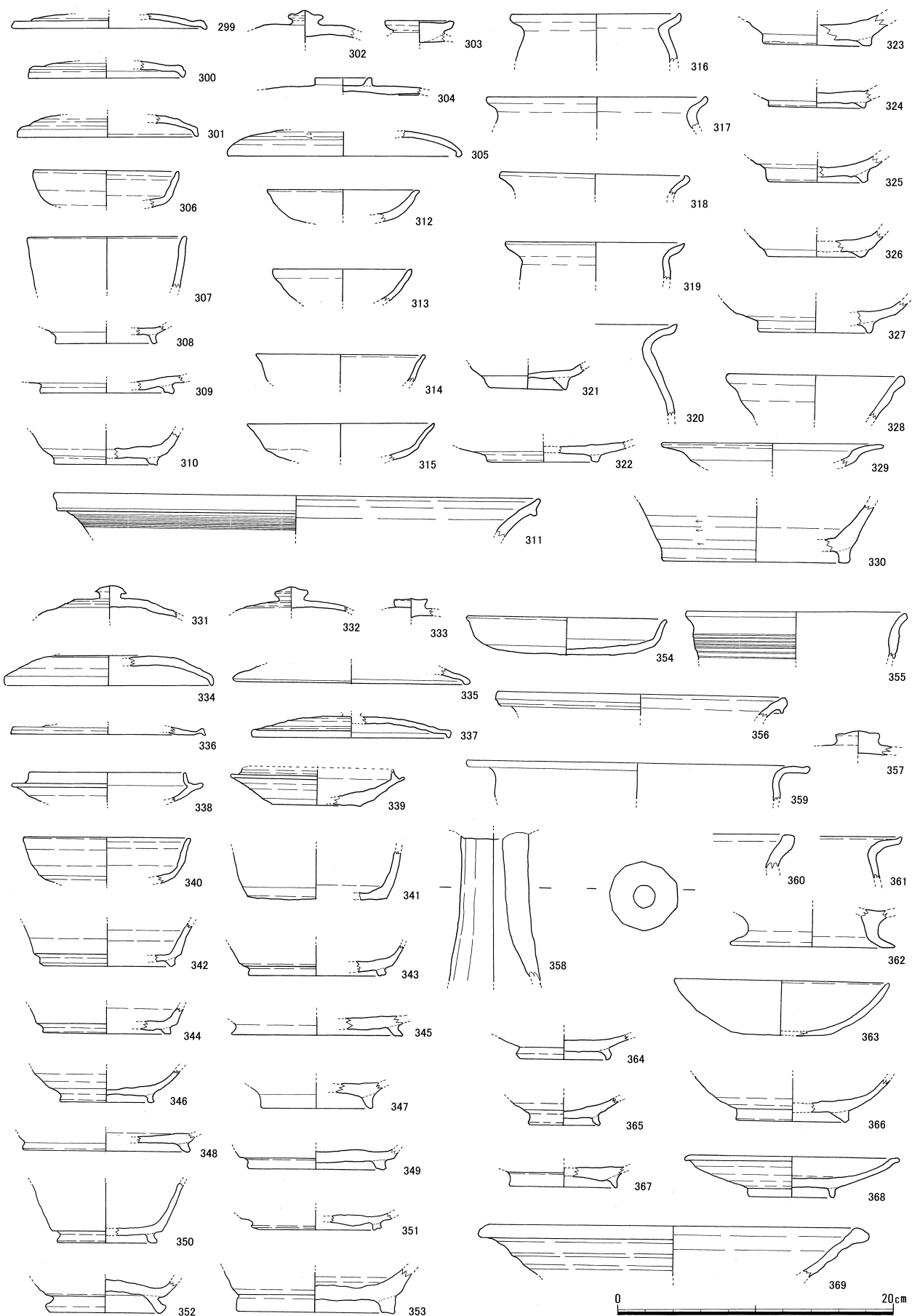
④黒色土器

椀 (274～280) 口径13～15cm、高台径7～10cmである。内面はミガキである。

(13) 掘立柱建物出土土器 (第35図)

第35図にはA地区及びB地区の掘立柱建物出土遺物を図示した。A地区出土のものには、土師器杯 (284・285)・甕 (281～283・298)、須恵器杯蓋 (286～288・291・292)・杯 (295・296) があるが、遺物そのものの時期は飛鳥～平安時代である。

(服部芳人・河北秀実)



第36图 B·C地区出土土器实测图 (1:4)

番号	登録番号	器種	地区名	出土位置	備考
299	073-04	須恵器 杯蓋	B地区	SK42	
300	075-07	須恵器 杯蓋	B地区	SK41	
301	075-01	須恵器 杯蓋	B地区	SK38	
302	075-04	須恵器 杯蓋	B地区	SK38	
303	076-01	須恵器 杯蓋	B地区	SK40	
304	077-01	須恵器 杯蓋	B地区	SK54	
305	077-07	須恵器 杯蓋	B地区	SK53	
306	077-03	須恵器 杯	B地区	SD47	
307	077-05	須恵器 杯	B地区	SD43	
308	077-13	須恵器 杯	B地区	SK58	
309	073-08	須恵器 杯	B地区	SK39	
310	074-04	須恵器 杯	B地区	SK49	
311	076-03	須恵器 甕	B地区	SK38	
312	074-05	土師器 椀	B地区	SK39	
313	075-02	土師器 椀	B地区	SK40	
314	073-07	土師器 杯	B地区	SK42	
315	073-03	土師器 杯	B地区	SK40	
316	073-05	土師器 甕	B地区	SK42	
317	073-09	土師器 甕	B地区	SK42	
318	076-02	土師器 甕	B地区	SK40	
319	075-05	土師器 甕	B地区	SD51	
320	076-04	土師器 甕	B地区	SK38	
321	078-04	土師器 椀	B地区	SD51	
322	077-04	灰釉陶器 皿	C地区	SD59	
323	074-02	山茶椀	B地区	SD49	
324	074-06	山茶椀	B地区	SD49	
325	075-03	山茶椀	B地区	SD51	
326	074-07	山茶椀	B地区	SD49	
327	074-03	山茶椀	B地区	SD49	
328	077-06	山茶椀	B地区	SD43	
329	073-01	灰釉陶器 段皿	B地区	SK42	
330	077-10	陶器 鉢	B地区	SD51	
331	085-02	須恵器 杯蓋	B地区	遺物包含層	
332	079-04	須恵器 杯蓋	B地区	遺物包含層	
333	082-06	須恵器 杯蓋	B地区	遺物包含層	
334	081-02	須恵器 杯蓋	B地区	遺物包含層	
335	085-04	須恵器 杯蓋	B地区	遺物包含層	
336	079-14	須恵器 杯蓋	B地区	遺物包含層	
337	081-11	須恵器 杯蓋	B地区	遺物包含層	
338	080-02	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
339	080-04	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
340	080-05	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
341	083-04	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
342	079-15	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
343	079-05	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
344	081-03	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
345	081-01	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
346	079-01	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
347	081-07	山茶椀	B地区	遺物包含層	
348	081-05	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
349	081-09	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
350	085-03	須恵器 杯	C地区	遺物包含層	
351	083-06	須恵器 杯	B地区	遺物包含層	
352	083-02	須恵器 壺	B地区	遺物包含層	
353	082-03	須恵器 壺	B地区	遺物包含層	
354	079-13	須恵器 皿	B地区	遺物包含層	
355	079-03	須恵器 鉢	B地区	遺物包含層	
356	080-07	須恵器 甕	B地区	遺物包含層	
357	082-05	土師器 蓋	B地区	遺物包含層	
358	080-08	土師器 高杯	B地区	遺物包含層	
359	079-12	土師器 甕	B地区	遺物包含層	
360	084-04	須恵器 甕	B地区	遺物包含層	
361	083-08	土師器 甕	B地区	遺物包含層	
362	080-06	土師器 椀	B地区	遺物包含層	
363	080-01	黒色土器 椀	B地区	遺物包含層	
364	081-12	灰釉陶器	B地区	遺物包含層	
365	079-06	灰釉陶器	B地区	遺物包含層	
366	083-03	灰釉陶器 椀	B地区	遺物包含層	
367	081-08	山茶椀	B地区	遺物包含層	
368	083-01	灰釉陶器 皿	B地区	遺物包含層	
369	082-01	陶器 鉢	B地区	遺物包含層	

第11表 B・C地区土器一覧表

2 B・C地区の土器

①掘立柱建物出土の土器（第35図）

B地区の掘立柱建物出土の土器には須恵器杯蓋（289・290・293・294）、灰釉陶器皿（297）があり、時期は奈良時代から平安時代である。

②土坑および溝出土の土器（299～330）（第36図）

土坑および溝からは、須恵器杯蓋（299～305）・杯（306～310）・甕（311）、土師器椀（312・313・321）・杯（314・315）・甕（316～320）、灰釉陶器皿（322・329）、山茶椀（323～328）、陶器鉢（330）が出土した。

③遺物包含層出土の土器（331～369）（第36図）

遺物包含層からは、須恵器杯蓋（331～337）・杯（338～346・348～351）・壺（352・353）・皿（354）・鉢（355）・甕（356・360）、土師器蓋（357）・高杯（358）・甕（359・361）・椀（362）、黒色土器椀（363）、灰釉陶器（364～366・368）、山茶椀（347・367）、陶器鉢（369）が出土した。

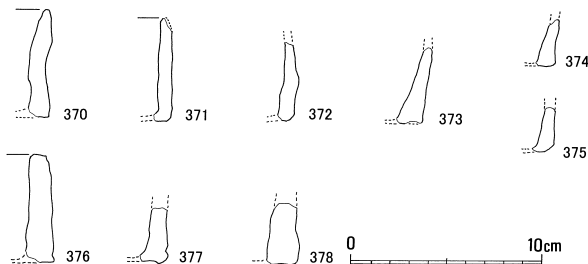
④製塩土器（370～378）（第37図）

製塩土器（370～378）はいずれもB地区出土で、いわゆる志摩式製塩土器である。小片であるが、器高は5～6cmで、口径は20cm程度になるものであろう。器壁は薄手のもの（370～375・377）と厚手のもの（376・378）がある。

（服部芳人・河北秀実）

番号	登録番号	器種	地区名	出土位置	備考
370	108-04	製塩土器	B地区	D33 Pit 7	
371	108-07	製塩土器	B地区	E34 包含層	
372	108-06	製塩土器	B地区	D30 SK40	
373	108-09	製塩土器	B地区	C35 包含層	
374	108-01	製塩土器	B地区	C32 Pit 2	
375	108-02	製塩土器	B地区	E34 Pit 4	
376	108-03	製塩土器	B地区	D32 Pit 7	
377	108-05	製塩土器	B地区	E34 Pit 8	
378	108-08	製塩土器	B地区	C33 包含層	

第12表 製塩土器一覧表



第37図 B地区出土製塩土器実測図（1:4）

3 瓦

出土した瓦は、軒丸瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鴟尾など200点近くあるが、破片がほとんどである。大半はA地区で出土し、特にSD1に集中する。B地区のSD49・51でも出土した。

①軒丸瓦 (379・380) (第38図)

2点ともにA地区SD1出土である。379は蓮弁は単弁8葉で、子葉はない。外区および内区外縁に1条の圏線がめぐり、中房の蓮子は、1+6の配置である。各蓮弁の輪郭線は間弁によって離され、重なることなくそれぞれ別個に蓮弁を囲む。瓦当裏面上部に丸瓦端面を押し当てて接合したものと思われる。瓦当径16.5cm、中房径4.5cmである。380は破片であるが、379と同范の可能性が高い。これらの軒丸瓦は、津市大里窪田町付近で採集されたとされる軒丸瓦と外縁の違いはあるものの蓮華文は類似する。いわゆる山田寺系の軒丸瓦である。7世紀中葉のものであろうか。

②丸瓦 (381~385) (第38図)

平瓦に比べ、全体的に個体数は少ない。成形技法に差異は認められず、凹面に布目を残し、凸面にナデ調整を行う。381は狭端面と側面の角を2cm程カットする。厚手のもの(381~384)は凹面の布目痕が6~8本/cmと粗く、薄手のもの(385)は布目痕が10本/cmと細かい。383は布目のつなぎ目痕跡が明瞭に残る。384は玉縁付近の破片である。

③平瓦 (386~391・393~403) (第38~40図)

布目痕が両面にあるI類と布目痕が凹面にあるII類に分けられる。

I類 386の1点だけである。凹面には7本/cmの布目残り、模骨痕跡を縦方向にナデ消す。凸面には横方向のケズリおよびナデにより消されるが凹面よりやや粗い布目痕跡が部分的に確認できる。

II類 387~391・393~403は凸面の縄目タタキをナデ消すa類と縄目タタキを残すb類に分けられる。

a類 (387~391・393~398) 凸面縄目タタキは横方向にナデ消され、明瞭に残るものは少ない。凹面には模骨痕跡をナデ消すもの(388~391・393)と、ハケ状の工具で掻き取るもの(394~398)があるが、共に10本前後/cmのやや粗い布目痕跡を残

す。389の凹面には、模骨痕跡のくいちがいが確認でき、枳板を継ぎ足して成形した可能性がある。また、広端面に植物痕跡が残る例(390・391)、薄手で模骨痕跡を棒状の工具でナデ消すもの(393)もある。

b類 (399~403) a類の縄目タタキに比べると目がやや細かい感がある。b類も凹面の布目痕を残すもの(399~401)と、布目痕をナデ消すもの(402・403)がある。400は縄目タタキの板の痕跡が残り、約2cm幅の板である。b類の平瓦の凹面には、模骨痕跡は明瞭に確認できず、側面のケズリは2回にわたって施される。また凸面のタタキは縦方向に施されるなど1枚作りの可能性がある。

④道具瓦 (第39~41図)

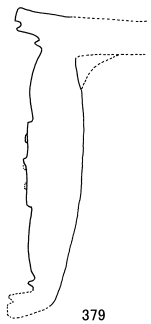
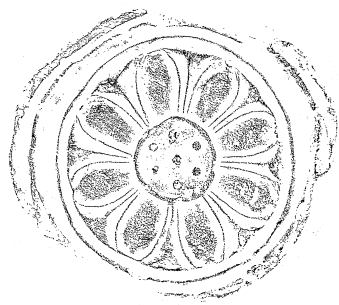
ア 熨斗瓦 (392)

平瓦を幅18cmに截断したものである。技法的にはII a類に含まれるものである。

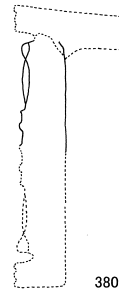
イ 鴟尾 (404~413)

厚さ2cm程で、その多くは凹面に同心円の当て具痕が残る。409の凸面には格子タタキがみられ、また404・410・411には凸面に高さ1cm程の粘土が貼り付けられている。いずれも小片のため断定はできないが、鴟尾の可能性はある。

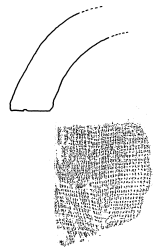
(服部芳人)



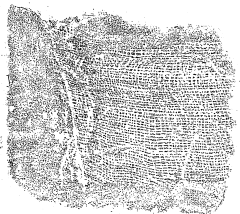
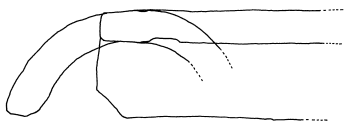
379



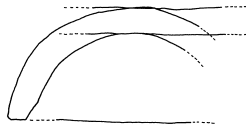
380



384



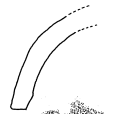
381



382



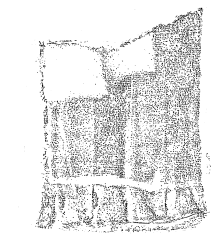
383



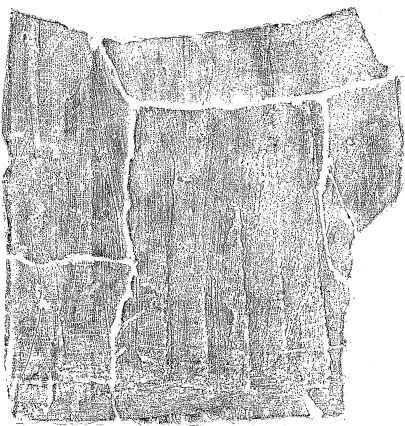
385



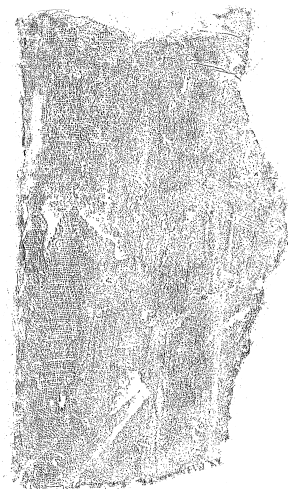
386



388



387



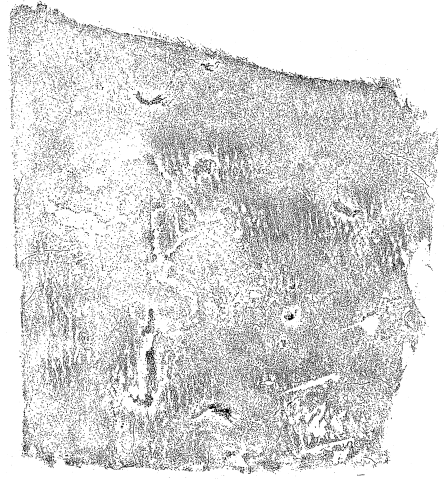
389



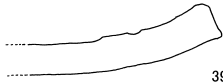
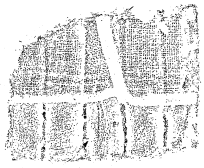
第38图 出土瓦実測図・拓影1 (1:4)



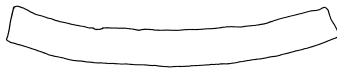
391



390



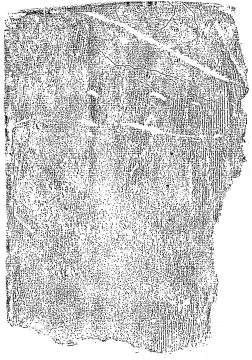
391



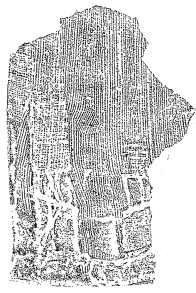
392



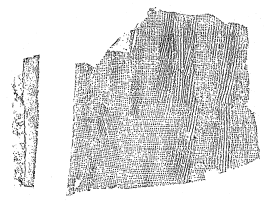
393



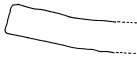
394



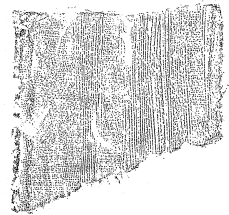
395



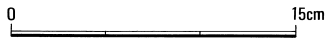
396



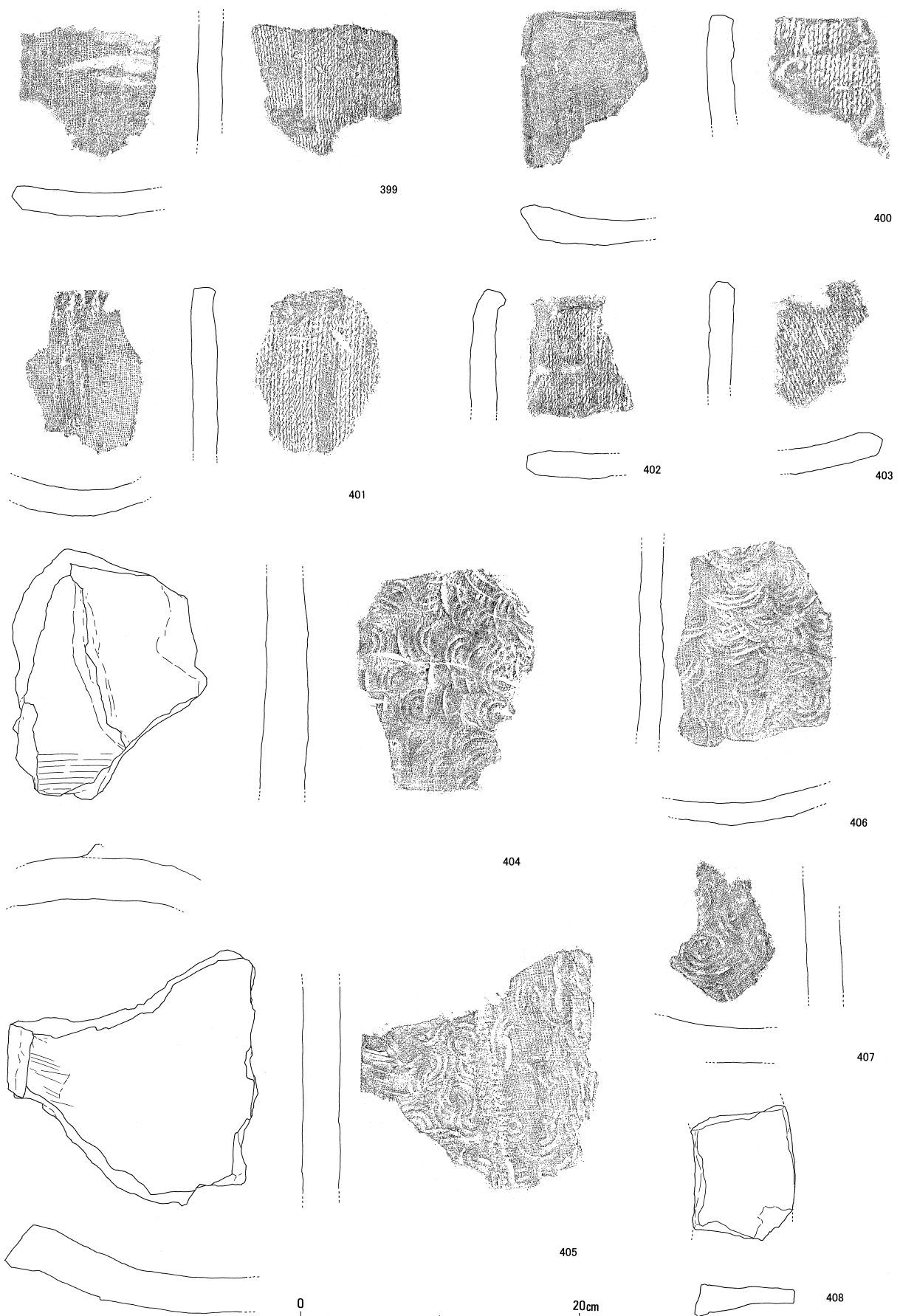
397



398



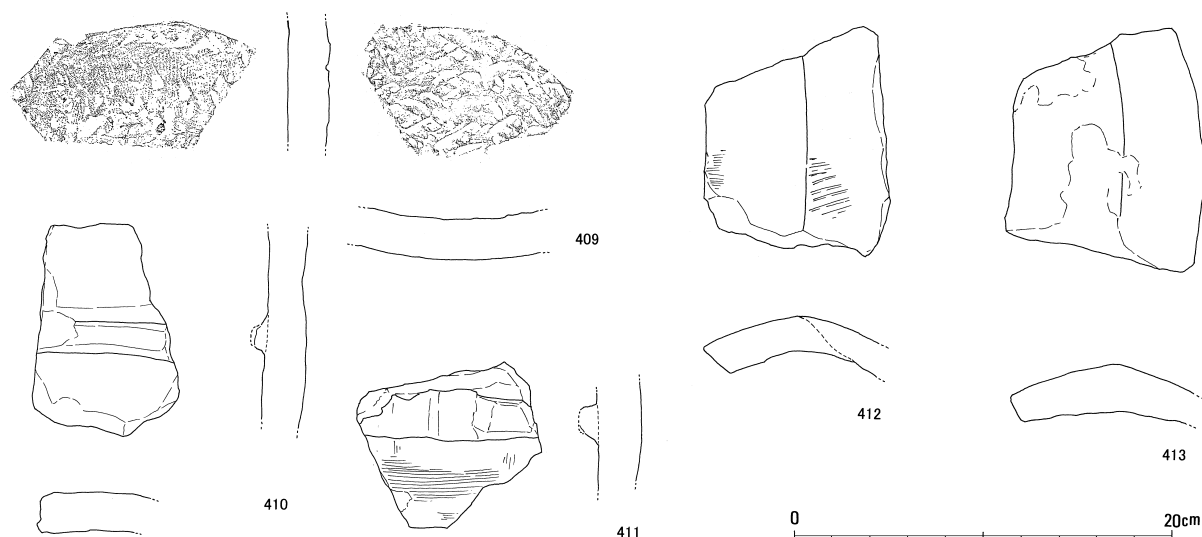
第39図 出土瓦実測図・拓影2 (1:4)



第40図 出土瓦実測図・拓影3 (1:4)

番号	登録番号	出土位置	成 形		側面ケズリ	厚さ	色 調	焼 成	備 考
			凸 面	凹 面					
381	096-01	B6 SD 1	平行タタキ後ナデ	布目 8本/cm	1回	1.7	褐灰	良好	隅切り
382	095-01	D 1 包含層	ナデ	布目 8~10本/cm	2回	1.5	褐灰	良好	
383	095-02	B10 SD 1	ナデ	布目 8本/cm	1回	1.5	赤褐	良好	
384	096-03	B10 SD 1	ナデ	布目 6本/cm	1回	1.9	暗橙	良好	
385	093-02	B9 SD 1	ナデ	布目10本/cm	1回	1.0	暗橙	良好	
386	086-01	C 8 SD 1	布目 7本/cm後ナデ	布目 7~10本/cm後ナデ	1回	1.5	灰	良好	
387	098-01	C 7 SD 1	ナデ・ヘラ状工具で掻き取る	布目 8~10本/cm後ナデ	1回	2.6	暗橙	良好	
388	101-02	D 4 SD 1	縄目タタキ後ナデ	布目 8本/cm後ナデ	1回	1.3	灰黄	良好	
389	103-01	D 2 SD 1	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ナデ	2回	2.4	淡黄	良好	
390	009-01	包含層	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ナデ	1回	1.9	灰白	やや軟	
391	102-01	D 4 SD 1	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ナデ	1回	1.6	淡黄橙	良好	
392	102-02	C 7 SD 1	ナデ	布目後ナデ	1回	1.8	淡黄橙	良好	熨斗瓦
393	101-03	C 7 SD 1	ナデ	布目10本/cm後ナデ	2回	1.0	灰白	良好	
394	097-01	D 4 包含層	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.8	淡黄橙	良好	
395	099-01	C 7 SD 1	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.7	灰	良好	
396	100-01	C 9 SD 1	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.4	灰白	良好	分割断面
397	099-02	D33 包含層	縄目タタキ後ナデ	布目 9本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.6	灰白	良好	
398	101-01	C 8 SD 1	縄目タタキ後ナデ	布目11本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.6	灰白	良好	
399	094-01	D 9 SD 1	縄目タタキ	布目 6本/cm	2回	1.8	淡黄橙	良好	
400	094-02	D31 SD49	縄目タタキ	布目 9本/cm	2回	1.8	暗黄橙	良好	
401	093-01	B12 包含層	縄目タタキ	布目 8本/cm	1回	1.8	灰	良好	
402	093-03	E 2 包含層	縄目タタキ	布目 6本/cm後ナデ	2回	1.8	暗橙	良好	
403	096-02	C 6 SD 1	縄目タタキ	布目後ナデ	2回	1.7	灰白	良好	
404	091-01	包含層		布目、同心円		2.2	青灰	良好	
405	090-01	B 6 包含層		布目、同心円		2.6	青灰	良好	
406	087-01	D 2 SD 1 第1層	ナデ	布目 8本/cm、同心円		1.5	灰	良好	
407	092-01	C14 包含層		布目、同心円		2.5	灰白	良好	
408	088-02	包含層	ナデ	ナデ、指圧痕		1.2	暗緑灰	良好	
409	087-02	E 7 SE11 第3層	格子タタキ	同心円		2.1	灰白	良好	
410	089-02	包含層	ナデ、工具のあたり			2.2	灰白	良好	
411	089-03	D 4 包含層				2.2	浅黄橙	良好	
412	088-03	C 5 SD 1 第2層	タタキ	ナデ	1回	1.8	灰	良好	粘土板繋ぎ痕
413	089-01	C 6 SD 1 第1層	タタキ	同心円	1回	2.4	灰	良好	

第13表 瓦一覧表



第41図 出土瓦実測図・拓影4 (1:4)

4 木製品

木製品はA地区のSD6およびSE11から出土した。

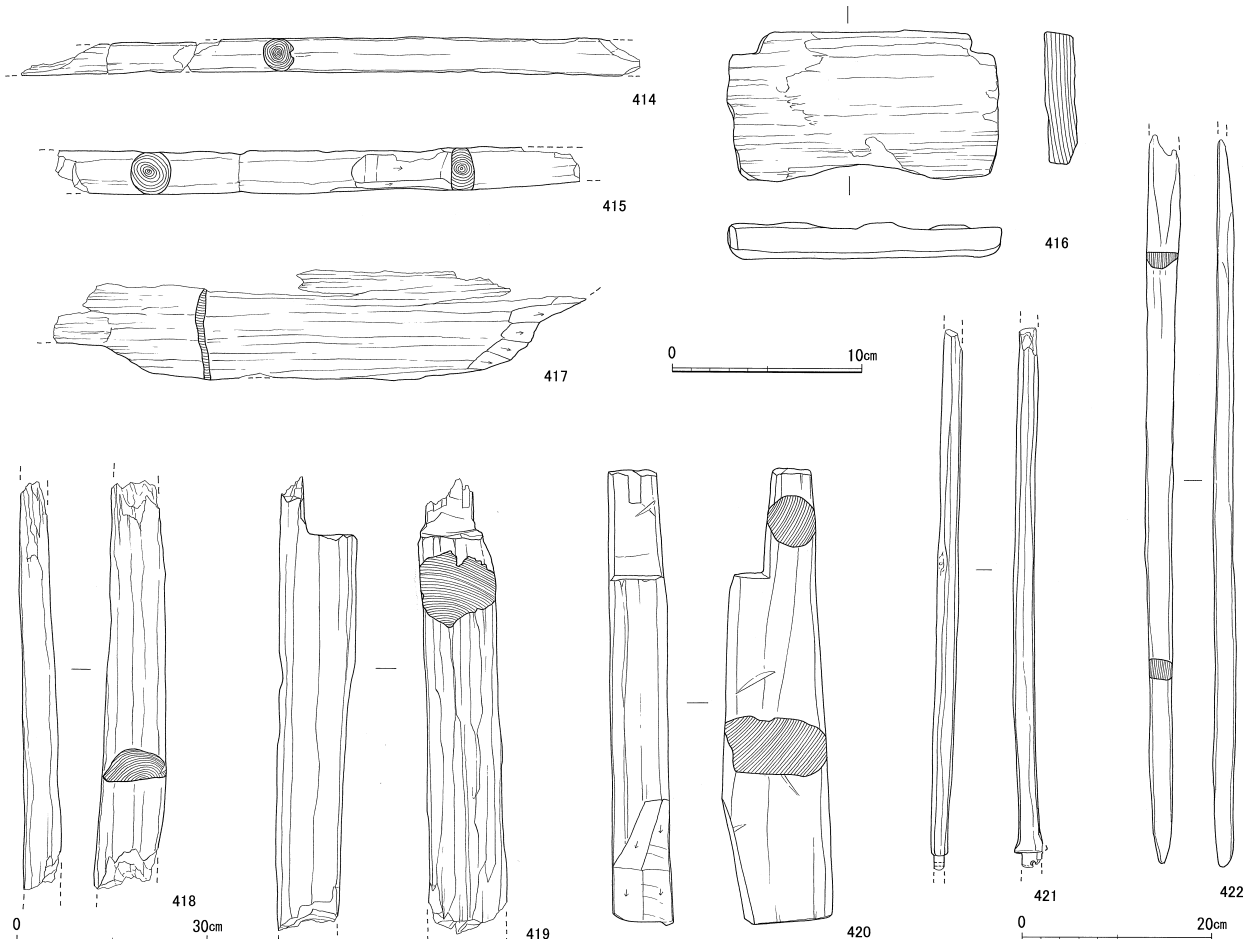
SD6出土遺物 棒 (414・415・422)、不明木製品 (416・417)、建築部材 (418~420)、杵 (421) がある。

SE11出土遺物 皿 (423)、蓋板 (424)、底板 (425~431)、檜扇 (432)、不明木製品 (433~435・437・438)、鞘 (436)、棒 (439~444)、櫛 (445) がある。櫛 (445) は、背部が直線的な形状であり、歯の数は8本/cmである。

(服部芳人・河北秀実)

番号	登録番号	名称	出土位置	法量 (cm)			木取り	樹種	備考
				長さ	幅	厚さ			
414	仮2	棒	E6 SD6	65.0	4.9	3.1	芯材	樹皮	加工痕あり
415	仮3	棒	E4 SD6(3層)	27.6	3.7	2.0	芯材		
416	仮4	不明	D2 SD6(3層)No.12	14.3	7.8	1.7	板目	スギ	
417	仮6	不明	E4 SD6(3層)No.39	27.8	5.7	1.0	板目	ヒノキ属	加工痕あり
418	仮9	建築部材	D2 SD6(3層)No.6	64.0	10.0	5.2	辺材	コウヤマキ	
419	仮5	建築部材	D2 SD6(3層)No.5	71.3	13.5	12.2	辺材		
420	仮7	建築部材	SD6(3層)No.2	48.0	10.7	6.0	辺材	ヒノキ属	
421	仮8	杵	E4 SD6(3層)No.38	55.7	2.8	1.7	辺材		
422	仮10	棒	D3 SD6(3層)No.14	76.5	3.4	1.8	板目	コウヤマキ	
423	仮26	皿	E7 SE11(3層)No.3、8	20.6	16.2	0.8	板目	スギ	削り物
424	仮25	蓋板	E7 SE11(3層)	11.5	11.7	1.0	板目	ヒノキ属	曲げ物、縁に孔あり(4つ)
425	仮23	底板	E7 SE11(2層)No.6	15.8	7.6	0.6	板目	ヒノキ属	曲げ物
426	仮17	底板	E7 SE11(3層)	15.7	1.9	0.6	板目	ヒノキ属	曲げ物
427	仮31	底板	E7 SE11(3層)	15.4	6.2	0.6	板目	ヒノキ属	曲げ物
428	仮29	底板	E7 SE11(3層)	15.1	4.8	0.7	板目	スギ	曲げ物
429	仮32	底板	E7 SE11(3層)	15.8	5.5	0.7	板目	スギ	曲げ物
430	仮13	底板	E7 SE11(3層)	14.9	6.0	0.7	板目	ヒノキ属	曲げ物
431	仮12	底板	E7 SE11(3層)	13.6	3.3	0.6	板目	ヒノキ属	曲げ物
432	仮33	檜扇	E7 SE11(3層)No.15	30.7	4.9	0.4	板目	針葉樹	孔あり

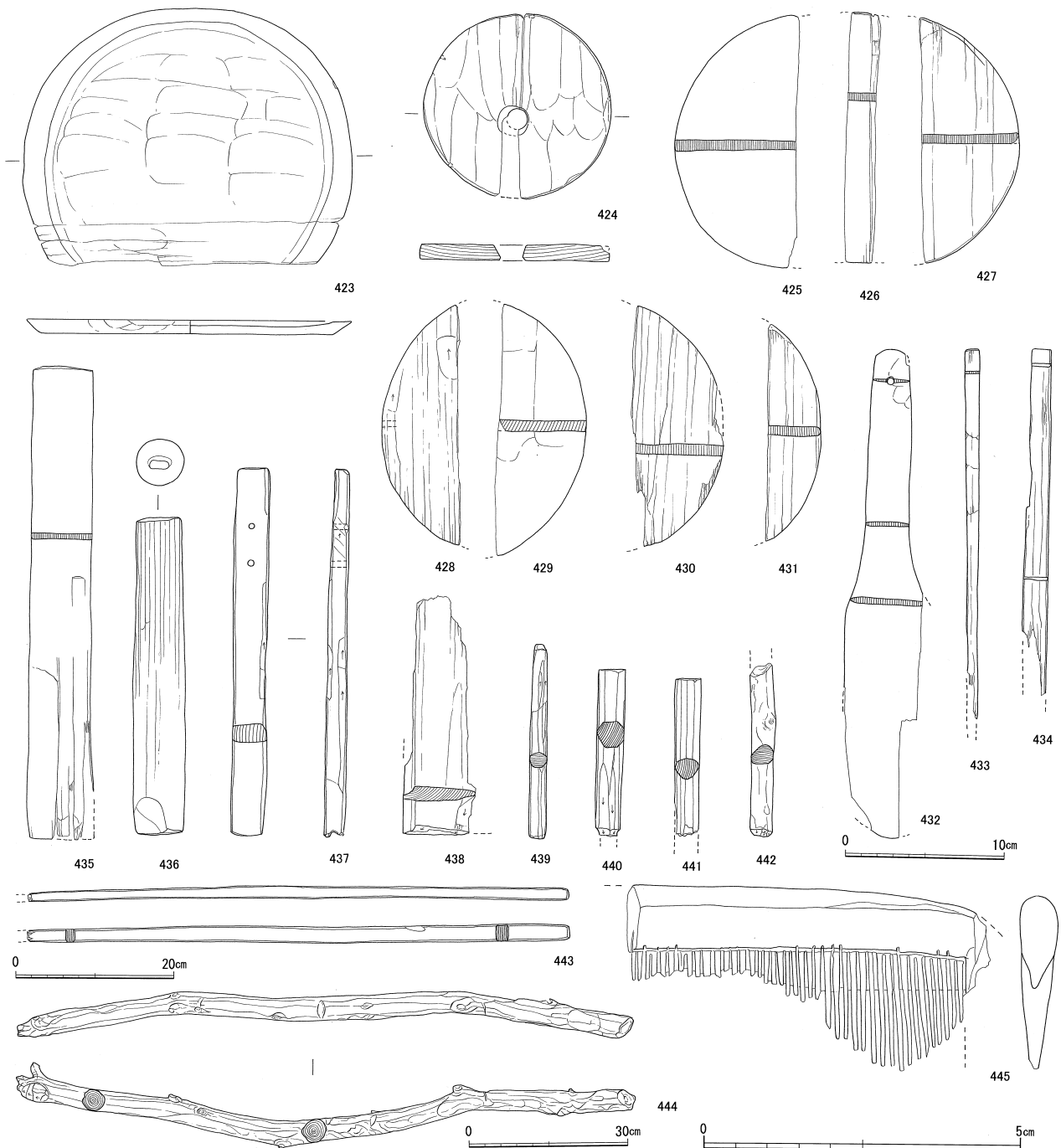
第14表 木製品観察表 (1)



第42図 出土木製品実測図1 (414・420~422は1:8, 415~417は1:4, 418・419は1:12)

番号	登録番号	名称	出土位置	法量 (cm)			木取り	樹種	備考
				長さ	幅	厚さ			
433	板18	不明	E7 SE11(3層)	23.2	0.9	0.1	柁目	ヒノキ属	
434	板11	不明	E7 SE11(3層)	21.7	1.6	0.2	柁目	ヒノキ属	
435	板28	不明	E7 SE11(3層)No.9	29.7	3.8	0.4	柁目	ヒノキ属	
436	板30	鞘	E7 SE11(3層)No.10	19.9	3.3	2.8	芯材?	広葉樹	刀子の鞘か?
437	板27	不明	E7 SE11(3層)	23.1	2.1	1.2	柁目	スギ	円孔あり(2つ)
438	板15	不明	E7 SE11(3層)	15.0	4.5	0.9	追柁目	スギ	
439	板24	棒	E7 SE11(3層)	12.2	1.1	1.0	辺材	スギ	面取りあり
440	板19	棒	E7 SE11(3層)	10.5	1.8	1.6	辺材	ヒノキ属	面取りあり
441	板20	棒	E7 SE11(3層)	9.9	1.7	1.3	辺材	ヒノキ属	面取りあり
442	板14	棒	E7 SE11(3層)	10.9	1.7	1.1	辺材	広葉樹	面取りあり
443		棒	E7 SE11(3層)No.27	67.7	2.0	1.4	辺材	スギ	
444		棒	E7 SE11(2層)	115.1	3.9	3.8	芯材	マツ属複雑管束亜属	
445	板22	櫛	E7 SE11(4層)	5.7	2.8	0.6			8本/cm

第15表 木製品観察表 (2)



第43図 出土木製品実測図2 (423~442は1:4, 443は1:8, 444は1:12, 445は1:1)

V 結語

1 掘立柱建物群

掘立柱建物は、A地区で13棟、B地区で11棟、C地区で3棟検出した。これらの建物のうちA地区の12棟とB地区の8棟については、出土遺物、柱穴の切り合い関係、棟方向、柱筋の関係、建物間の距離などを検討して、第I～IV期に分けた。

第I期はA地区のS B 102・108、B地区のS B 115・119の4棟で、棟方向はN24～26°Wである。出土遺物は土師器・須恵器の小片であるが、S B 102が奈良時代の竪穴住居SH26を切っており、第I期の時期は奈良時代としておくのが妥当であろう。

第II期はA地区のS B 104・106・110～112、B地区のS B 116・118の7棟で、棟方向はS B 104・106・111・116・118がN26～28°Wまたはそれに直交しており、S B 110・112がN33°Wまたはそれに直交している。飛鳥時代および奈良時代の遺物が出土しているが、第II期の時期については奈良時代と考えられる。

第III期はA地区のS B 101・103・107・109、B地区のS B 117・121・122の6棟で、棟方向はN27～30°Wまたはそれに直交しているが、S B 103のみN23°Wと少し振れる。A地区の建物からの出土遺物の時期は奈良時代であり、B地区S B 122のそれは奈良時代から平安時代前半である。したがって、第III期の具体的な時期については、A地区のS B 101・103・107・109を第III a期として奈良時代末頃、B地区のS B 117・121・122を第III b期として平安時代前半と、少し時期幅をもって考えるのが妥当であろう。なお、S B 121とS B 122は建て替えであり、B地区の中でさらに二時期に分かれると考えられる。

第IV期はA地区のS B 105、B地区のS B 123の2棟であるが、棟方向が異なっており、さらに時期が分かれる可能性がある。第IV期の時期については、出土遺物から平安時代中頃と考えた。

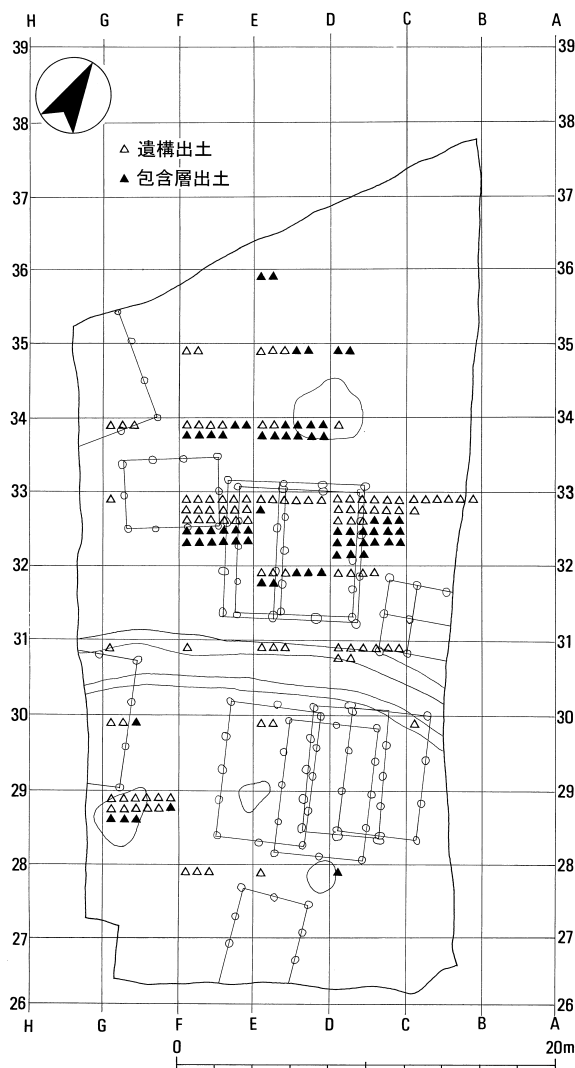
I～IV期の建物は、N22～35°Wの範囲内で収まるものであり、規模が比較的大きく、しかも整然と計画性をもって建てられている。これらの建物に対して、B地区北端のS B 124とC地区S B 125～127

の4棟は方位を異にしており、時期差があるか、あるいは性格の異なる建物群であろう。

2 製塩土器

B地区では、志摩式製塩土器が多数出土した。図示したのは9点(370～378)であるが、細片も含めると遺構からは93点、包含層からは73点、計166点が出土した。出土分布状況を第44図に示したが、S B 121～123の柱穴やその上面の包含層から多く出土している。

志摩式製塩土器は志摩地方で生産され塩とともに消費地に流通するものであるが、その多くは伊賀地方や中南勢地方の奈良・平安時代の集落跡で出土している。志摩式製塩土器についてはいくつかの研究⁽¹³⁾があるが、消費地では竪穴住居や土坑から出土する例が多いとされている。窪田大垣内遺跡でもや



第44図 製塩土器出土分布図 (1:400)

はり土坑から出土しているが、掘立柱建物やその周辺からも多数出土しており、消費地における製塩土器の使用や廃棄の実態を考えるうえでの一資料となった。

3 周辺の遺跡と古代集落

窪田大垣内遺跡では棟方向が揃った奈良・平安時代の掘立柱建物を検出した。また、遺物では官衙遺跡で多数出土するといわれている緑釉陶器、ヘラ書き土器、墨書土器、円面硯、土馬などのいわゆる特殊遺物や瓦が出土した。同時代の掘立柱建物群やこうした遺物は、近隣の安養院跡、橋垣内遺跡、六大B遺跡、六大A遺跡でも確認されている。

安養院跡⁽¹⁴⁾では奈良・平安時代の掘立柱建物が検出されており、緑釉陶器耳皿や円面硯なども出土している。安養院跡の建物群のなかには棟方向が窪田大垣内遺跡の建物とほぼ一致するものもあり、一連の遺跡と考えてよいであろう。

六大B遺跡⁽¹⁵⁾では、奈良～平安時代の大型の掘立柱建物が多数検出されており、特に平安時代前半の建物がその規模、棟数とも卓越している。また、出土遺物も円面硯、土馬、墨書土器、刻書土器、緑釉陶器、石帯、瓦、ミニチュア土器などがある。こうしたことから古代官衙関連遺跡と考えられており、地方の富豪層の居館もしくは下級官衙と想定されている。

橋垣内遺跡⁽¹⁶⁾では、古代の掘立柱建物が検出されたが、飛鳥時代から奈良時代を中心とした建物群である。円面硯、陶馬、墨書土器なども出土している。

六大A遺跡⁽¹⁷⁾では、奈良～平安時代の大型の掘立柱建物が多数検出されている。出土遺物も円面硯、土馬、墨書土器、瓦、緑釉陶器などがある。

大里窪田町一帯の古代集落や郡衙等の問題については既刊の報告書⁽¹⁸⁾で検討されているが、当地域での発掘調査が一段落した現在、窪田大垣内遺跡も含めて、掘立柱建物の規模、規格性、方位や位置関係などを今一度、整理して総合的に検討する必要がある。

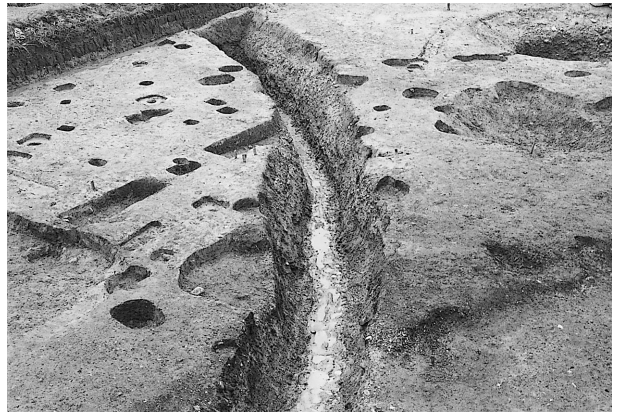
(服部芳人・河北秀実)

〔註〕

- (1) 三重県教育委員会『大和街道伊勢別街道伊賀街道 一歴史の道調査報告書一』1983
 - (2) 三重県埋蔵文化財センター『橋垣内遺跡(県道A～C地区)発掘調査報告 研究紀要第18-3号』2009
 - (3) 三重県埋蔵文化財センター『窪田大垣内遺跡(第2次)発掘調査報告』1997
 - (4) 三重県埋蔵文化財センター『窪田大垣内遺跡(第3次)・管ヶ谷古墳群発掘調査報告』1997
 - (5) 津市教育委員会『安養院跡発掘調査報告』1990
 - (6) 主なものには下記の文献がある。
 - a. 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報 III』1991
 - b. 〔註〕(3)に同じ
 - c. 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路(9工区)建設事業に伴う 橋垣内遺跡発掘調査報告』1997
 - d. 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う 六大A遺跡発掘調査報告』2002
 - e. 〔註〕(2)に同じ
 - (7) a. 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う 六大A遺跡発掘調査報告(木製品編)』2000
 - b. 〔註〕(6)dに同じ
 - c. 三重県埋蔵文化財センター『六大A遺跡発掘調査報告 一資料分析・遺物観察表・写真図版編一』2003
- (8) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路(9工区)建設事業に伴う 六大B遺跡(B～I地区)発掘調査報告』2006
 - (9) a. 〔註〕(6)cに同じ
 - b. 〔註〕(2)に同じ
- (10) 〔註〕(5)に同じ
 - (11) 田辺昭三『陶邑古窯址群 I』平安学園考古クラブ 1966
 - (12) 灰釉陶器の編年については、主として下記の文献を参考にした。
 - a. 榑崎彰一ほか『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(I)』愛知県教育委員会 1980
 - b. 藤澤良祐「瀬戸古窯址群 I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 I』瀬戸市歴史民俗資料館 1982
 - c. 斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『月刊 考古学ジャーナルNo211』ニュー・サイエンス社 1982
 - d. 榑崎彰一ほか『愛知県古窯跡群分布調査報告(III)』愛知県教育委員会 1983
 - (13) a. 新田洋「三重県における製塩に関する予察(1)」『三重考古 第3号』1980
 - b. 山本雅靖「志摩式製塩土器考」『考古学論集 第3集』1990
 - c. 野口美幸「内田遺跡出土の志摩式製塩土器」『Mie history vol.6』三重歴史文化研究会 1993
 - d. 萩原義彦「伊勢における製塩土器について」『研究紀要 第14号 一創立15周年記念論文集一』三重県埋蔵文化財センター 2005
- (14) 〔註〕(5)に同じ
 - (15) 〔註〕(8)に同じ
 - (16) a. 〔註〕(2)に同じ
 - b. 〔註〕(6)cに同じ
 - (17) 〔註〕(6)dに同じ
 - (18) 〔註〕(6)cに同じ



A地区全景（北上空から）



SD 6（東から）



SD 6 西壁土層断面図（東から）



SD 6 木製品出土状況（東から）



SH 26（東から）



SB 102~105（南から）



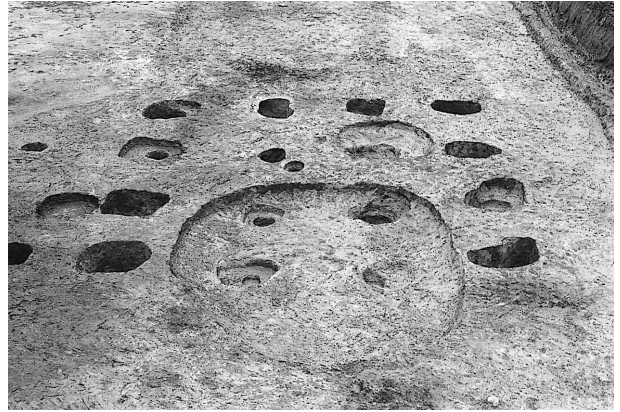
SB 108・109・111（南から）



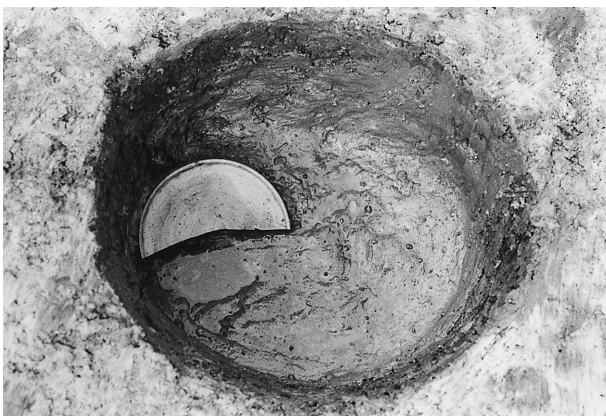
SB 101（南から）



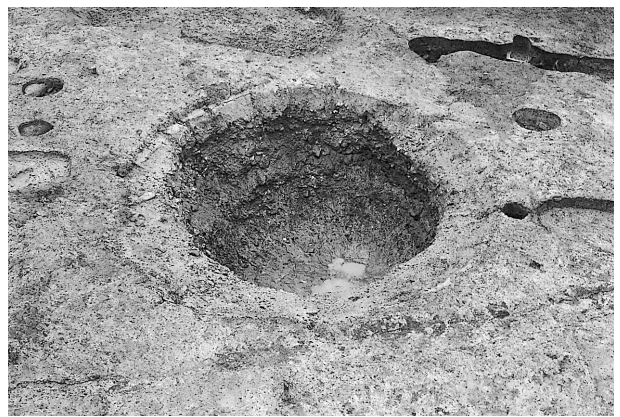
SB106・107 (南から)



SB110, SK34 (南から)



E24pit1 遺物出土状況 (西から)



SE11 (西から)



B・C地区全景 (北上空から)



SB115~119, SD49・51 (東から)



SB121・122 (東から)



SB122 pit遺物出土状況 (西から)



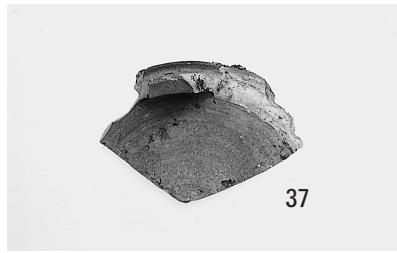
2



35



36



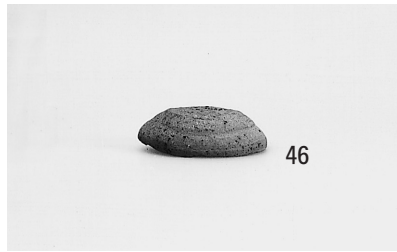
37



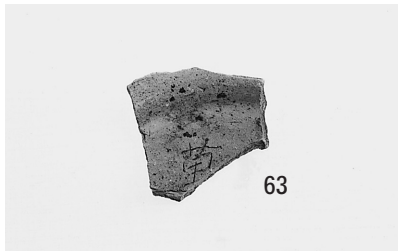
38



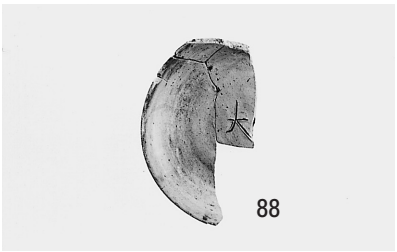
44



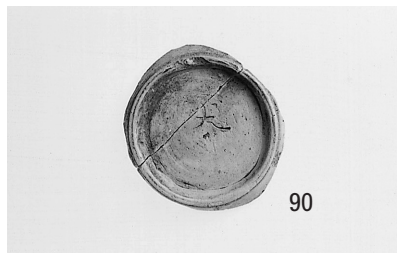
46



63



88



90



100



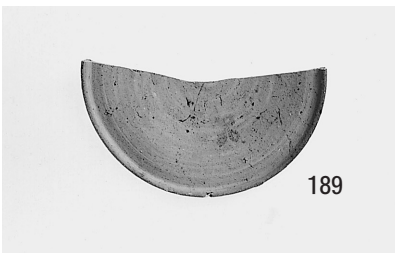
122



132



166



189



257



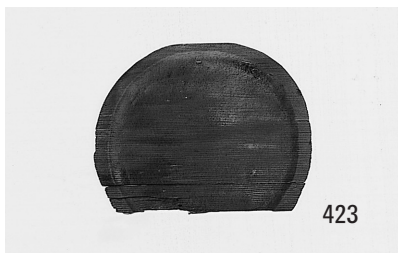
259



268



379



423



445

報告書抄録

ふりがな	くぼたおおがいといせき（だいいちじ）はくつちようさほうこく							
書名	窪田大垣内遺跡（第1次）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	研究紀要							
シリーズ番号	18-5							
編著者名	服部芳人・山口順也・河北秀実							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 2009年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
くぼたおおがいといせき 窪田大垣内遺跡	みえけんつし 三重県津市 おおざとくぼたちょうあざいけのした 大里窪田町字池の下	201	a 813	34度 45分 50秒	136度 29分 31秒	19930506～ 19931216	3,150	平成5年度主要地方道津 関線道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
窪田大垣内遺跡	集落跡	古墳～平安時代	竪穴住居・掘立柱建物 井戸・溝・土坑		土師器・須恵器・陶器 円面硯・土馬・瓦・ 木製品			
要約	奈良～平安時代の掘立柱建物を26棟検出し、出土遺物や棟方向などから、時期変遷を追うことができた。出土遺物には、土馬、円面硯、墨書土器、瓦などがある。							

窪田大垣内遺跡（第1次）発掘調査報告

研究紀要第18-5号

2009(平成21)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社

